狭山市文化財報告17

狭山市埋蔵文化財調査報告書9

沢台遺跡
高根遺跡
八木遺跡

1990
埼玉県狭山市教育委員会

狭山市文化財報告17

狭山市埋蔵文化財調査報告書9

沢台遺跡
高根遺跡
八木遺跡

1990
埼玉県狭山市教育委員会

序

狭山市は、関東平野のほぼ中央に位置し、埼玉県南西部に当たる武蔵野丘陵地帯にあります。

地形的には、名栗村から発して荒川に注ぐ入間川が市域の中央やや北寄りを貫流し、市街地を二分して河岸段丘を形成しています。この河岸段丘上は、概ね平坦地で畑地と武蔵野の平地林で形成されており、遺跡分布調査の結果67か所の遺跡の所在が確認されています。

昭和50年代に入り、開発に伴う宅地造成等が遺跡の所在地に多くなってきたことに対応して遺跡の保護のため発掘調査を行って記録保持を実施しているところです。本書は、昭和59・62年に発掘調査を実施した3遺跡の記録保存の報告書です。ここに、その成果を明らかにして広く市民各位及び研究者のご指導、ご助言を仰ぐ次第です。

最後に、遺跡の発掘調査をご快諾いただいた土地所有者、地元関係者各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

狭山市教育委員会

教育長　武居富雄

例　言

1. 本書は、昭和59年度から昭和62年度までの間に公共事業に伴い発掘調査を実施した3遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理・報告書刊行にあったては市費を充当した。
3. 発掘調査及び整理期間は、昭和59年3月30日から平成2年2月10日である。
4. 各調査の文化庁通知は、以下のとおりである。

   沢台遺跡　昭和59年7月5日付　59委保記第2－1239号

   高根遺跡　昭和59年11月15日付　59委保記第2－3456号

   八木遺跡　昭和62年12月10日付　62委保記第2－3906号
5. 発掘調査は、狭山市教育委員会が主体となり、小渕良樹が担当した。
6. 本書の執筆は、調査担当者と水越佳宏が行い、図版の作成は執筆者及び整理協力員が行った。遺構・遺物の写真撮影は調査担当者と調査員が行った。
7. 本書の編集は、狭山市教育委員会で行った。
8. 調査及び整理・報告書の刊行にあたっては、次の皆様方から有益な御指導、御教示を承りました。ここに謝意を表する。

   財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　飯田充晴　鹿嶋英明　斎藤裕司　曽根原裕明　中平　薫　中村倉司　増田正博　埼玉県文化財保護課

調査員

今井正美　仲山英樹

調査協力員

石原千鶴子、犬竹幸善、今坂友生、大場啓子、岡野　稔、勝田　茂、金子ハル子、甲田善徳、小林正明、桜井ハル、桜井　登、須田幸三、関田末三、高橋　聡、田口文枝、田中きみ子、田中トキ、豊泉貞次、中村好子、中山岳彦、西留幸子、平山　勝、福永弘幸、古谷巳之助、船木晃江、穂満みち子、堀美智子、宮野将仁、山岸義造、山本とし子、山本美津江、吉野博明

整理協力員

今坂友生、犬竹幸善、岡野　稔、甲田善徳、小林正明、斉藤通子、竹内千代子、新村志保、平山　勝、福永弘幸、船木淳子、三浦良子、水越佳宏、水村弘子、宮野将仁、本吉明子、山川淑恵、山崎武、山崎好子、吉野博明

目　　次

序

目　次

挿図目次

写真目次

第１章　発掘調査に至る経過 …… 1

第１節　沢台遺跡 …… 1
第２節　高根遺跡 …… 1
第３節　八木遺跡 …… 1

第２章　狭山市及び周辺遺跡の立地と環境 …… 3

第３章　沢台遺跡の調査 …… 5

第１節　遺跡の概要 …… 5
第２節　調査経過 …… 6
第３節　遺構と遺物 …… 6

第４章　高根遺跡の調査 …… 13

第１節　遺跡の概要 …… 13
第２節　調査経過 …… 14
第３節　遺構と遺物 …… 16

第５章　八木遺跡２次の調査 …… 47

第１節　遺跡の概要 …… 47
第２節　調査経過 …… 48
第３節　遺構と遺物 …… 50

第６章　結　語 …… 57

挿図目次

第 1 図　狭山市及び周辺の遺跡（1/50000）
第 2 図　沢台遺跡周辺地形図（1/5000）
第 3 図　沢台遺跡全測図（1/500）
第 4 図　土壙（1/60）1
第 5 図　土壙（1/60）2
第 6 図　出土遺物（1/3）
第 7 図　高根遺跡周辺地形図（1/5000）
第 8 図　高根遺跡全測図（1/600）
第 9 図　第1号住居跡（1/60）
第10図　土器出土状態図（1/30）
第11図　土壙（1/60）
第12図　出土遺物（1/3）　1
第13図　出土遺物（1/3）　2
第14図　出土遺物（1/3）　3
第15図　出土遺物（1/3）　4
第16図　出土遺物（1/3）　5
第17図　出土遺物（1/3）　6
第18図　出土遺物（1/3）　7
第19図　出土遺物（1/3）　8
第20図　出土遺物（1/3）　9
第21図　出土遺物（1/3）10
第22図　出土遺物（1/3）11
第23図　出土遺物（1/3）12
第24図　出土遺物（1/3）13
第25図　出土遺物（1/3）14
第26図　出土遺物（1/3）15
第27図　出土遺物（1/3）16
第28図　出土遺物（1/3）17
第29図　出土遺物（1/3）18
第30図　出土遺物（1/2）19
第31図　出土遺物（1/2）20
第32図　出土遺物（1/2）21
第33図　出土遺物（1/2）22
第34図　出土遺物（1/2）23
第35図　八木遺跡周辺地形図（1/5000）
第36図　八木遺跡全測図（1/300）
第37図　第1号住居跡（1/60）
第38図　第1号住居跡遺物出土状態図（1/60）
第39図　第1号埋甕（1/30）
第40図　出土遺物（1/3）　1
第41図　出土遺物（1/3）　2
第42図　出土遺物（1/3）　3
第43図　出土遺物（1/3）　4
第44図　出土遺物（1/3）　5
第45図　出土遺物（1/3）　6

図版目次

図版 1　沢台遺跡調査区全景
図版 2　沢台遺跡土壙
図版 3　沢台遺跡土壙
図版 4　沢台遺跡土壙
図版 5　高根遺跡調査区全景
図版 6　高根遺跡調査区全景
図版 7　高根遺跡1号住居跡
図版 8　高根遺跡土壙
図版 9　高根遺跡出土遺物
図版10　高根遺跡出土遺物
図版11　八木遺跡全景　1号住居跡
図版12　八木遺跡1号埋甕　出土土器

第1章　発掘調査に至る経過

第1節　沢台遺跡

昭和57年、狭山市に10番目の中学校建設が決定され、その予定地として沢台遺跡を含む土地が選定された。昭和58年1月に教育委員会総務課から遺跡の所在について照会があり、昭和58年3月に社会教育課で確認調査を実施した。その結果、縄文土器の破片及び遺構を検出したので、その旨を総務課に回答するとともに発掘調査の必要があることを通知した。

その後、協議を行い、教育委員会の直営事業として発掘調査を社会教育課が主管となり実施することが決定した。

昭和58年5月2日付狭教総発第53号で総務課から文化庁あての発掘通知が提出され、社会教育課が昭和59年3月9日付狭教社発第55号で文化庁あて発掘調査通知を提出して諸手続きを終了。昭和59年3月30日から発掘調査を開始した。

第2節　高根遺跡

昭和59年5月1日付で建設部長から、智光山公園内のこども動物園建設予定地内に埋蔵文化財の所在について照会があった。これを受けて教育委員会では遺跡台帳と照合の結果、埋蔵文化財の包蔵地に入っていることが明らかとなった。智光山公園は、大部分が山林におおわれており現地調査が充分にできなかった所であるため、確認調査を実施することにした。昭和59年5月21日から26日の期間にバックホーを導入して、予定地内に40本のトレンチを入れた。その結果、縄文時代中・後期の遺物が集中する地点と、遺物・遺構が存在しない地点とを確認した。その結果をもとに地形等を考慮して遺跡の範囲を確定し、昭和59年7月18日付で建設部長あて回答した。

その後、建設部緑地街路課と協議をかさね、調査区を建物及び埋設管の設置予定地に限定し、他を保存区とすることにした。

昭和59年7月18日付狭緑発第123号で建設部緑地街路課から、教育委員会社会教育課あてに発掘調査の依頼があった。発掘調査を実施するための諸手続きを済ませ、昭和59年8月15日から発掘調査を開始した。

第3節　八木遺跡

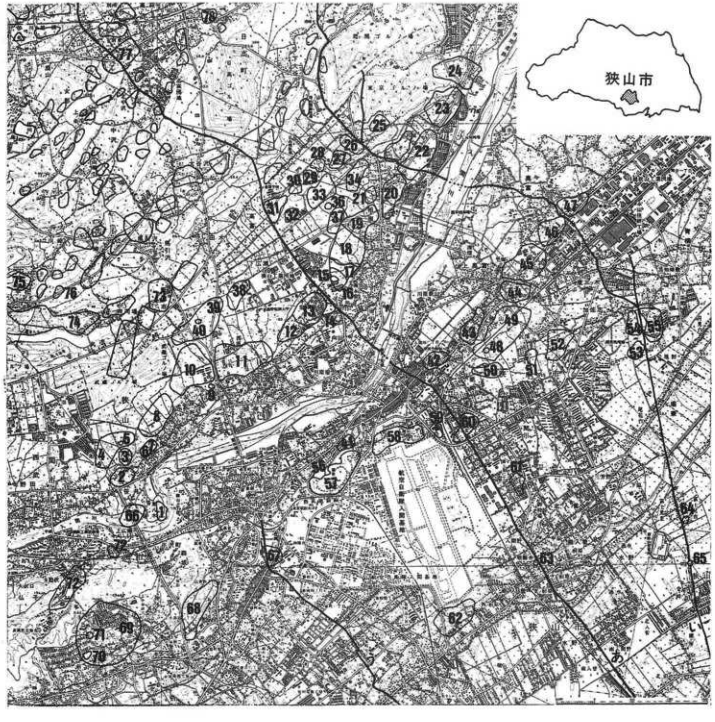
昭和62年8月に笹井地内八木地区に自治会館建設計画があることを、経済環境部農務課から通知があった。遺跡台帳と照合したところ八木遺跡の範囲内にあることが判明した。そこで、発掘調査の必要性を説明、その手続きをするように回答した。

昭和62年8月13日付で狭山市教育委員会教育長あてに狭山市長から埋蔵文化財確認調査の依頼があった。これを受けて社会教育課が昭和62年8月19日から26日にかけて確認調査を実施し、縄文時代の住居跡1軒を確認した。この結果を農務課に報告し、協議を開始した。

協議の結果、発掘調査を教育委員会社会教育課で実施することが決定した。昭和62年8月27日付狭農発第334号で文化庁あて発掘通知が提出され、昭和62年8月31日付狭教社発第183号で発掘調査通知を文化庁あて提出して諸手続きを終了、昭和62年9月1日から発掘調査を開始した。

遺跡名	遺跡名	遺跡名
1 東八木窯跡群（22049）	28 上の原東遺跡（22065）	55 台　遺　跡（22085）
2 八　木　遺　跡（22068）	29 上の原西遺跡（22063）	56 稲荷山公園古墳群（22052）
3 八木北遺跡（22021）	30 半貫山遺跡（22061）	57 稲荷山公園遺跡（22051）
4 八木上遺跡（22022）	31 稲荷山遺跡（22058）	58 石無坂遺跡（22083）
5 沢口上古墳（22020）	32 前　山　遺　跡（22059）	59 富士見西遺跡（22082）
6 笹井古墳群（22019）	33 高　根　遺　跡（22062）	60 富士見北遺跡（22072）
7 沢　口　遺　跡（22080）	34 町久保遺跡（22034）	61 富士見南遺跡（22081）
8 宮　地　遺　跡（22018）	35 宮　原　遺　跡（22017）	62 町屋道遺跡（22088）
9 金　井　遺　跡（22071）	36 下双木遺跡（22078）	63 七　曲　井（22046）
10 金井上遺跡（22023）	37 上双木遺跡（22077）	64 堀兼之井（22047）
11 上広瀬上ノ原遺跡（22005）	38 上広瀬西久保遺跡（22073）	65 八軒家の井（22076）
12 霞ヶ丘遺跡（22004）	39 東久保遺跡（22070）	66 八木前遺跡（22087）
13 今　宿　遺　跡（22002）	40 西久保遺跡（22069）	67 金堀沢遺跡（入間市）
14 上広瀬古墳群（22001）	41 上諏訪遺跡（22086）	68 坂東山遺跡（入間市）
15 森ノ上西遺跡（22079）	42 滝祇園遺跡（22066）	69 東金子窯跡群（入間市）
16 森ノ上遺跡（22008）	43 峰　遺　跡（22024）	70 新久窯跡群（入間市）
17 富士塚遺跡（22009）	44 戸張遺跡（22026）	71 八坂前窯跡群（入間市）
18 鳥ノ上遺跡（22010）	45 揚櫨木遺跡（22027）	72 前内出窯跡群（入間市）
19 小山ノ上遺跡（22011）	46 坂　上　遺　跡（22029）	73 芦苅場遺跡（飯能市）
20 御所の内遺跡（22012）	47 稲荷上遺跡（22032）	74 張摩久保遺跡（飯能市）
21 英　遺　跡（22074）	48 上中原遺跡（22089）	75 中　原　遺　跡（飯能市）
22 城ノ越遺跡（22013）	49 中　原　遺　跡（22025）	76 ヤタリ遺跡（飯能市）
23 宮ノ越遺跡（22016）	50 沢　台　遺　跡（22079）	77 若宮遺跡（女影廃寺を含む）（日高町）
24 字　尻　遺　跡（22075）	51 沢久保遺跡（22041）	78 宿　東　遺　跡（日高町）
25 丸　山　遺　跡（22037）	52 下向沢遺跡（22042）	あ 鎌倉街道上道（本　道）
26 金井林遺跡（22035）	53 吉　原　遺　跡（22067）	い 鎌倉街道上道（堀兼道）
27 鶴　田　遺　跡（22044）	54 下　向　遺　跡（22085）	う 鎌倉街道上道枝道

図中における日高町所在の遺跡は『日高町遺跡分布調査報告書』（中平1980）に、飯能市所在の遺跡は『飯能市遺跡分布地図』（曽根原1983）・『飯能・遺跡（1）』（曽根原1984）によった。なお鎌倉街道上道の道筋は埼玉県教育委員会『鎌倉街道上道』において推定されたものを記載した。



第1図　狭山市及び周辺の遺跡図（1/50,000）

第2章　狭山市及び周辺遺跡の立地と環境

狭山市は、埼玉県南西部に位置する人口15万人の都市である。主要交通路は、鉄路では西武新宿線、道路では国道16号線と国道299号線がある、市の主要産業は農業であったが、昭和37年に川越・狭山工業団地、昭和46年に狭山工業団地が造成され、現在では、工業製品出荷額が埼玉県第1位をほこる工業都市となっている。このなかで、東京環状線として機能している国道16号線が重要な位置を占めている。また、副都心新宿に約50分で行ける便利さは、東京方面への通勤圏として住宅適地となっている。

〈立地〉

埼玉県の地形は、西部の山岳地から順次標高を下げ、武蔵野台地等を経て東部の低地へと続く。中央部の台地は、山地から流れだす中小河川によって浸触され、多くの河岸段丘を形成している。入間川もその一つで、市内では武蔵野台地を開析して南部の狭山市街地をのせる段丘（武蔵野台地）と、北部の広瀬・柏原地区等をのせる段丘（入間台地）を形成している。入間川の流れは、南西から北東に向いており、水富地区から開析谷の幅を徐々に広げ、川越市の落合橋付近で南東流してくる越辺川と合流する。河岸段丘は、南側で3段、北側では2段であり、上流の笹井では3段となっている。

狭山市南部では、入間川とおおむね同方向に流れる不老川に開析された地形を呈しているが、冬の渇水期には流れがなくなり、開析の度合は進んでいない。

段丘上は、ほぼ平坦であるが微地形は複雑で、入間川の流れと同方向に埋没谷がいくつかみられる。段丘崖は急傾斜を呈し、湧水が認められる所もいくつかある。遺跡は、各時代を通じてこの段丘崖に沿って認められる。

〈狭山の遺跡〉

当市には、67か所の遺跡が所在する。時代別の遺跡数は、旧石器時代4、縄文時代44、古墳時代6、奈良・平安時代41である。遺跡の大半は、入間川の両岸段丘上に立地する。（増田他1986）。右岸は、入間川町の市街地をのせる段と入間基地をのせる段の2段に遺跡が所在し、左岸は笹井地区では3段に所在し、他は最上段に立地する。入間川流域以外では、左岸段丘の奥にある智光山公園を水源とする小河川の両岸に11遺跡が集中している。遺跡の時代別立地状況の特色は、特に認められない。次に各時代について概観する。

旧石器時代

遺物は、表採資料で数点発見されている。森ノ上西⑮・上中原の両遺跡では、ナイフ形石器が発見されている。

縄文時代

時代別では、草創期2、早期3、前期19、中期37、後期16、晩期0である。草創期は、上広瀬上ノ原⑪・下並木の両遺跡で尖頭器が発見されている。早期は、昭和44年に調査が実施された今宿遺跡⑬（小渕1987）で茅山式期の野外炉が発見されている。前期は、昭和56年調査を実施した揚櫨木遺跡で、黒浜期の住居跡を9軒検出し、多量の土器と石器が出土した。中期は、前期の揚櫨木遺跡と昭和46・56年に調査を実施した宮地遺跡⑧で住居跡61軒と敷石住居跡3軒、土壙多数を検出し

た。宮地遺跡では、勝坂期から加曽利ＥⅣ期までの時期があり、環状集落を呈している。後期は、高根遺跡の調査で堀ノ内期の包含層を検出し、多量の土器が出土している。

古墳時代

古墳群が3か所と集落跡が確認されている。昭和56年に調査を実施した滝祇園遺跡（小渕1983）では、後期の鬼高期に属する住居跡を1軒検出している。古墳は、昭和53年の笹井古墳群で半地下式構造を呈するものが1基検出されている。他にも、上広瀬古墳群⑭・稲荷山公園古墳群で工事等で半地下式構造の古墳が発見されている。

昭和63年に市営住宅の立て替えに伴い上広瀬古墳群の一部を発掘調査したところ、古墳5基を検出した。いずれも埋葬施設は地下に石室を構築している。石室から鉄製の直刀、鏃、刀子、ガラス製小玉、水晶製切子玉などが出土している。

奈良・平安時代

この時代は、狭山市で特に遺跡が多いところで、入間川の両岸台地上は当該期の遺跡がほとんどである。調査した遺跡も多く、宮地、上広瀬上ノ原（小渕1985）・今宿・森ノ上・富士塚⑰・小山ノ上⑱・城ノ越㉒（増田1978、小渕1985）・宮ノ越（駒見1982）・揚櫨木（小渕1986）・稲荷山の10遺跡がある。検出した遺構は、竪穴住居跡が254軒、掘立柱建物跡が55棟、墳墓6基である。

鎌倉時代以降

城館関係では、入間川左岸に城山砦跡（郭の一部）が所在する。現在、土塁と堀に囲まれた一郭が遺存している、ここから上流1kmの地点に小山ノ上遺跡⑱で検出した堀が所在する。このほかには、武蔵野台地に特徴的にみられる深井戸が七曲井・堀兼之井・八軒家の井の3基所在する。七曲井は、昭和45年に発掘調査を実施してロート状の掘り方と井桁を検出、多量の陶磁器が発見されている。これらの井戸は、埼玉県教育委員会が実施した歴史の道の調査で確認された鎌倉街道に隣接しており、この街道と密接な関係がうかがえる。街道は、3本の道筋（あ～う）が確認されており、（あ）は本道として、（い）は堀兼道として位置付けられている。（あ）は、北が日高町女影付近を通り鳩山町今宿へ抜け、南は所沢市久米から東京都府中市へと抜けている。（い）は、所沢市内で（あ）と分離して狭山市堀兼を通り、狭山市新狭山へと通じている。これらの道筋は、鎌倉時代以前の古道を整備したものともいわれており、奈良・平安時代の集落との関連が充分に考えられる。

第3章　沢台遺跡の調査

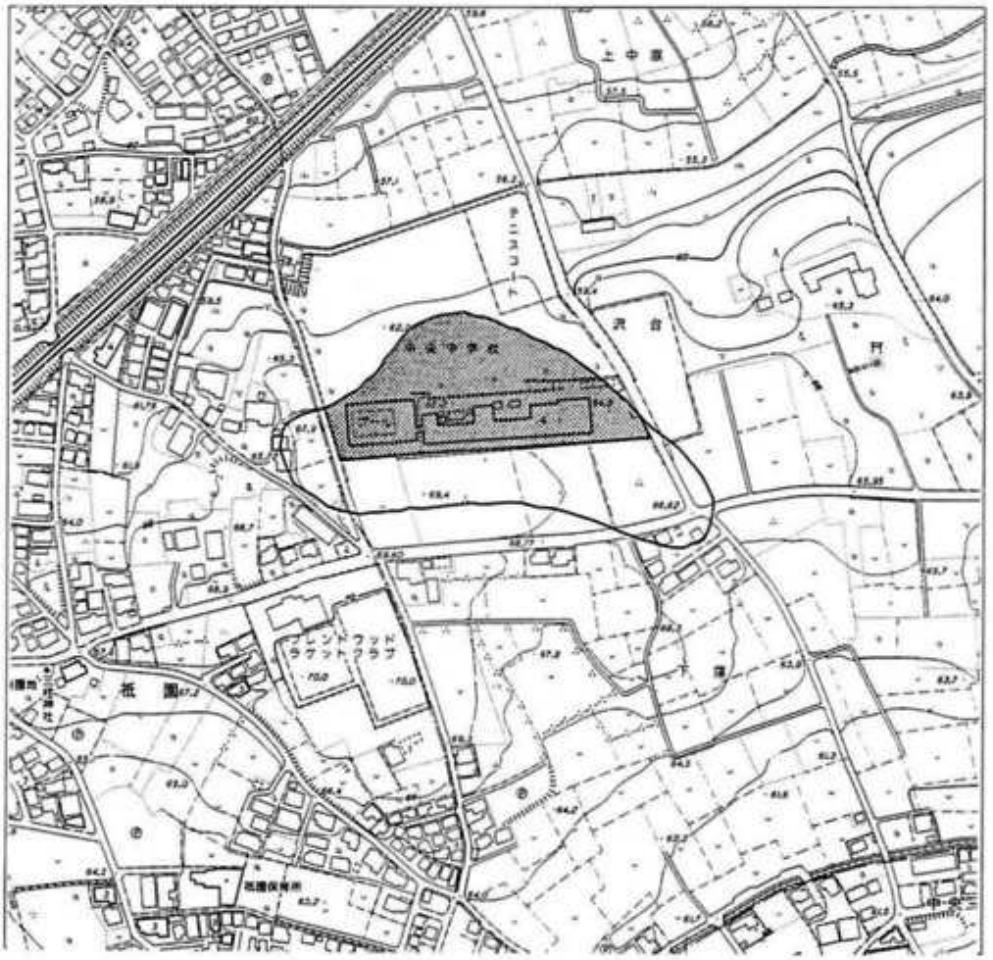
第1節　遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から東へ直線距離で約0.5kmの地点に所在する。入間川東小学校付近に水源をもつ久保川の右岸に位置する。標高は69mを測る。

遺跡をのせる台地は、入間川と不老川に挟まれた洪積台地で、内陸部の湧水点からいくつかの小河川が流れている。久保川もその一つで、入間川東小学校付近に水源が求められる。これらの流れによって開析された谷がいくつも複雑に認められ、その谷に面して小さな遺跡が存在している。久保川沿いには最上流に当遺跡が存在し、中原・沢久保の各遺跡が所在する。

分布調査によると遺跡の範囲は、270×120m、面積にして17,000㎡を測る。縄文時代中期と奈良・平安時代の集落遺跡である。土器の散布は希薄であったので、大集落とは考えられなかった。

調査区は、北に突出する台地上で三角形を呈し、東西140m,南北90m、面積6,000㎡を測る。台地下との比高差は、約5mを測る。



第2図　沢台遺跡周辺地形図（1/5,000）

調査は、バックホーとブルトーザーを使用して表土を除去後、遺構確認を実施。
調査の結果、縄文時代の土壙34基と縄文土器を検出した。

第2節　調査経過

3月30日　重機を導入して茶木の抜根を開始する。
31日　本日にて抜根を終了。
4月2日　重機による表土除去を開始。作業は調査区東側から始め、排土を北東部の斜面下に積み上げる。
3日・4日・6日　中央部の表土除去
12日　重機を使用しての表土除去を終了。9日間を要した。
5月　遺構調査
6月1日　新たに用地が取得できたところの遺構確認作業を開始。
6月4日　グリットを設定、遺構確認作業を継続。
6月5日　遺構調査を開始。土壙の調査。
6月6日　調査終了した遺構の写真撮影。
中断
6月28日　全測図を作成して調査を終了。

第3節　遺構と遺物

遺構（第4・5図）

1号土壙

調査区中央の南端に所在する。平面プランは長方形を呈する。長軸1.1m,短軸0.75mを測る。壁体は斜めに立ち上がり、28cmを測る。底面は、概ね平坦である。

2号土壙

1号土壙に隣接して検出された。平面プランは長方形を呈する。規模は、長軸1.1m、短軸0.96mを測る。壁体は斜めに立ち上がり、深さ20cmを測る。底面は平坦である。

3号土壙

2号土壙に隣接して検出された。平面プランは方形を呈する。規模は、長軸1.35m、短軸1.16mを測る。壁体は斜めに立ち上がり、深さ36cmを測る。底面は、概ね平坦である。

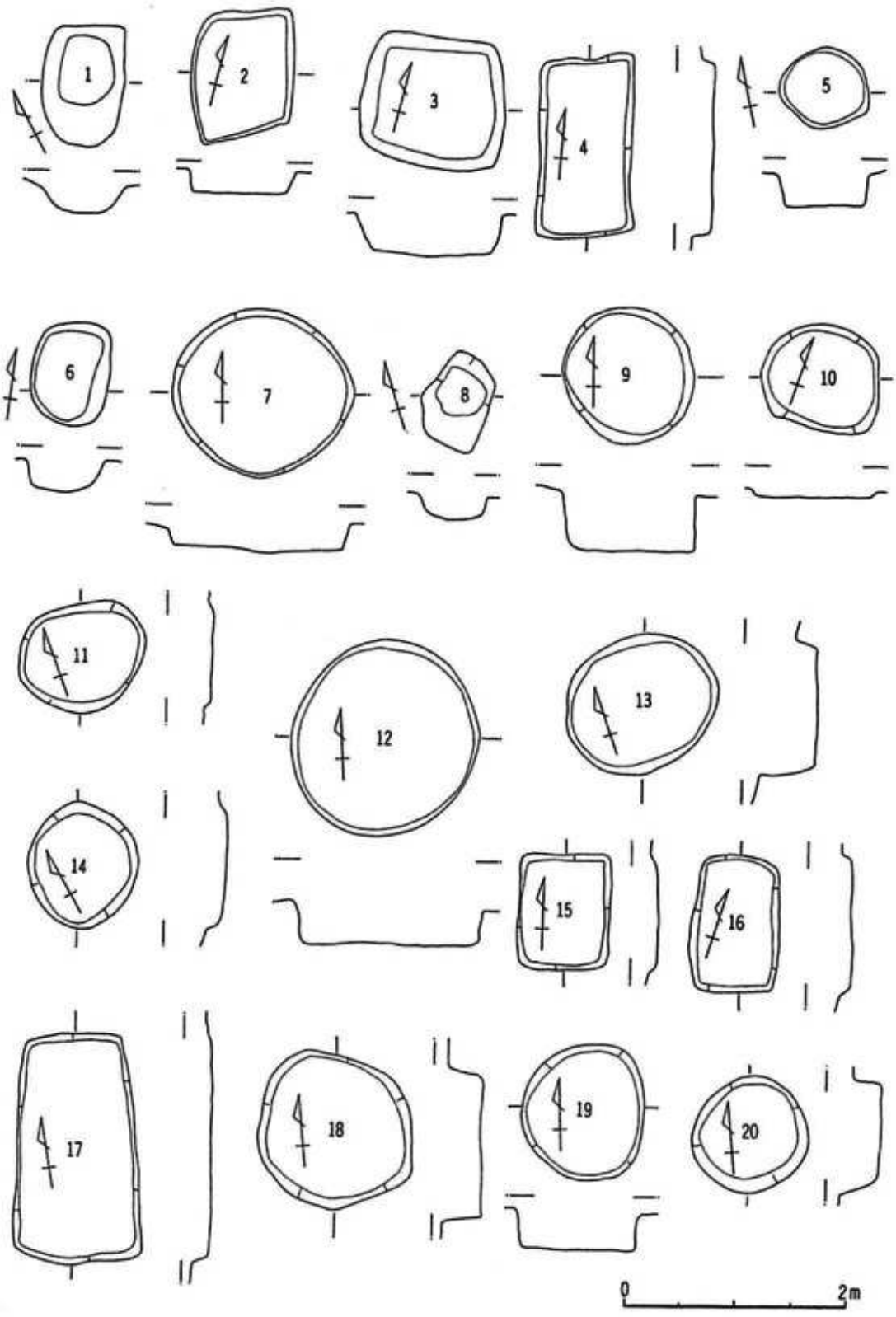
4号土壙

調査区中央やや南に位置する。平面プランは長方形を呈する。規模は、長軸1.62m、短軸0.86mを測る。壁体は垂直に立ち上がる。深さは16cmを測る。底面は平坦である。

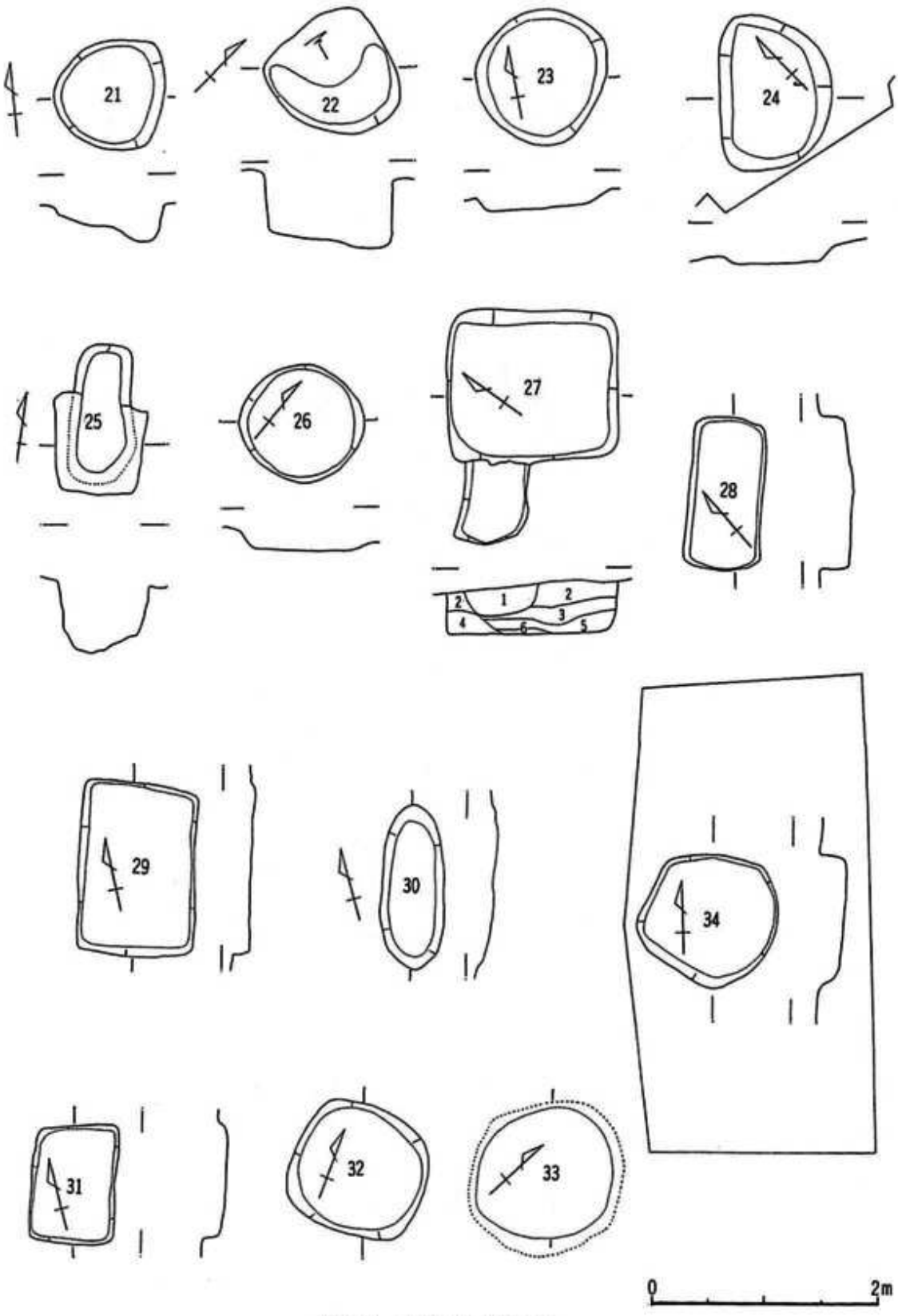
5号土壙

調査区の南端に位置し1号土壙に隣接する。平面形態は円形を呈する。規模は、径0.65mを測る、深さは29cmを測る。壁体は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

第３図　沢台遺跡全測図（1/500）



第4図　土坑（1/60）①



第5図　土坑（1/60）②

6号土壙

調査区の南端に位置し5号土壙に隣接する。平面形態は方形を呈する。規模は、長軸0.95m、短軸0.7m、深さ29cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面はゆるやかにくぼむ。

7号土壙

調査区の南端に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は、直径1.53m.深さ24cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

8号土壙

調査区の南端に位置し7号土壙に隣接する。平面形態は、不整形を呈する。規模は、0.55mを測る。深さは22cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面はゆるやかにくぼむ。

9号土壙

調査区中央やや東に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は、直径1.2m、深さ50cmを測る。壁体は垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦である。

10号土壙

調査区中央やや東に位置する。平面形態は略円形を呈する。規模は、直径1.1m、深さ5cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

11号土壙

調査区中央やや東に位置し、10号土壙と近接する。平面形態は略円形を呈する。規模は、径1.1m、深さ5cmを測る。壁体は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。

12号土壙

調査区の南端に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は、径1.67m、深さ38cmを測る。壁体は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

13号土壙

調査区中央やや東に位置する。本跡の付近から、北側は急傾斜で下がる。平面形態は略円形を呈する。規模は、径1.2m、深さは深いところで50cm、浅いところで20cmを測る。壁体は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。

14号土壙

調査区の東端に位置する。調査区中央から一段低い段に所在する。平面形態は、不整円形を呈する。規模は、径1.03m、深さ12cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

15号土壙

調査区の中央に位置する。平面形態は長方形を呈する。規模は、長軸1.05m、短軸0.84m、深さ10cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は概ね平坦である。

16号土壙

調査区中央に位置する。平面形態は長方形を呈する。規模は、長軸1.05m、短軸0.84m、深さ10cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

17号土壙

調査区の中央に位置する。平面形態は長方形を呈する。規模は、長軸2.10m、短軸1.13m、深さ

15cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は概ね平坦である。

18号土壙

調査区の中央に位置する。平面形態は、不整の円形を呈する。規模は、径1.51m、深さ35cmを測る。壁体はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

19号土壙

調査区中央のやや北に位置する。平面形態は、不整の円形を呈する。規模は、径1.23m、深さ35cmを測る。壁体はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

20号土壙

調査区の北端に位置する。本土壙の周辺から北に向けては急斜面でさがっていく。平面形態は、円形を呈する。規模は、径1.04m、深さ26cmを測る。壁体は、やや斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

21号土壙

調査区の北端、20号土壙に近接して所在する。平面形態は、不整の円形を呈する。規模は、径0.97m、深さは深い所で33cm、浅いところで16cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は20cmほどのピットが壁体に近寄っており、そこから一段の平坦な部分をもって立ち上がる。

22号土壙

調査区の北端、20号土壙に近接して所在する。平面形態は、不整形を呈する。規模は、1.1mを測る。深さは60cmで、東側の壁下がいちばん深い。壁体は南半分は垂直に立ち上がるが、北側は斜めである。底面は、やや傾斜しているが平坦である。

23号土壙

調査区の西端に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は、径1.11m、深さ10cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

24号土壙

調査区の西端に位置する。平面形態は、不整の半円形を呈する。規模は、長径1.35m、短径0.98m、深さ10cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

25号土壙

調査区中央やや北に位置する。2基の土壙が重複している。平面形態は、それぞれ方形である。規模は、1.25mと0.79mを測る。深さは60cmを測る。底面は船底状である。

26号土壙

調査区の東端に位置する。14号土壙に近接し、一段低いところに所在する。平面形態は円形を呈する。規模は、径1.05m、深さ19cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。

27号土壙

調査区の中央に位置する。2基の土壙が重複している。平面形態は、長方形と方形を呈する。長方形土壙が土層断面観察で新しいことが確認できた。長方形土壙は、短軸0.59m、長軸は現在長で1.4m、深さ22cmを測る。壁体は、やや斜めに立ち上がる。底面は船底状を呈する。方形土壙は、規模1.55×1.30m、深さ45cmを測る。壁体は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

28号土壙

調査区の南寄りに位置する。平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸1.38m、短軸0.65m、深さ26cmを測る。壁体は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

29号土壙

調査区の中央に位置する。平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸1.53m、短軸1.03m、深さ12cmを測る。壁体はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

30号土壙

調査区の中央に位置する。平面形態は、楕円形を呈する。規模は、長軸1.44m、短軸0.55m、深さ15cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は船底状である。

31号土壙

調査区の北端に位置する。平面形態は長方形を呈する。規模は、長軸1.06m、短軸0.47m,深さ15cmを測る。壁体は垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

32号土壙

調査区の中央に位置する。平面形態は、隅丸の方形を呈する。規模は、1.21mを測る。壁体は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。

33号土壙

調査区の西部に位置する。平面形態は、不整の円形を呈する。底径が大きく、オーバーハングを呈している。規模は、径1.16m、底面径1.4mを測る。底面はほぼ平坦である。

34号土壙

調査区の西端に位置する。この土壙の近辺は表土にグリッドを設定して手掘り調査としたところである。平面形態は、不整形を呈する。規模は、径1.15m、深さ20cmを測る。壁体は斜めに立ち上がる。底面は、平坦である。

出土遺物（第6図）

一括出土遺物

第1群土器　縄文時代中期中葉と思われる土器群（1～24）

1は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、幅広の区画沈線を有し、刺突文を施す。

3は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の沈線を有し、刺突文を施す。

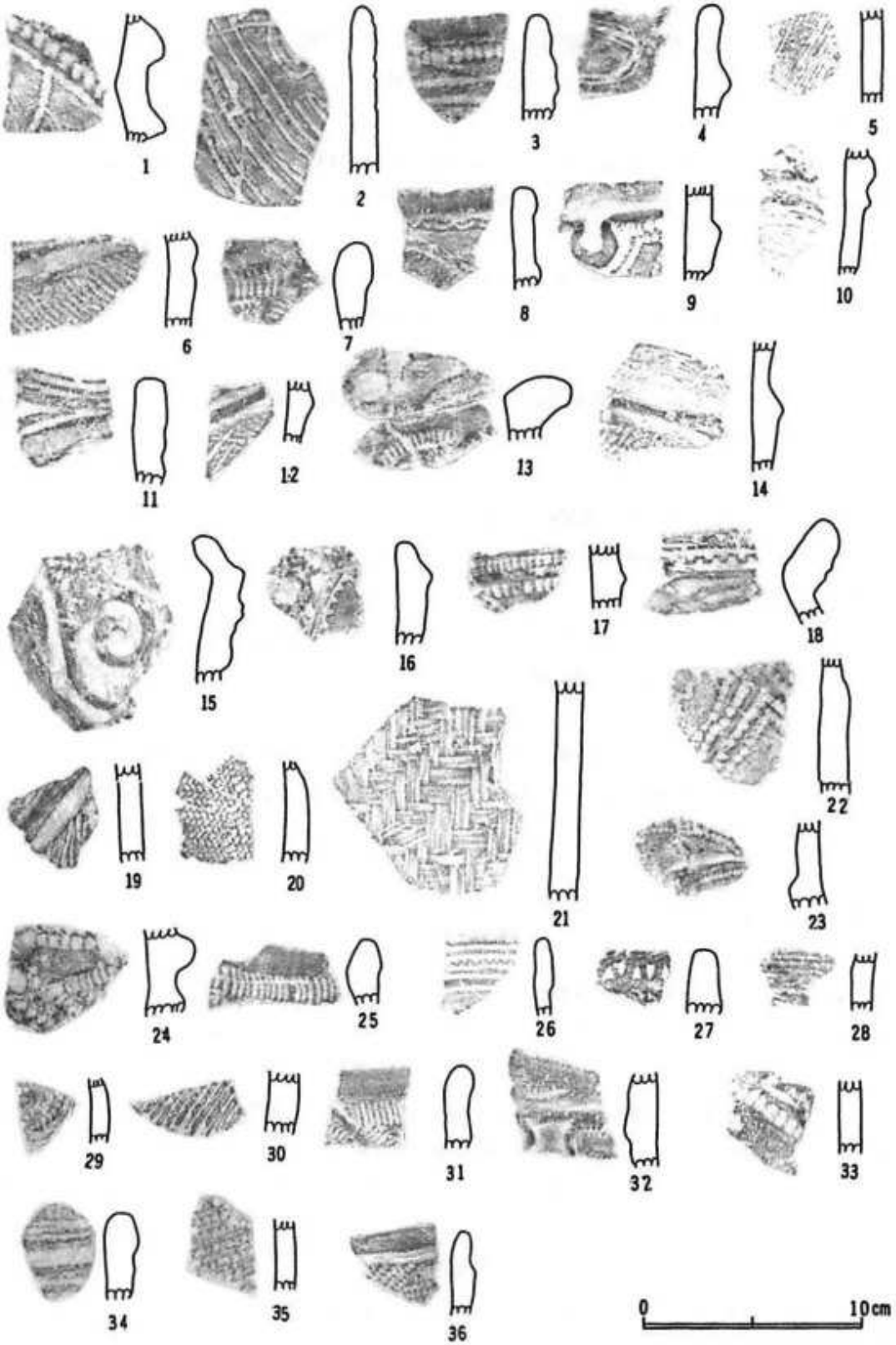
4は、口縁部の破片と思われるもので、曲線沈線を有す。

6は、深鉢口縁部から胴部にかけて破片と思われるもので、粘土紐による隆帯と沈線による磨消文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

7は、口縁部の破片と思われるもので、爪型文を施す。

9は、口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯と曲線沈線による磨消文を有す。

13は、口縁部の破片と思われるもので、竹管文を施す。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
10cm

第6図　出土遺物（1/3）

15は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐によるうず巻隆帯を有す。

16は、口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯と曲線沈線を有す。

20、22は、深鉢胴部の破片と思われるもので、地文はLRの縄文を充填する。

第Ⅱ群土器　縄文時代中期中葉と思われる土器群（25～36）

25は、浅鉢口縁部の破片と思われるもので、爪型文を有す。

29は、胴部の破片と思われるもので、竹管文のみを有す。

32は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有す。

33は、深鉢胴部の破片と思われるもので、刺突文を有す。

35は、胴部の破片と思われるもので、地文はLRの縄文を充填する。

36は、浅鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐における隆帯と幅広の沈線を有し、地文は、LRの縄文を充填する。

第4章　高根遺跡の調査

第1節　遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北西へ直線距離で3kmの地点で智光山公園内に所在する。入間川左岸台地のやや奥まった小谷の右岸に所在する。この谷は、狭山市勤労者体育センター付近を源として北東に向けて開口しており、川越市安比奈で入間川の段丘崖へと通じている。谷の深さもさほど深くなく2～5mの高低差である。この間は100mの幅で水田地帯となっている。この谷の両岸には遺跡が集中しており、上流から稲荷山・前山・半貫山・高根・上の原西・上の原東・町久保・金井林・鶴田・丸山・宮原の11遺跡が所在している。当遺跡は、谷の南岸に位置している。

分布調査による遺跡の規模は、450×260mの82,000㎡を測る。標高は谷をのぞむ北側が低くて55m、南側がやや高く62mである。遺跡北側の沖積地との比高差は、約5mである。遺跡の内容は、縄文時代中期・後期の遺物が採取できたが、遺跡は智光山公園内の山林中に所在するため詳細は不明である。

調査範囲は谷に沿って300m、台地の奥に向け100mの規模で、平坦面と谷に向けてゆるく傾斜をはじめる所である。調査区は、建物の建築部分と配管埋設部分に限定したため、5か所の区画に分割されていた。1区はT字型を呈し、面積940㎡を測る。2区は1区の南西に位置し、長方形を呈する。面積は288㎡。3区は1区の北東に位置し、台形を呈する。面積は308㎡。4区は1区の南東に位置し、方形を呈する。面積は400㎡。5区は、4区の南西に接している。長方形を呈し、面積は160㎡を測る。

調査は、グリッドを設定し、手掘りで実施した。グリッドは、各調査区を包含する10mピッチで設定、北東隅を基点として南北を数字、東西を五十音とした。呼吸は（あ－1）Gとした。10mグリッドでは、掘削単位としては大きいため、2mの小グリッドに分割した。この呼吸は、数字で表した。北東隅を1とし西に順をとった。遺構確認は、2mグリッドを千鳥格子で掘削して行った。

調査区は栗林であった為、抜開した時の木痕が多数あった。表土は浅く、20～30cmでローム層となった。保存状態は、良好であった。

第2節　調査経過

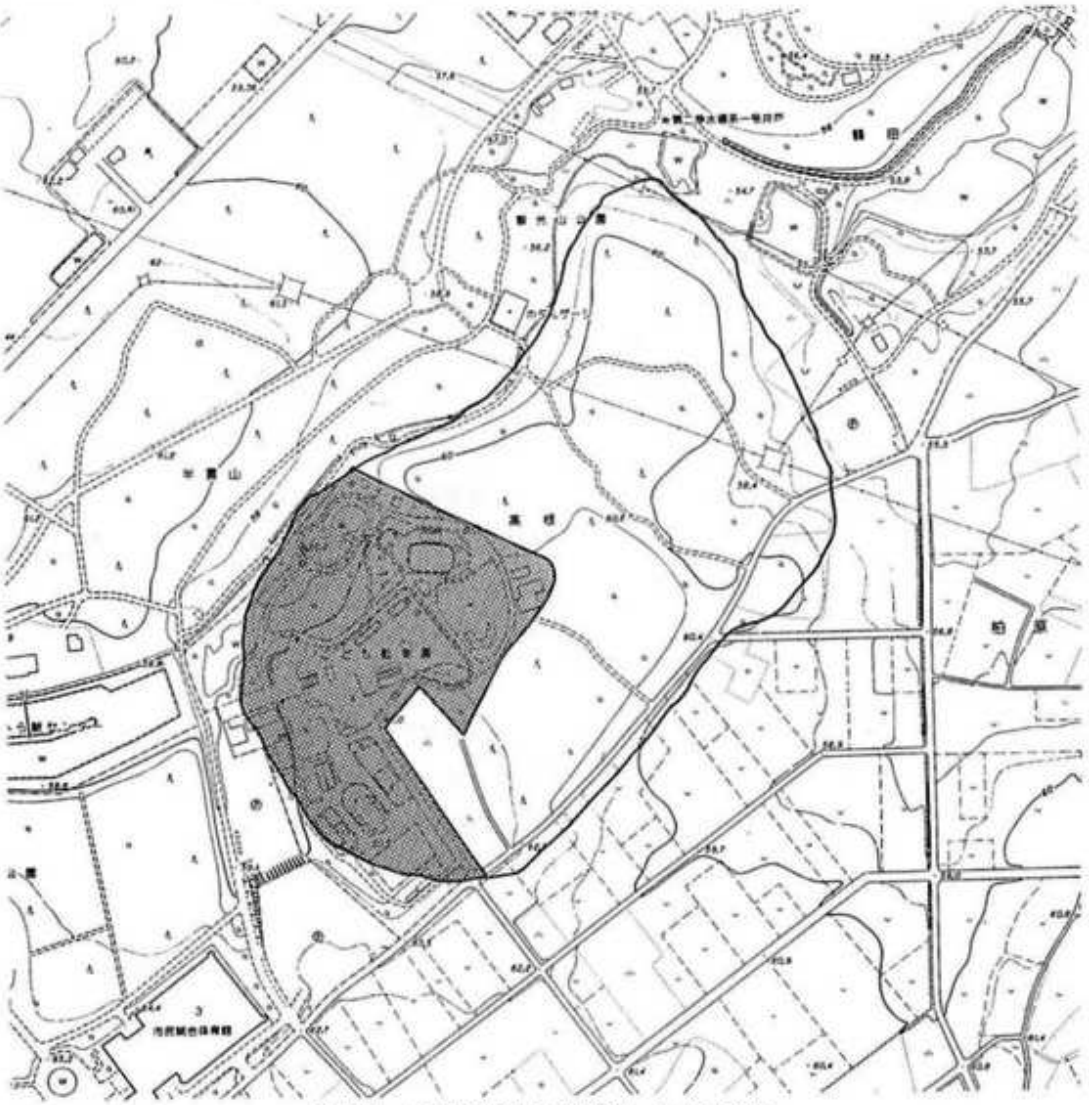
8月15日　調査開始。グリッドの設定及び、調査区内の下草刈等の諸準備実施。基本グリッドは、10mピッチとしてクイを設置。

8月16日　前日に引続きグリッドの設置。標高を各クイに移動。調査区内の整備続行。

8月20日　グリッドの調査開始。2mグリッドを、4つに1つの割合で掘削開始。便宜上、調査区を1～4区に分けて呼称し1区から調査。各グリッドから縄文土器多数出土。

8月21日　グリッドの調査。表土下20～30cmでロームへの漸位層を検出。

8月22日　1区の斜面部の調査。遺構は検出せず、遺物も少なかった。



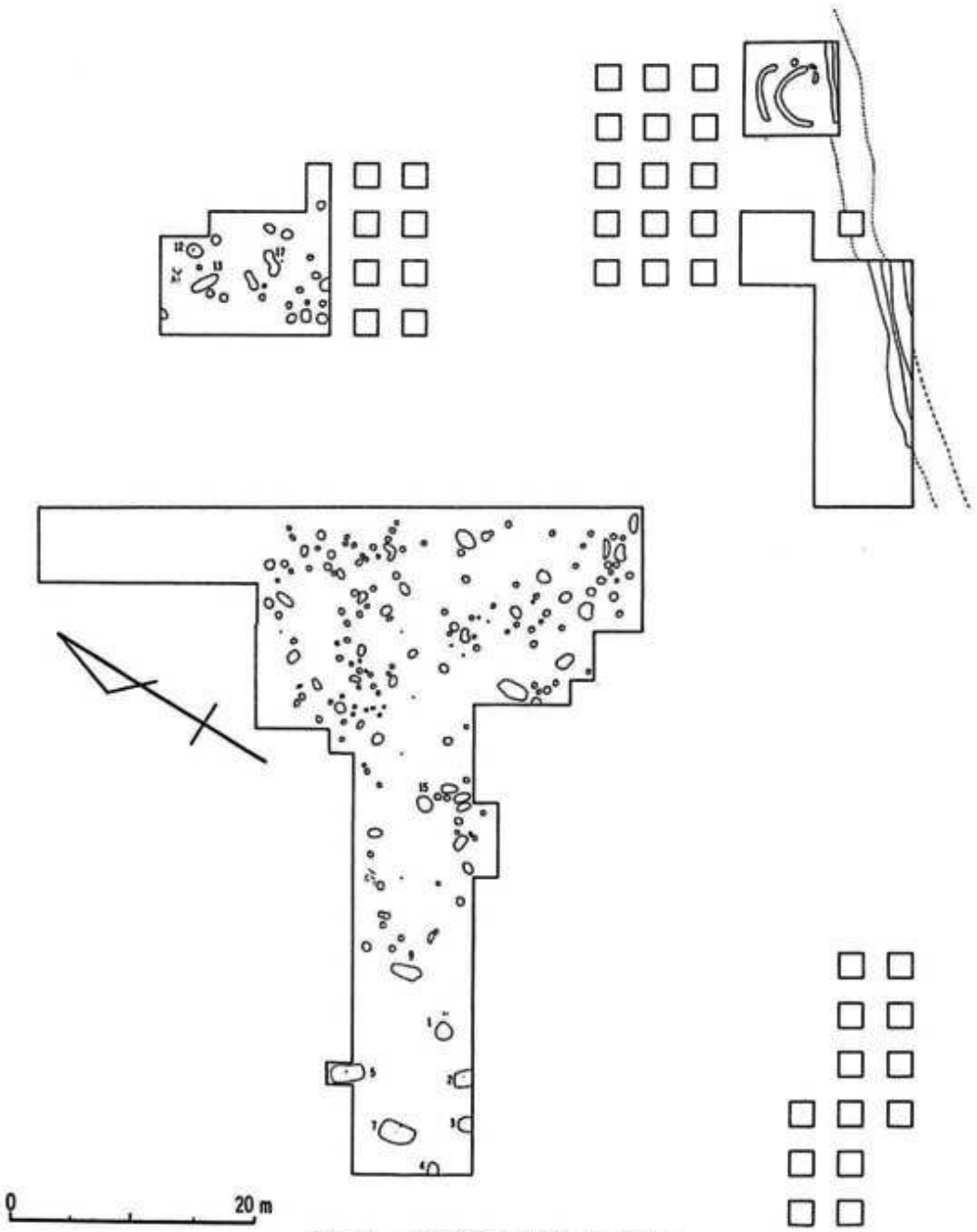
第7図　高根遺跡周辺地形図（1/5,000）

8月23日　各グリッドの調査で、遺物が多数出土しているため、グリッドの拡張を実施。

8月24日～9月1日　1区のグリッド調査。最終的に1区の表土を全面除去した。

9月3日　2区の調査開始。グリッドを、4つに1つの割合で掘削。表土から40～50cmでロームに達する。1区に比べて深くなっている。遺物が少量出土。

9月4日　2区の調査終了。遺構は検出されなかった。3区の調査開始。グリッドを、4つに1つの割合で掘削。表土から40～50cmでロームとなった。1区の遺構確認作業を実施。



第8図　高根遺跡全測図（1/600）

9月5～3日　3区の調査。土壙数基を検出。

9月10日　4区の調査開始。3区同様に遺物は少ない。

9月11日　4区の南東端（あ～ク）Gで、多量の土器が出土。遺構確認の結果、遺構の存在が予想されたので、周囲のグリッドを拡張。

9月13日　4区の精査。前日の遺構は、住居跡と認定。2軒以上の重複の可能性あり。

9月17日　4区の拡張。住居跡は2軒が独立しているものと判明。

9月18日　4区南部を拡張。

10月1日　1・4区のグリッドを拡張。

10月2日　遺構の調査を1区から開始。住居跡と思われる遺構を4分割して調査。各区を掘り下げた結果、土壙と判明。調査区の名称を追加。4区南部を5区とした。

10月3日　1区の遺構調査1～8号土壙を掘削。1号から土器多数と石錘が出土。

10月4日～11月8日　土壙調査。

11月8日　4区北東部にて住居跡と思われるプラン確認、調査を開始。

11月9日～26日　各種図面作成、写真撮影を実施。

11月27日　1区から埋めもどしを開始。

埋めもどし終了。

12月4日　調査器材搬出。

12月10日　調査事務所を撤去し、調査を終了した。

第3節　遺構と遺物

第1号住居跡（第9図）

4区にて検出された。ローム層までの表土が薄く、壁体等の立ち上がりは検出されずに壁溝の存在により住居跡と認定した。調査区境に所在し全体像は把握できなかった。検出したものは壁溝と思われる溝2条、ピット2個と埋甕2個である。溝は、半円形で二重に巡っている。規模は幅20cm、深さ15cmを測る。東西に直線にのびる溝は新しいものである。床面は、住居と認定できるかどうかはっきりしないほど軟弱である。

埋甕は、溝の途切れたところに設置されている。2個並列しており、ロームを掘り下げて埋めてある。

1号土器（第10図）

1区の東側にて検出。ロームを掘り下げて埋設されていた。土器の中は褐色土で埋め尽くされていた。

2号土器（第10図）

1区の東側にて検出。ローム上面に横に倒れた状態で発見された。周囲に柱穴等の住居を示す痕跡は発見されなかった。

3号土器（第10図）

ローム上面にかたまって発見された。周囲には柱穴等の住居を示す痕跡は発見されなかった。底

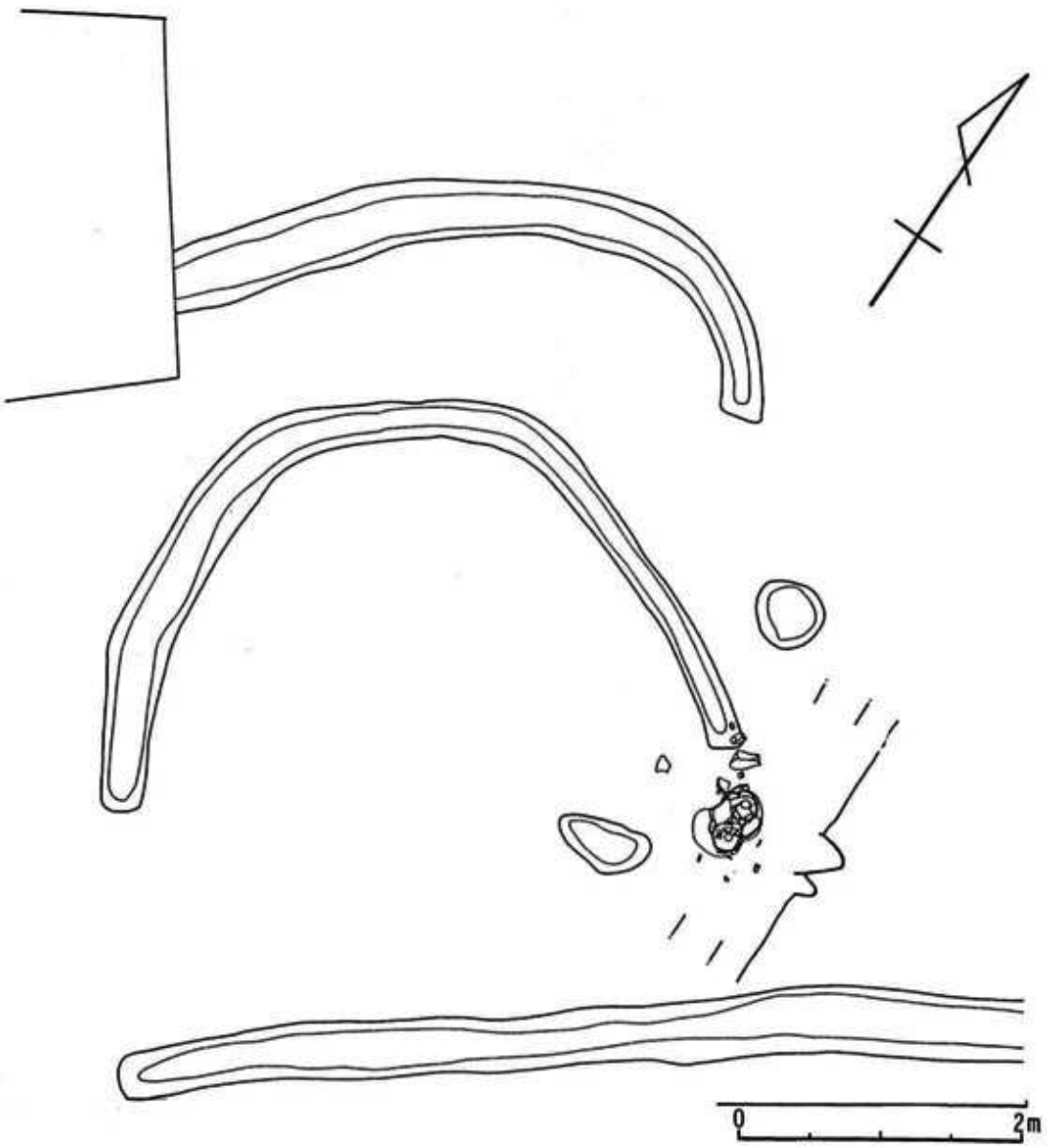
部から口縁直下まであり、出土状況から正立状態であったが西からの圧力により東側に倒壊したものと思われる。

7号土器（第10図）

3区にて検出。ローム上面を掘り下げて埋設された状態で発見された。正立しているが底を欠失していた。

8号土器（第10図）

1区の南西部にて検出。ローム上面に横に倒れた状態で発見された。周囲には柱穴等の住居を示す痕跡は発見されなかった。



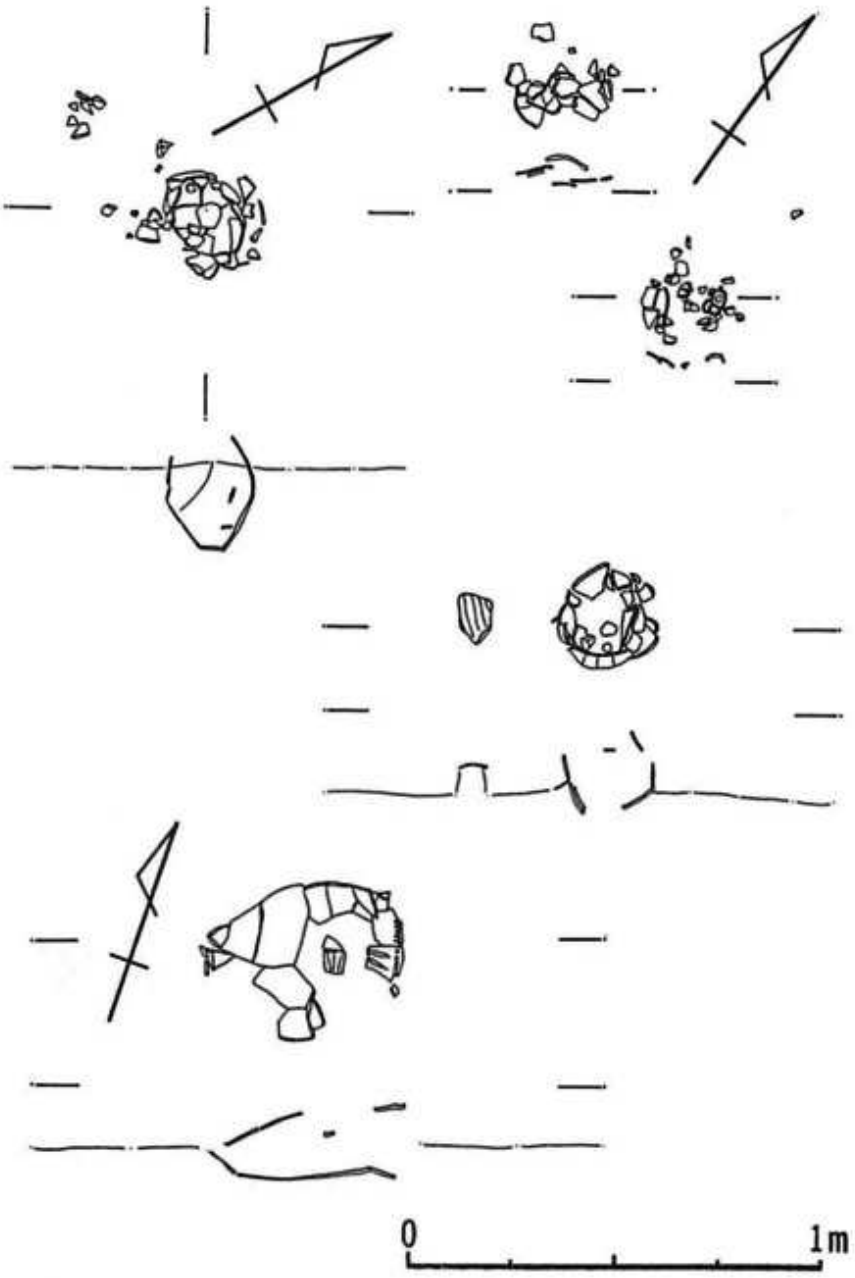
第9図　第1号住居跡（1/60）

1号土壙（第11図）

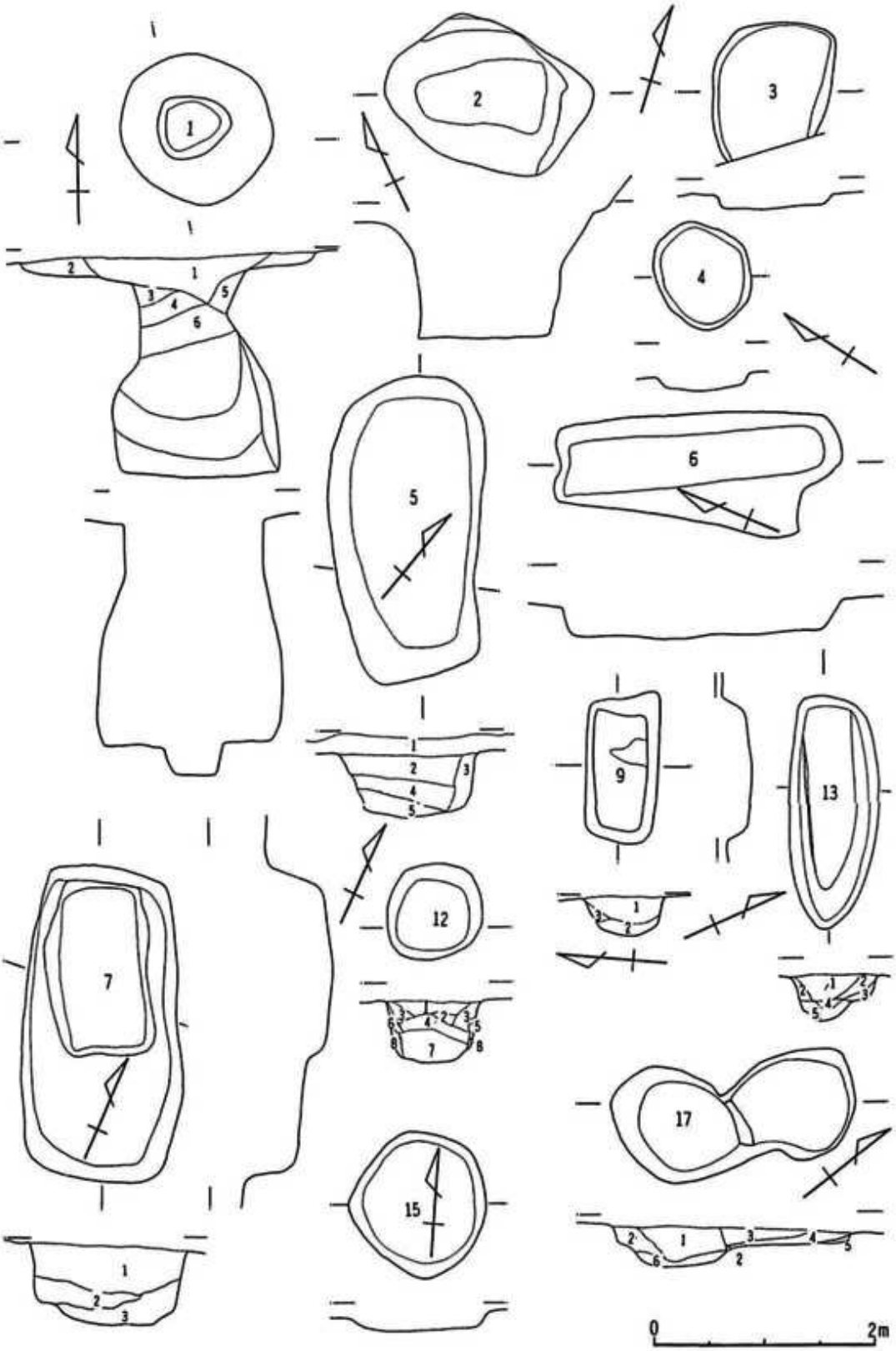
1区の西部に位置する。平面形態は、円形を呈する。規模は、長径1.4m、深さ2.3mを測る。底面は平坦で、径50cmの穴があいている。深さ50cmあたりからオーバーハングしている。

2号土壙（第11図）

1区の南西部隅に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は、長径1.64m、短径1.25m、深さは1.00mを測る。底面は平坦で、壁体は斜めに立ち上がる。



第10図　土器出土状態図



第11図　土坑（1/60）

3号土壙（第11図）

1区の南西隅に位置する。平面形態は、方形を呈する。一部区域外にかかる。規模は、1辺1m、深さ0.13mを測る。底面は平坦で、壁体は斜めに立ち上がる。

4号土壙（第11図）

1区の南西隅に位置する。平面形態は、円形を呈する。規模は直径0.89m、深さ0.13mを測る。底面は平坦で、壁体は斜めに立ち上がる。

5号土壙（第11図）

1区の南西部に位置する。平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸2.75m、短軸1.40m、深さ0.5mを測る。底面は平坦で、壁体は斜めに立ち上がる。

6号土壙（第11図）

1区に位置する。平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸2.50m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。底面は平坦で、壁体は斜めに立ち上がる。

※土層注　　高根遺跡

2号土壙
1層　暗褐色土　しまりあり
2層　褐色土　ローム粒子含む
3層　暗褐色土　しまりなし
4層　黄褐色土　ロームブロック含む

5号土壙
1層　黒色土　微量の黄色粒子含む
2層　黒色土　多量の黄色粒子と少量のロームブロック含む
3層　暗黄褐色土　多量のロームブロックと多量の黄色粒子含む
4層　黒色土　少量の黄色粒子と微量のロームブロック、粘土ブロック含む
5層　黒色土　微量の黄色粒子含む

7号土壙
1層　黒褐色土　ロームブロックを少量含む
2層　黒褐色土　ロームブロックを多量に含む
3層　黒色土　ロームブロックを少量含む

8号土壙
1層　暗褐色土　微量の黄色粒子含む
2層　暗黄褐色土　微量の黒色粒子含む
3層　暗褐色土　少量の黒色粒子、微量の赤色粒子含む
4層　暗褐色土　多量の黒色粒子、少量の黄色粒子含む
5層　明褐色土　微量の黒色粒子含む

9号土壙
1層　黒褐色土　炭化物多量に含む
2層　黒褐色土
3層　褐色土　ロームブロック含む

12号土壙
1層　暗褐色土　微量の黒色粒子と赤色粒子を含む
2層　暗褐色土　少量の黄色粒子と黒色粒子を含む
3層　暗褐色土　少量のローム土、微量の赤色と黒色粒子含む
4層　暗褐色土　多量の黒色粒子と少量の黄色粒子を含む
5層　黄褐色土　壁体の崩落
6層　暗黄褐色土　多量のローム土、少量の黒色土含む
7層　黒色土　少量の黒色粒子と黄色粒子、微量の赤色粒子含む
8層　黒色土　少量のロームブロック、少量の黄色粒子含む

13号土壙
1層　暗褐色土　微量の赤色粒子を含む
2層　暗褐色土　多量のローム含む
3層　暗黄褐色土　少量の暗褐色土、微量の黒粒子含む
4層　暗褐色土　2層に近似するがローム土の混入が多い
5層　明褐色土　漸移層と思われるが微量の黒色粒子を含む

14号土壙
1層　暗褐色土　微量の黒色粒子含む
2層　暗黄褐色土　漸移層に近似した土
3層　暗褐色土　微量の赤色粒子含む
4層　暗黄褐色土　ローム土を主体とするが部分的に暗褐色土が斑点状に混入

17号土壙
1層　暗褐色土　少量の黒色粒子と多量の黄色粒子と微量の赤色粒子含む
2層　暗黄褐色土　多量の黒色粒子と微量の赤色粒子含む
3層　暗褐色土　少量の黄色粒子と少量の黒色粒子含む
4層　暗黄褐色土　少量の黒色粒子含む
5層　暗黄褐色土　多量のローム土、微量の黒色粒子含む
6層　ローム土　微量の黒色粒子含む

7号土壙（第11図）

1区の南西部に位置する。平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸2.75m、短軸1.42m、深さ0.7mを測る。底に長方形の一段掘られた跡がある。規模は、長軸1.58m、短軸1.00m、深さ0.2cmを測る。底面は平坦である。

9号土壙（第11図）

1区の西に位置する。平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸1.29m、短軸0.65m、深さ0.2mを測る。底面は平坦で、壁体は斜めに立ち上がる。

12号土壙（第11図）

3区の北隅に位置する。平面形態は、円形を呈する。規模は、直径0.92m、深さ0.5mを測る。底面は若干でこぼしている。壁体は斜めに立ち上がる。

13号土壙（第11図）

3区に位置する。平面形態は、楕円形を呈する。規模は、長軸2.11m、短軸0.81m、深さ0.42mを測る。底面は船底型で、壁体は斜めに立ち上がる。

15号土壙（第11図）

1区の中央に位置する。平面形態は、円形を呈する。規模は、直径1.25m、深さ0.14mを測る。底面は平坦で、壁体は斜めに立ち上がる。

17号土壙（第11図）

3区の中央に位置する。平面形態は、円形が2個重なった形をしている。規模は長いところで2.18m、短いところで1.00mを測る。

出土遺物（第12～34図）

1．縄文時代中期後半と思われる深鉢。現高18.5cm、現大径20cmを測る。LRの縄文を充填する。胎土は1mm～3mm程の砂粒を多少含む。焼成は良好である。

2．縄文時代中期後半と思われる深鉢。現高28.5cm、現大径38cmを測る。地文はLRの縄文を充填し、磨消文による条線を有す。胎土は3mm～5mm大の小石を含む。焼成はやや良好である。

3．縄文時代後期前半と思われる深鉢。現高17.5cmを測る。幅広の沈線による区画文を有す。胎土は3mm程の小石を含む。焼成は良好である。

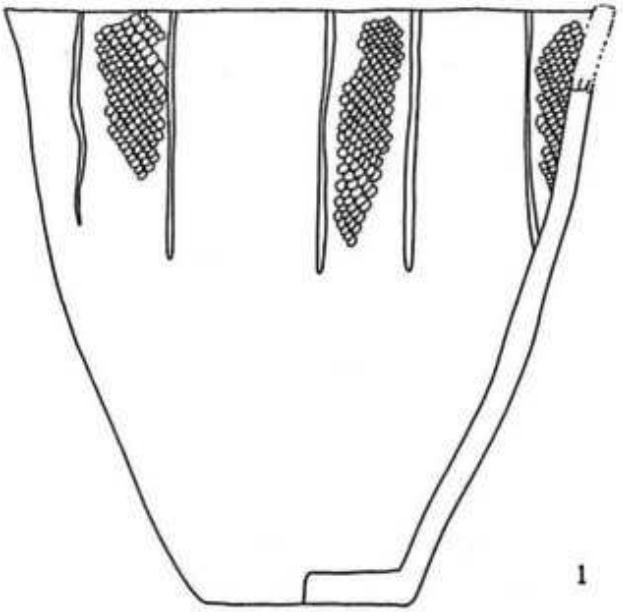
4．縄文時代中期後半と思われる深鉢、現高22.5cm、最大径33cmを測る。地文は、擦消し縄文を施し、把手を有する。焼成はやや良好である。

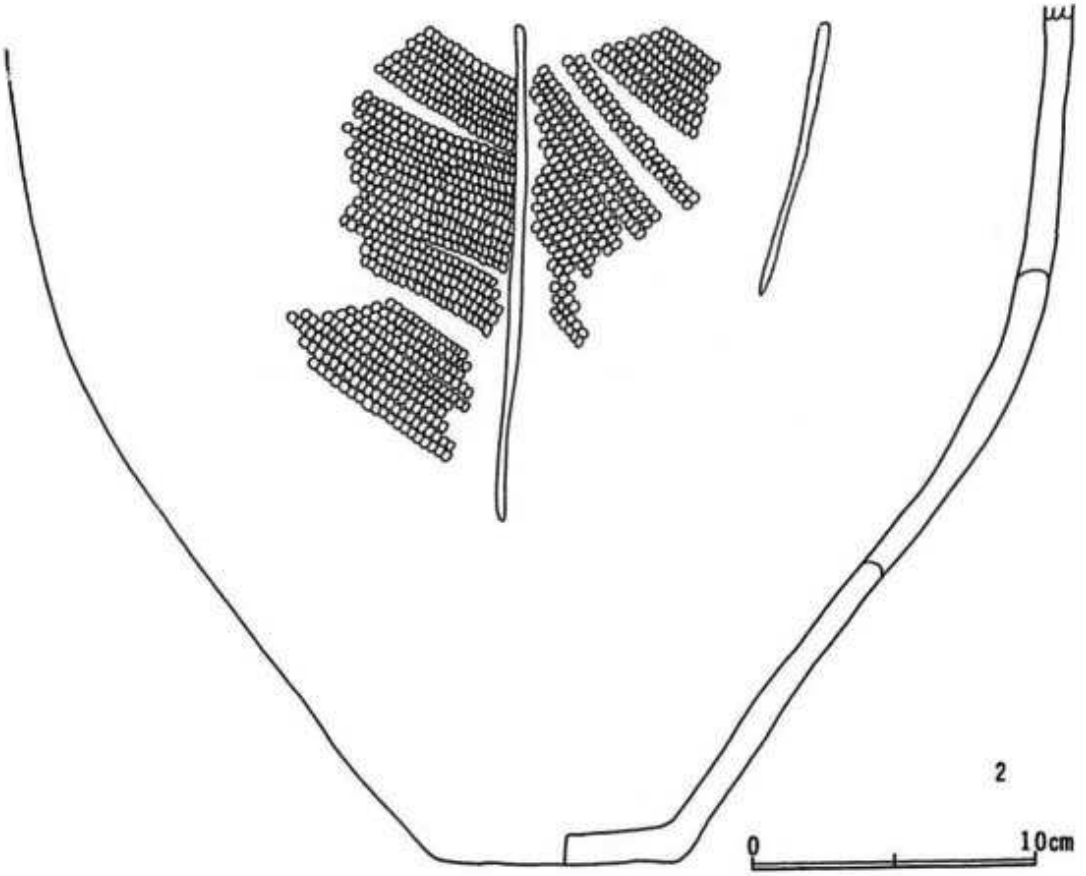
5．縄文時代中期後半と思われる深鉢。現高18.5cmを測る。口縁部に粘土紐による隆帯を有し、地文は、擦消し縄文を施す。焼成は良好である。

6．縄文時代後期前半と思われる蓋。口径24cm、器高13cmを測る。口径部はやや肥厚、把手を有する。胎土は2mm大の砂粒を多少含む。焼成はやや良好である。

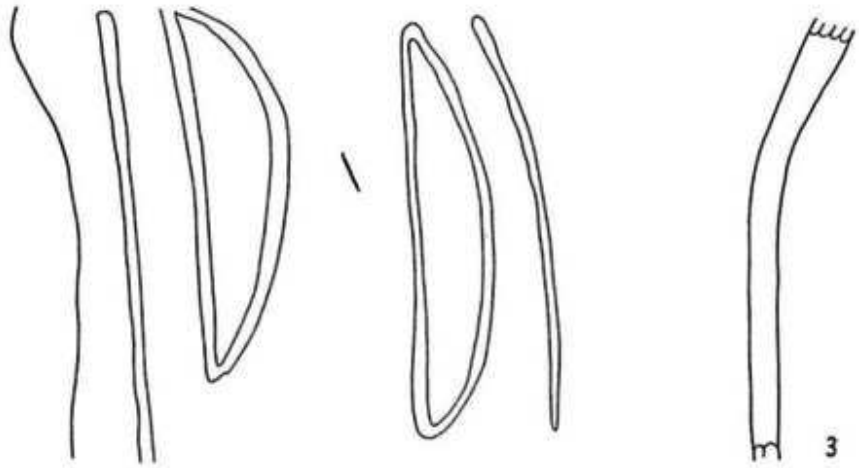
7．縄文時代中期後半と思われる深鉢。現高28cmを測る。口縁部に粘土紐による隆帯を有し、地文は、擦消し縄文を施す。焼成は良好である。

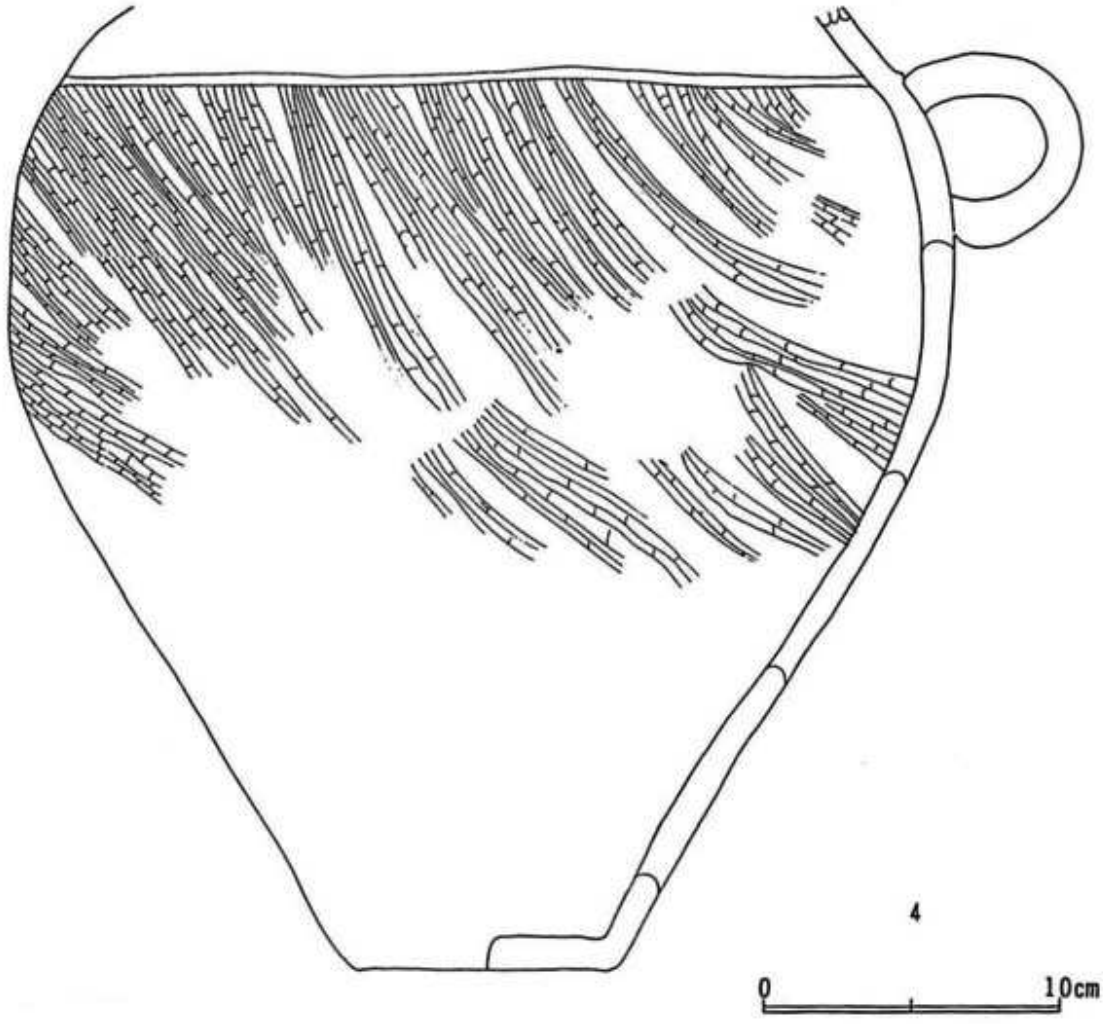
8．縄文時代後期前半と思われる深鉢。現高16cmを測る。胎土は1mm程の砂粒を多量に含む。



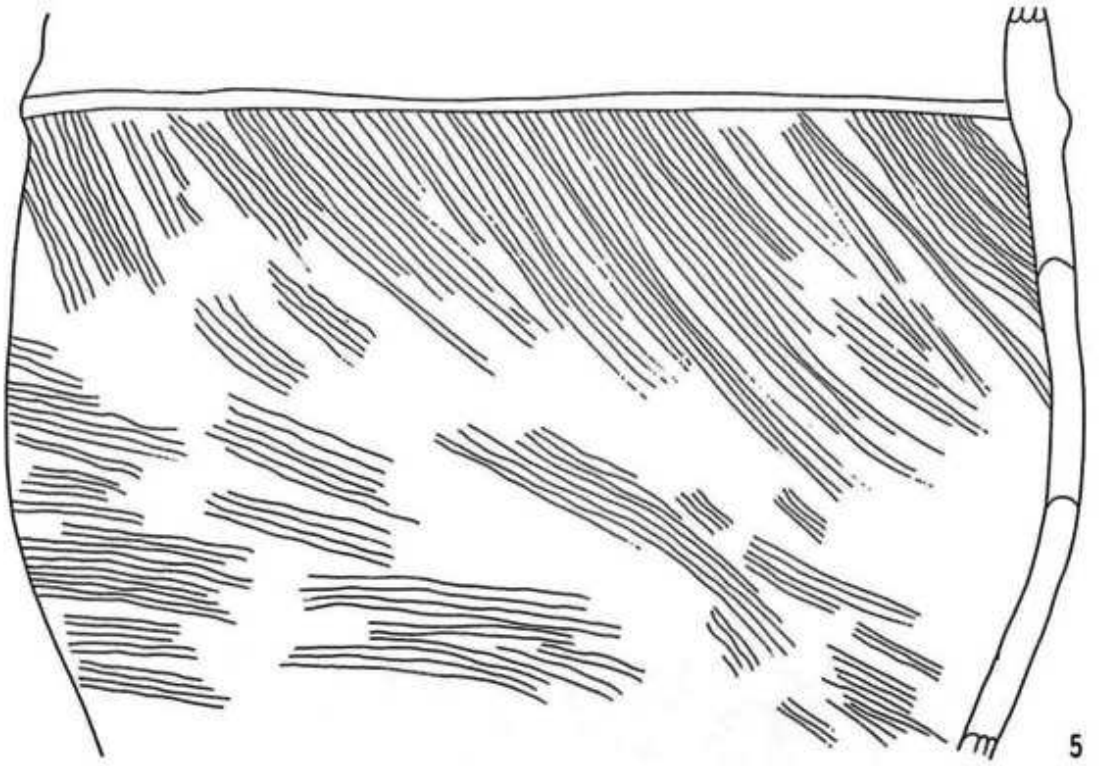


第12図　出土遺物（1/3）①

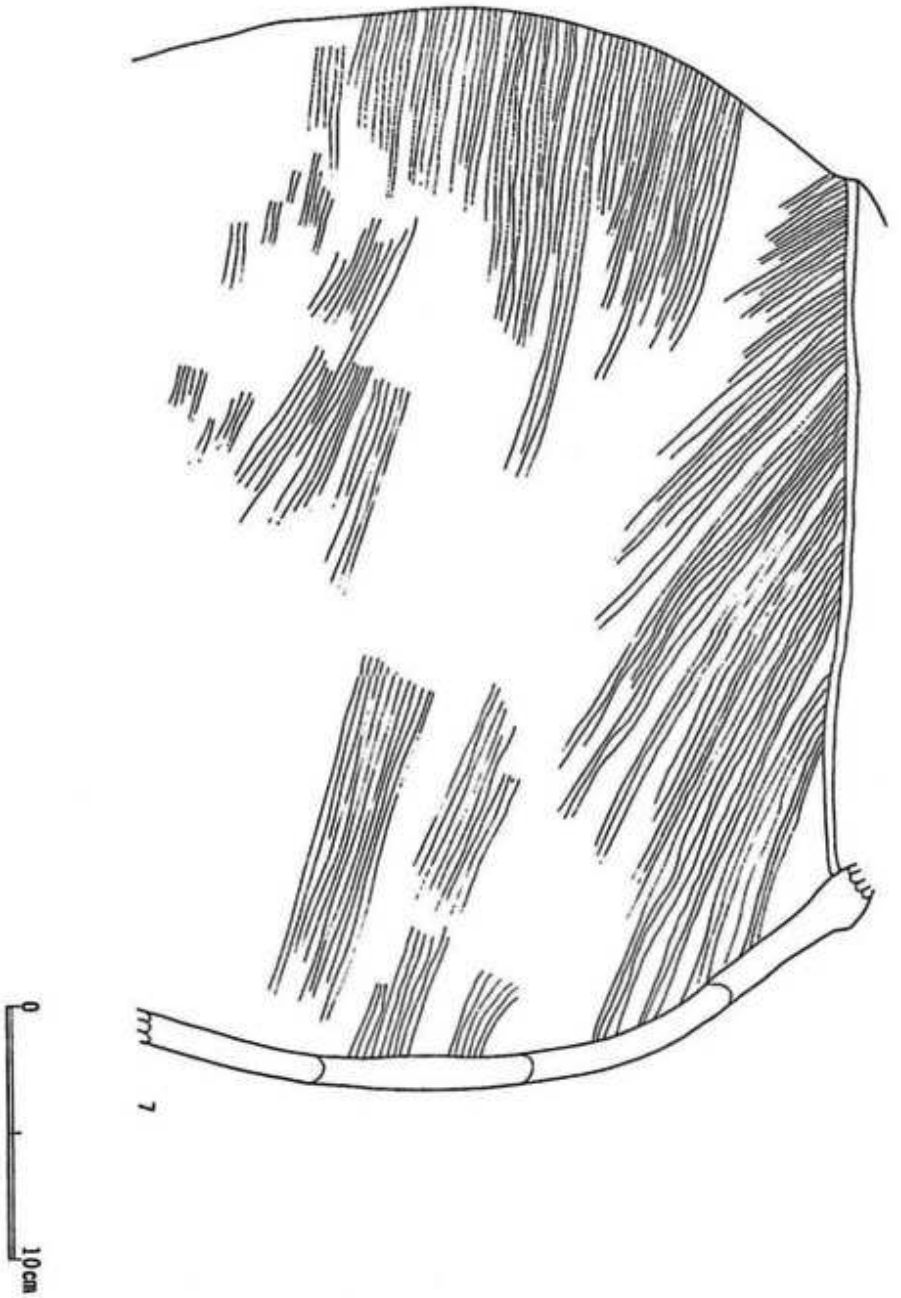




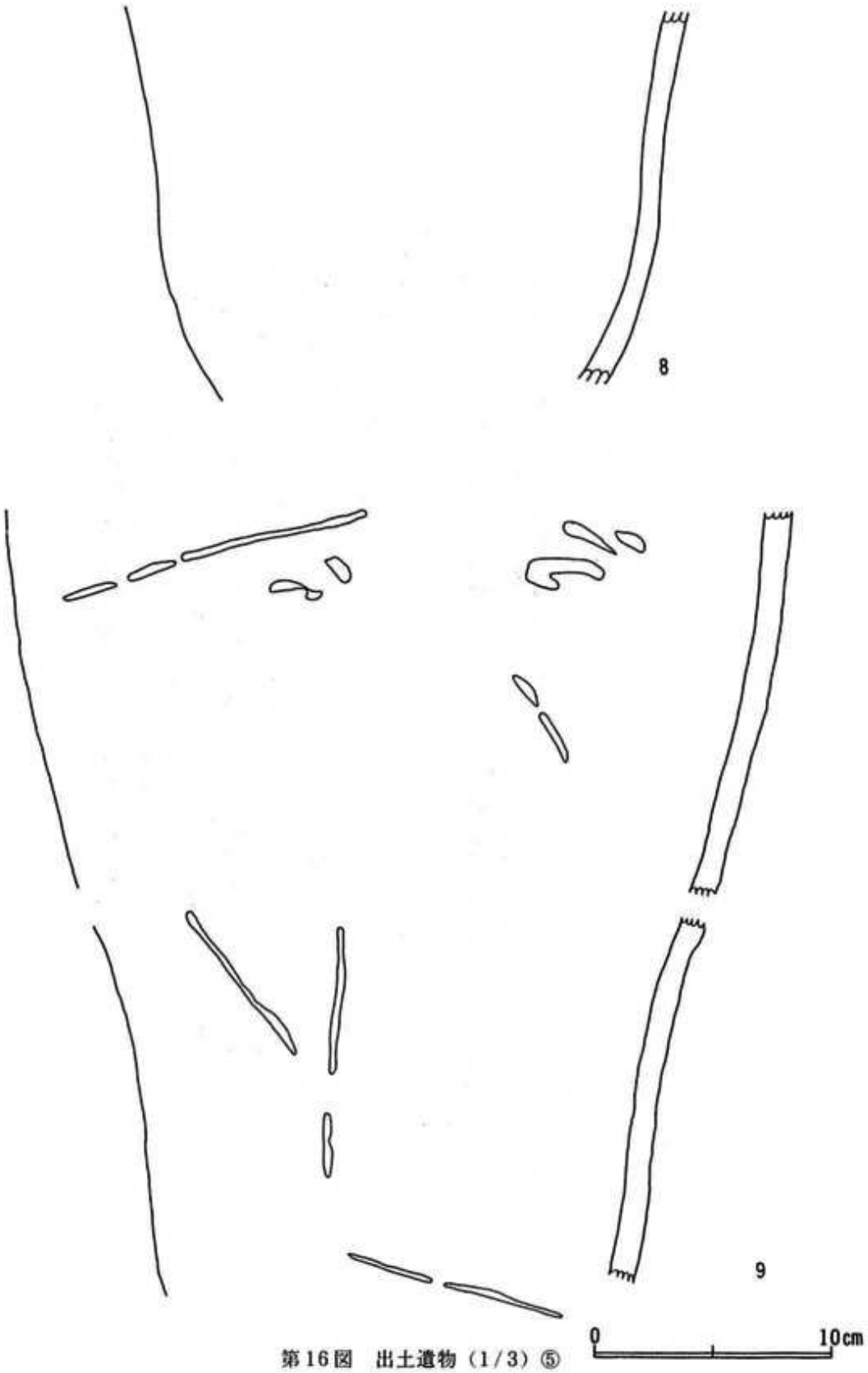
第13図　出土遺物（1/3）②



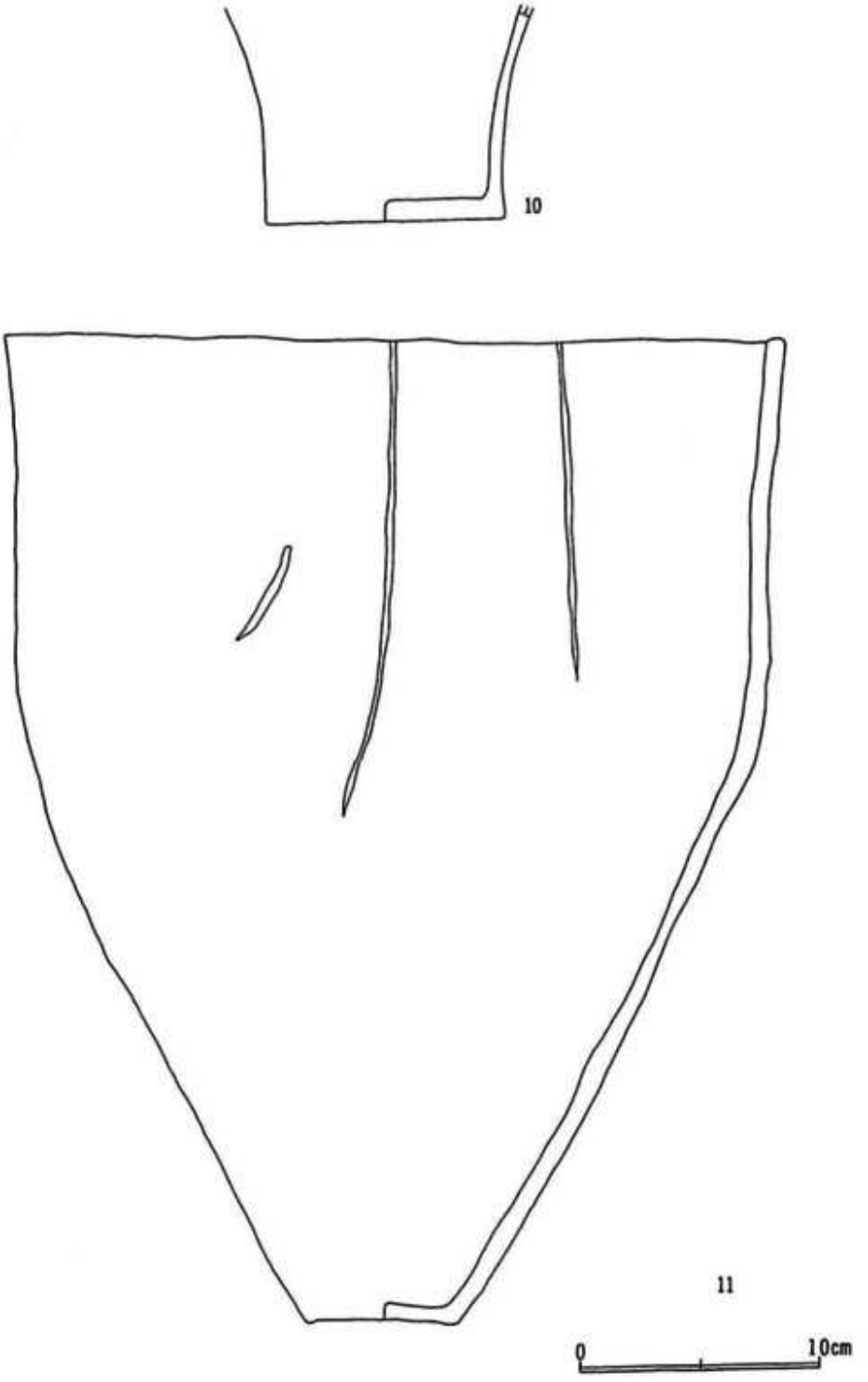
第14図　出土遺物（1/3）③



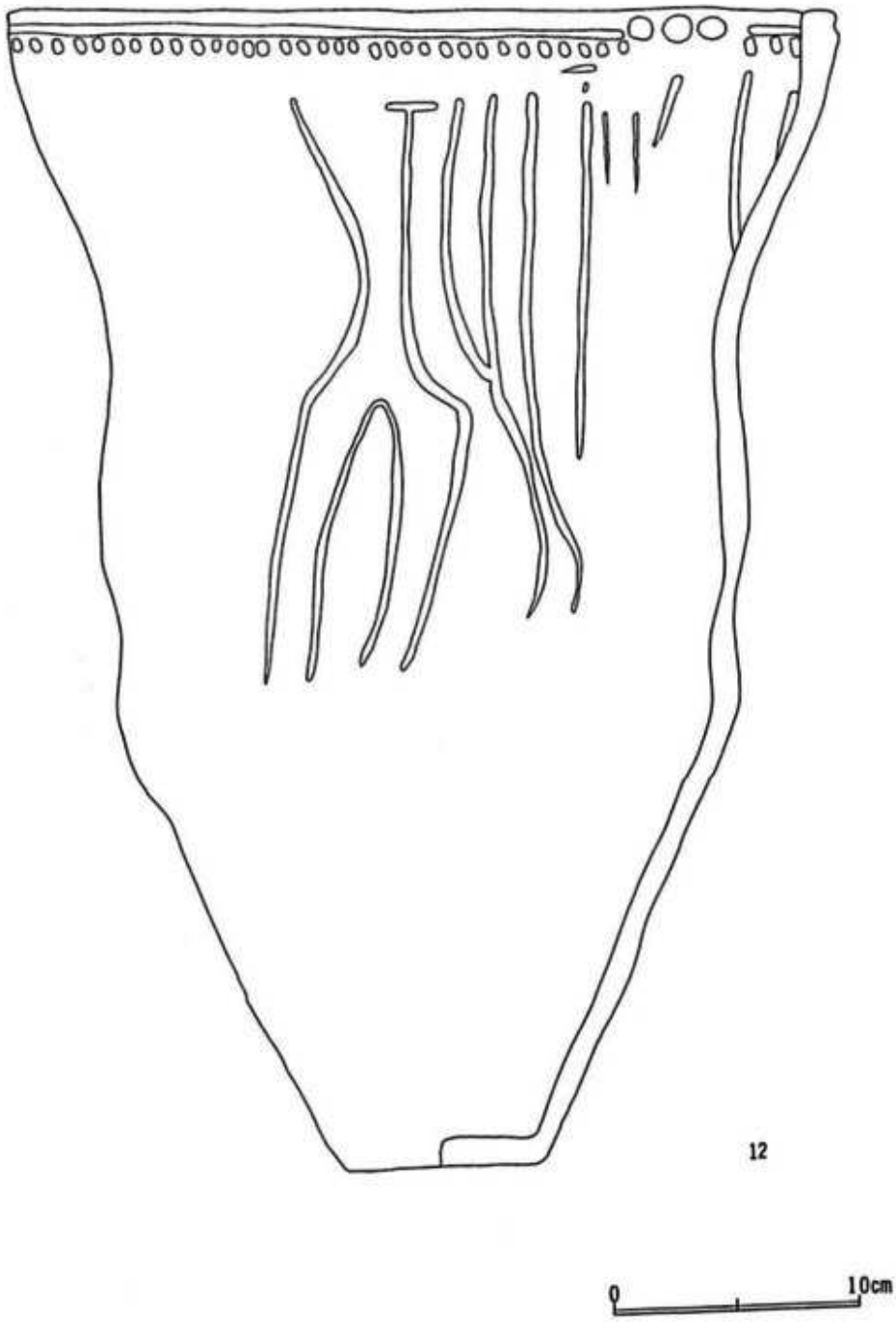
第15図　出土遺物（1/3）④



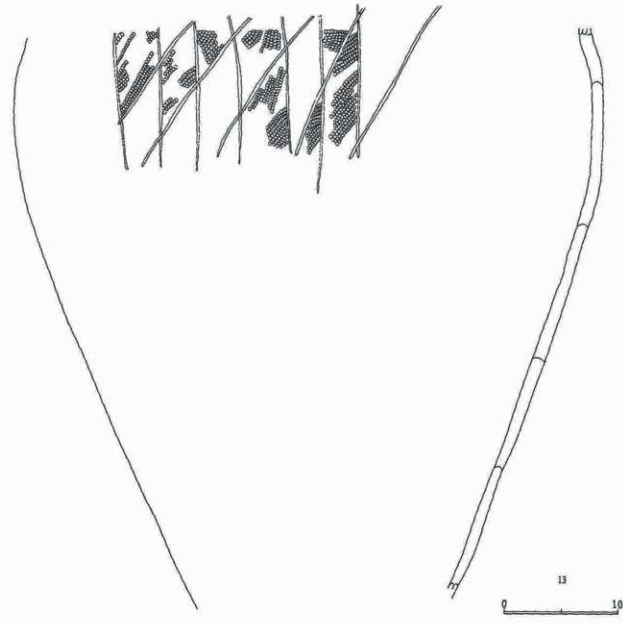
第16図　出土遺物（1/3）⑤



第17図　出土遺物（1/3）⑥



第18図　出土遺物（1/3）⑦



第19図 出土遺物（1/3）⑧

9．縄文時代後期前半と思われる深鉢。2つの破片とも沈線が見られ、胎土は3mm程の小石を多少含む。焼成はやや良好である。

10．縄文時代後期前半の深鉢と思われる。現高8.6cmを測る。胎土は1mm～3mm程の砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

11．縄文時代後期前半と思われる深鉢。現高36cm、現大径34cm、底部7cmを測る。口縁部から胴部にかけて沈線を有し、胎土は1mm程度の砂粒を多少含む。焼成は良好である。

12．縄文時代後期前半と思われる深鉢。口径36cm、器高47cm、底部8cmを測る。後部の粘土紐による隆帯部に、沈線と竹管文を施す。体面は、曲線沈線による磨消文を有す。胎土は2mm程の砂粒を多少含む。焼成は良好である。

13．縄文時代後期前半と思われる深鉢。現高46cmを測る。幅の狭い格子状の沈線を有し、内側にはRLの縄文を充填する。胎土は、1mm～3mm程の砂粒を多少含む。焼成は良好である。

14．縄文時代後期前半と思われる深鉢。現高20.5cmを測る。幅広の沈線による磨消文と曲線沈線を組合わして施し、胎土は1mm～3mm程の砂粒を多少含む。焼成は良好である。

15．縄文時代後期と思われる深鉢。口径3.5cm、器高29.5cmを測る。口縁部に沈線を廻らせ、体面には沈線があり、胴部あたりでうず巻状に施す。胴部付近には、火を受けた後と思われる墨が見られる。胎土は1mm程の砂粒を多少含む。焼成はやや良好である。

16．縄文時代中期と思われる深鉢。口径32cm、器高40cm、底部7cmを測る。口縁部に沈線を廻し、体面はLRの縄文を充填する。焼成は良好である。

17．縄文時代後期前半と思われる深鉢。口径50cm、器高67cm、底部15.6cmを測る。口縁部の粘土紐による隆帯部に、円形竹管文と半竹管文による刺突文を施し、体部に3本の幅広の沈線を中心に、左右に曲線沈線を有す。胎土は1mm程の砂粒を多少含む。焼成は良好である。

土壙群出土遺物

第Ⅰ群土器　縄文時代中期後半と思われる土器群（1、3～8、13、27～29、31、33）

第1類（1、3～8、13、27～29）口縁部に無文帯を有し、沈線による磨消文を施す。

1、5は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、口縁部は無文帯を呈し、沈線による磨消文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

13は、深鉢口縁部から胴部へかけての破片と思われるもので、幅広の沈線による区画文を施す。

第2類（9、12、14、16）曲線沈線による磨消文を有するもの。

9は、曲線沈線による磨消文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

第3類（10、11、31）縄文のみを有するもの。

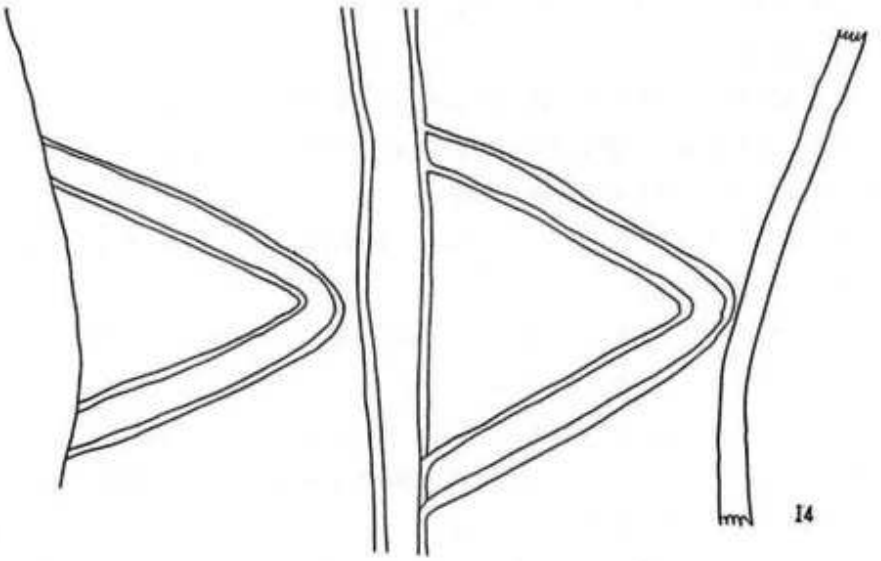
10、31は、深鉢胴部の破片と思われるもので、地文はLRの縄文を充填する。

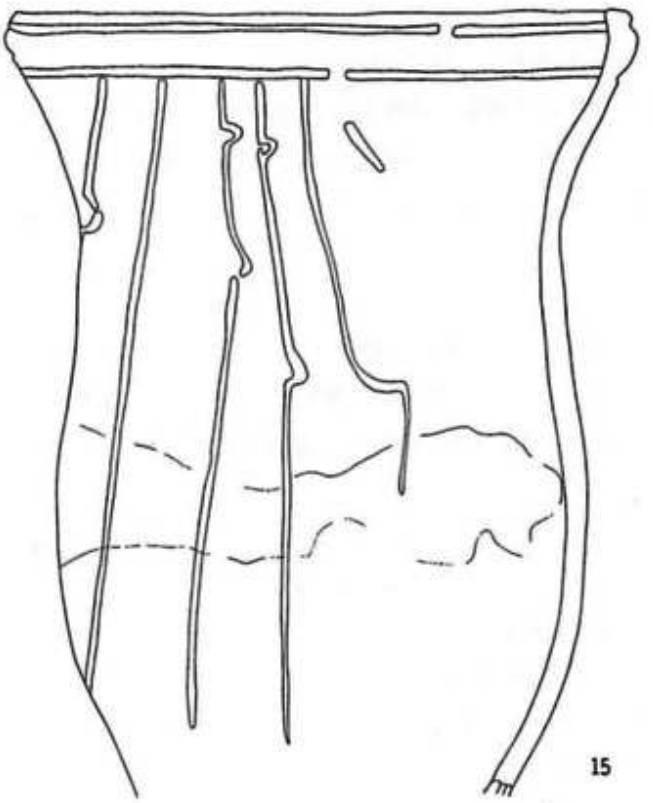
第4類（23、26）条線のみを有するもの。

23は、胴部の破片と思われるもので、条線のみを有す。

第5類（21、33）粘土紐による隆帯と幅広の沈線を有するもの。

33は、深鉢口縁部破片と思われるもので、粘土紐による隆帯と幅広の沈線を有する。





第20図　出土遺物（1/3）⑨

第Ⅱ群土器　縄文時代後半前半と思われる土器群（2、17～20、22、24、25、30、32）

2は、浅鉢口縁部破片と思われるもので、口縁部に刺突文を施し、一条の沈線を有す。

17は、深鉢口縁部破片と思われるもので、口縁部に円形刺突文を施し、沈線による区画文の間にも刺突を施す。

18は、深鉢口縁部破片と思われるもので、口縁部に円形刺突文と幅広の沈線を有する。

19は、深鉢口縁部破片と思われるもので、口縁部の粘土紐による隆帯に円形刺突文を施す。

30は、深鉢口縁部破片と思われるもので、口縁部に幅広の沈線を有し、粘土紐による隆帯に刺突文を施す。

32は、口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯と幅広の曲線沈線を有する。

一括出土遺物

第Ⅰ群土器　縄文時代中期後半と思われる土器群（34～116）

第1類（34、35）粘土紐による曲線隆帯と幅広の曲線沈線を有する。

35は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、口縁部に幅広の沈線を有し、胴部にかけての部分に粘土紐による曲線隆帯を施し、曲線沈線をRLの縄文に避す。

第2類（36、37、39～43、45、46、48～51、53、54、72、86～98、102）口縁部に無文帯を持ち、幅広の沈線を有する。

36は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、口縁部の無文帯に粘土紐による隆帯と幅広の沈線と曲線沈線を有し、地文はLRの縄文を充填する。

37は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、地文はRLの縄文を充填する。

41、45、50、53は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の沈線を有し、地文はLRの縄文を充填する。

86、88、90、91は、口縁部の破片と思われるもので、幅広の沈線のみを有す。

92、94～96、98は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の区画沈線による磨消文を有するもの。

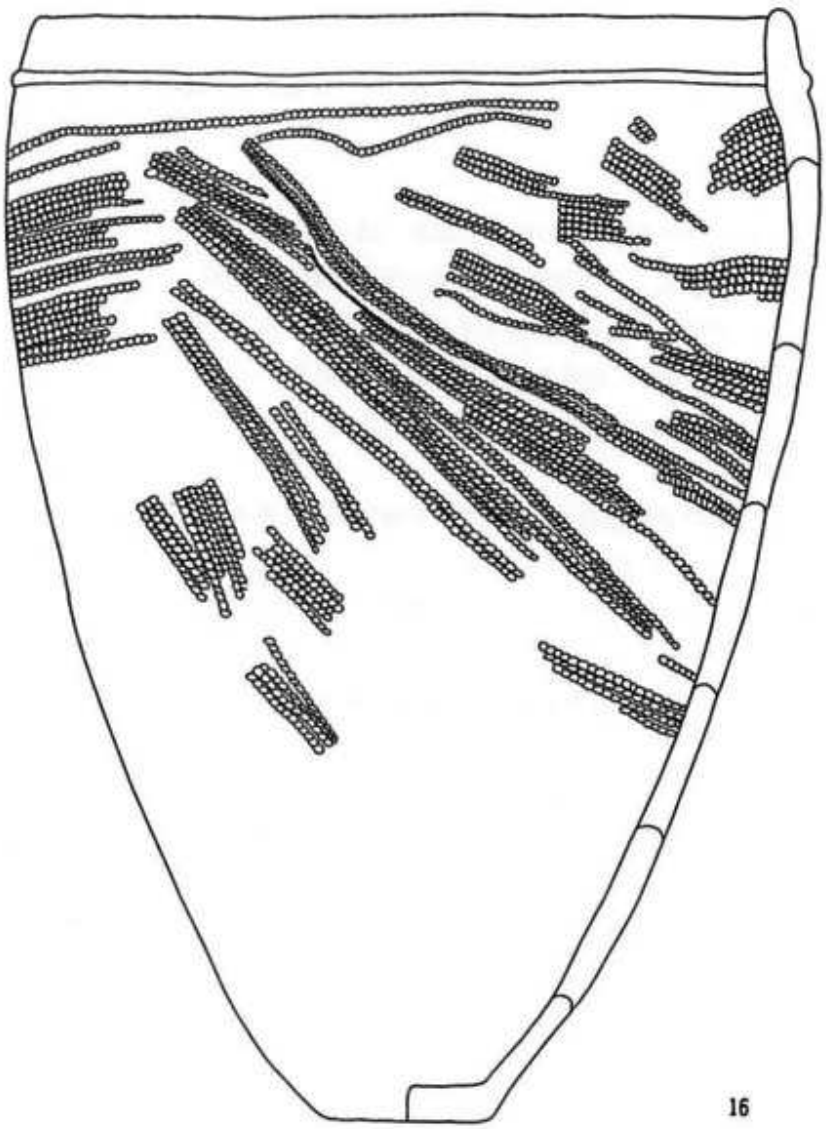
47、52、55、57は、深鉢胴部の破片と思われるもので、曲線沈線による磨消文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

58、61は、深鉢胴部の破片と思われるもので、沈線と曲線沈線による磨消文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

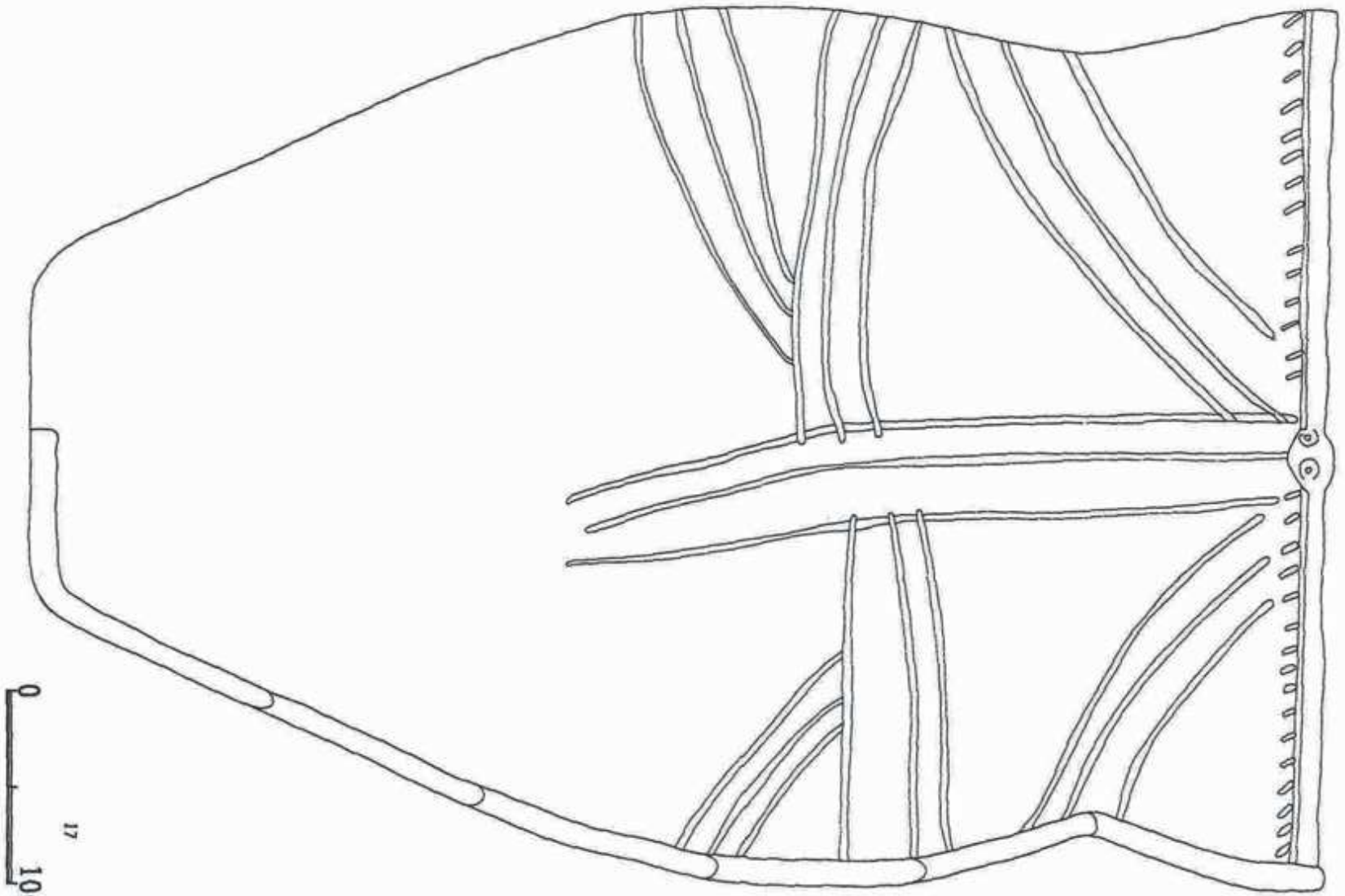
59は、深鉢口縁部から胴部へかけての破片と思われるもので、幅広の沈線と曲線沈線を有し、円形竹管文を施し、地文はRLの縄文を充填する。

63、64、69は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の曲線沈線による磨消文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

66は、深鉢胴部の破片と思われるもので、曲線沈線による磨消文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

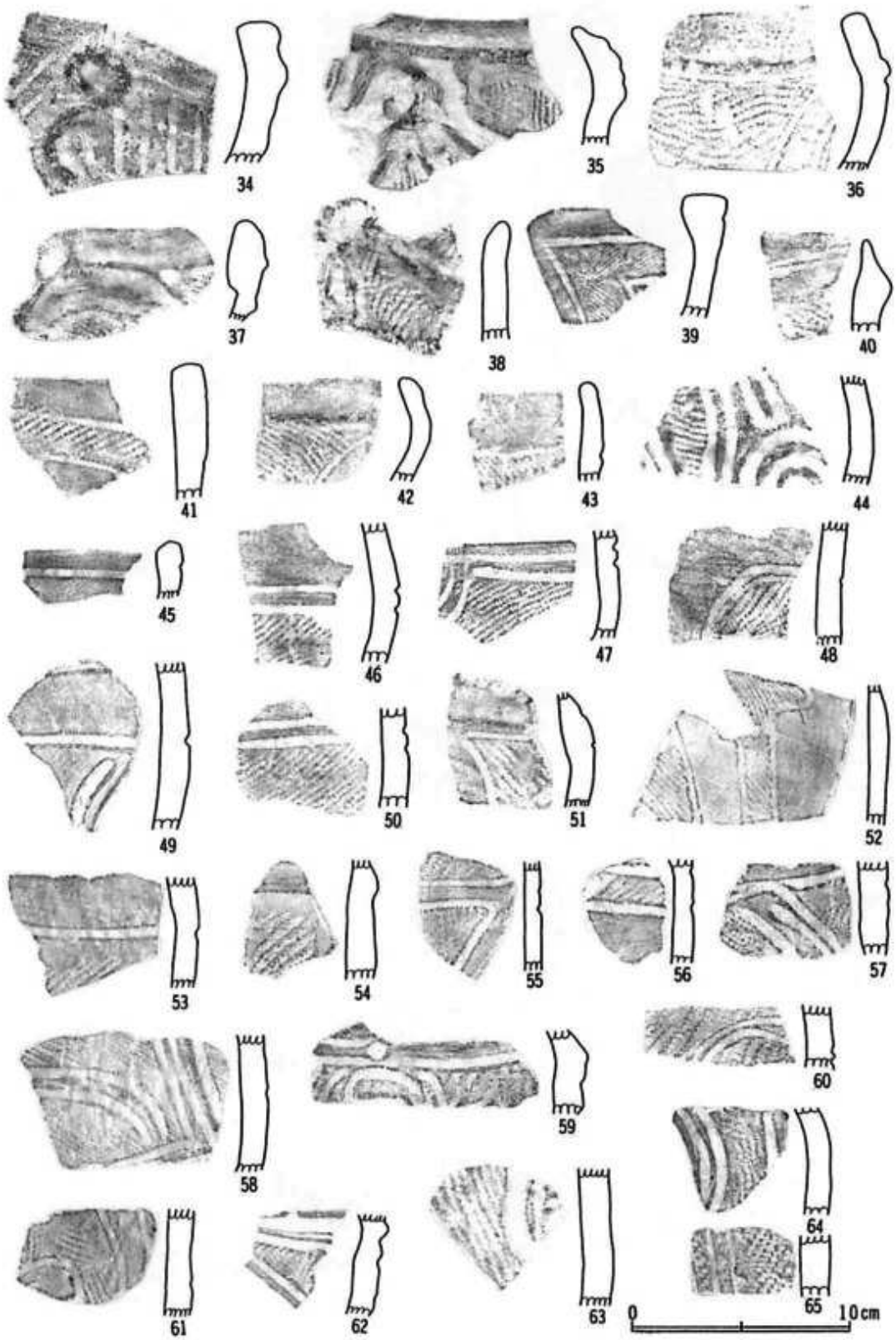


第21図　出土遺物（1/3）⑩

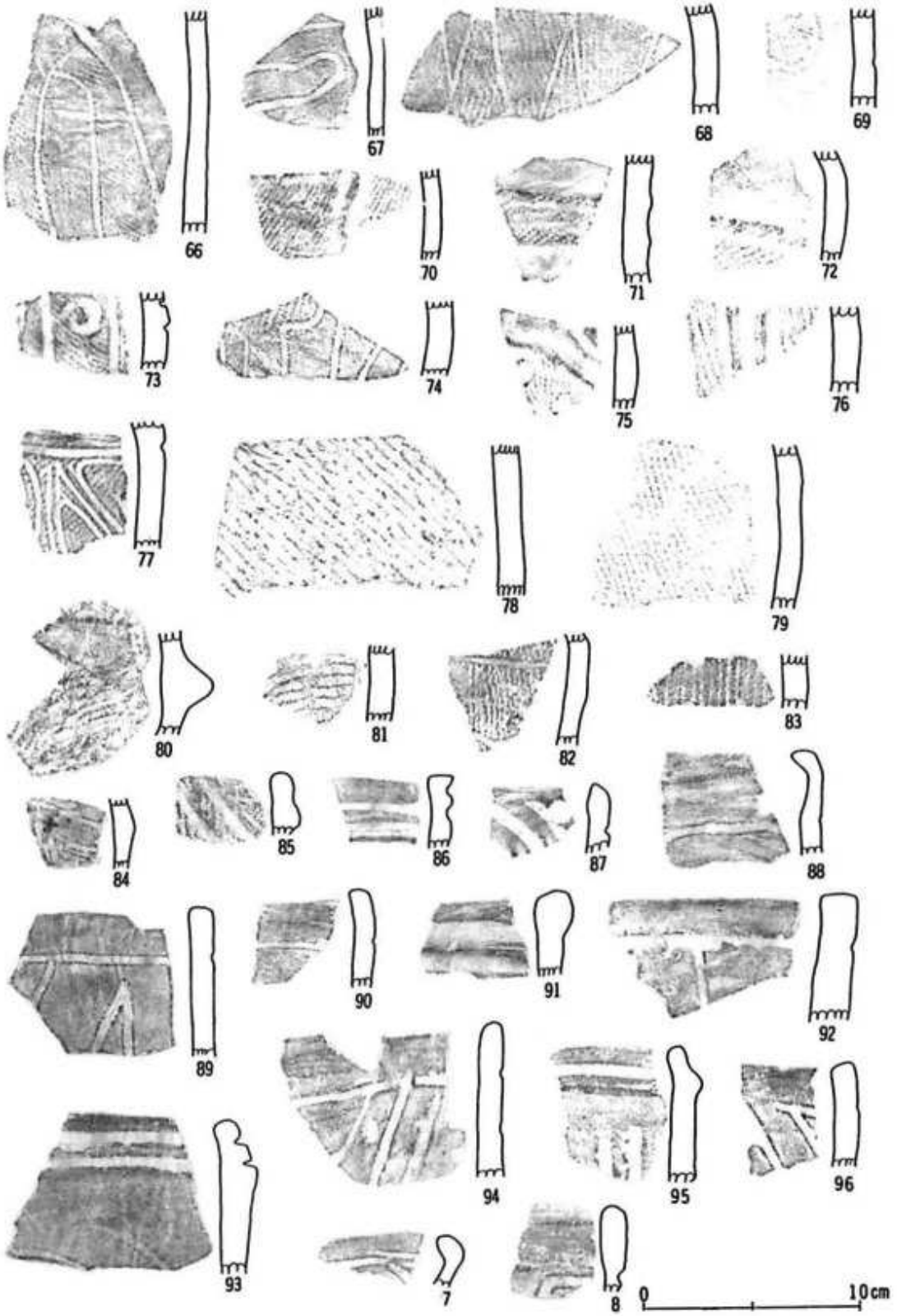


第22図 出土遺物（1/3）⑪

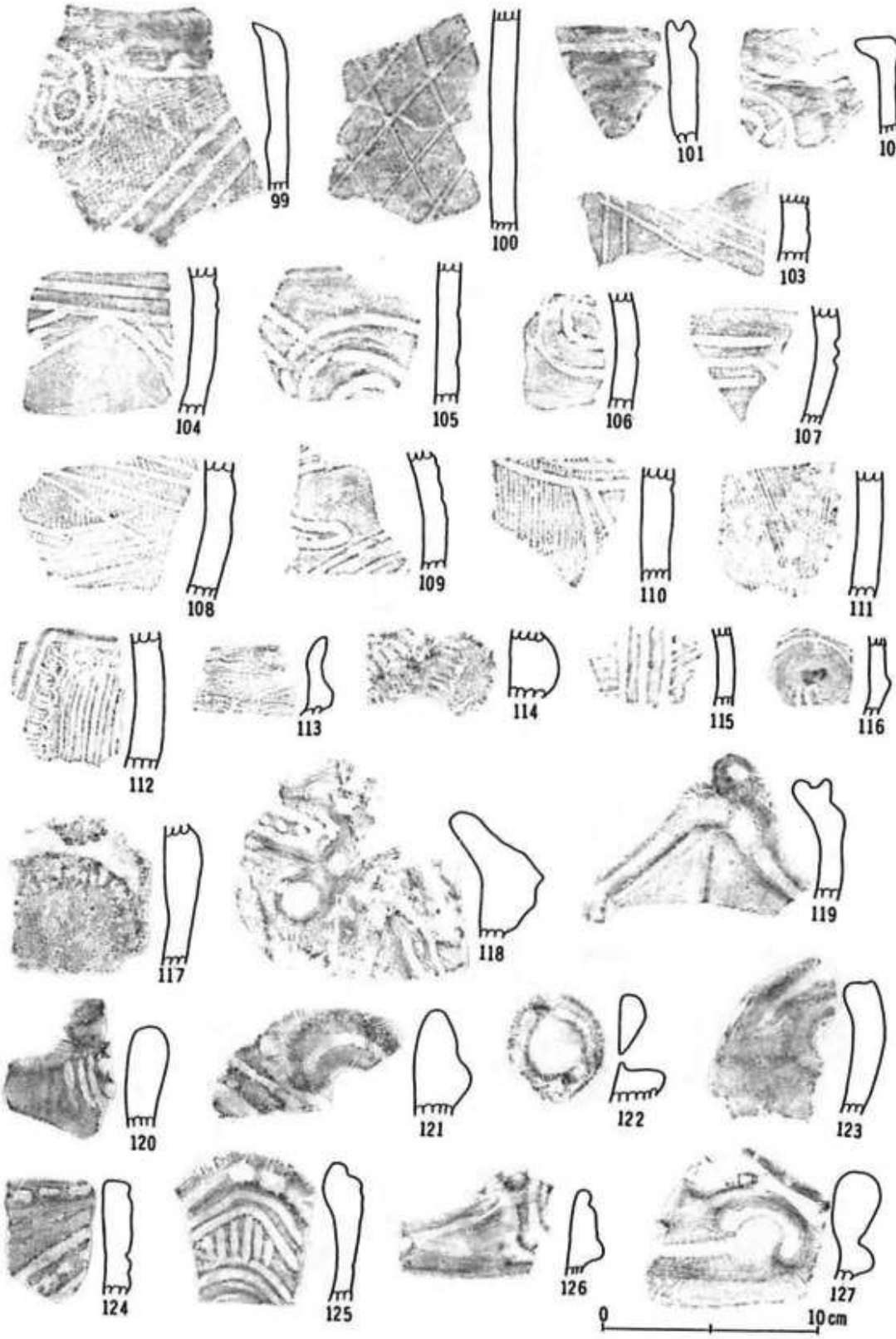
第23図　出土遺物（1/3）⑫



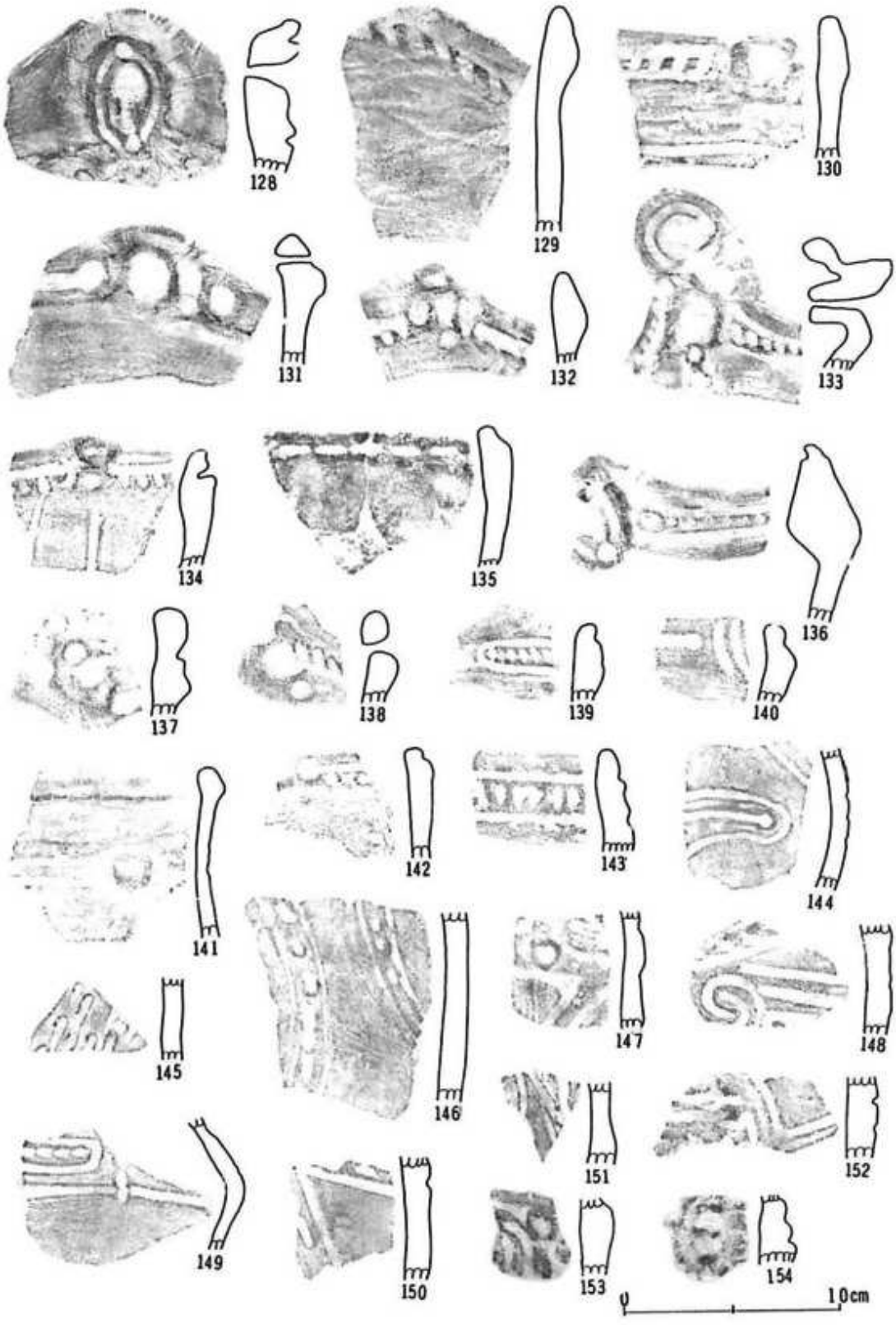
第24図　出土遺物（1/3）⑬



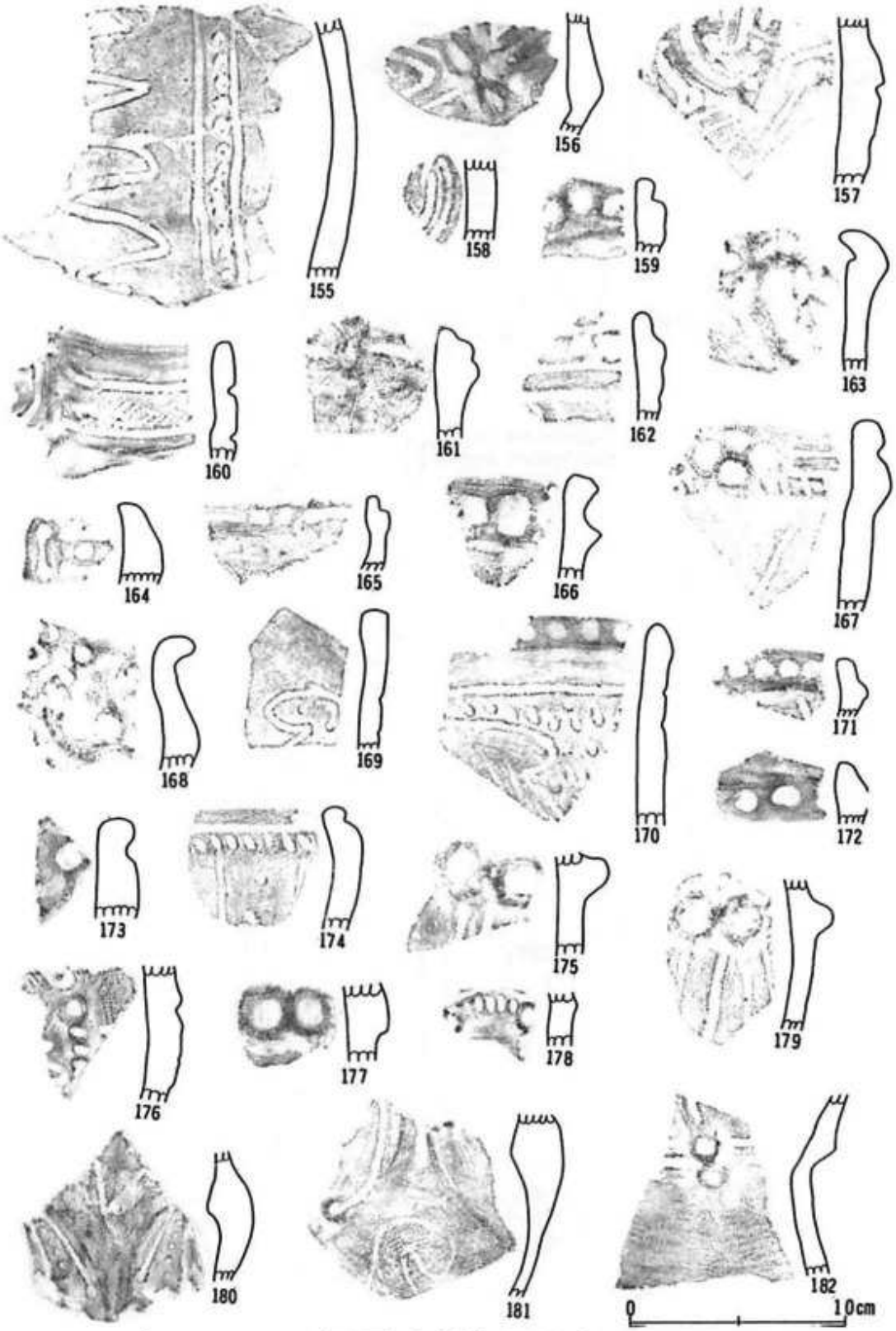
第25図　出土遺物（1/3）⑭



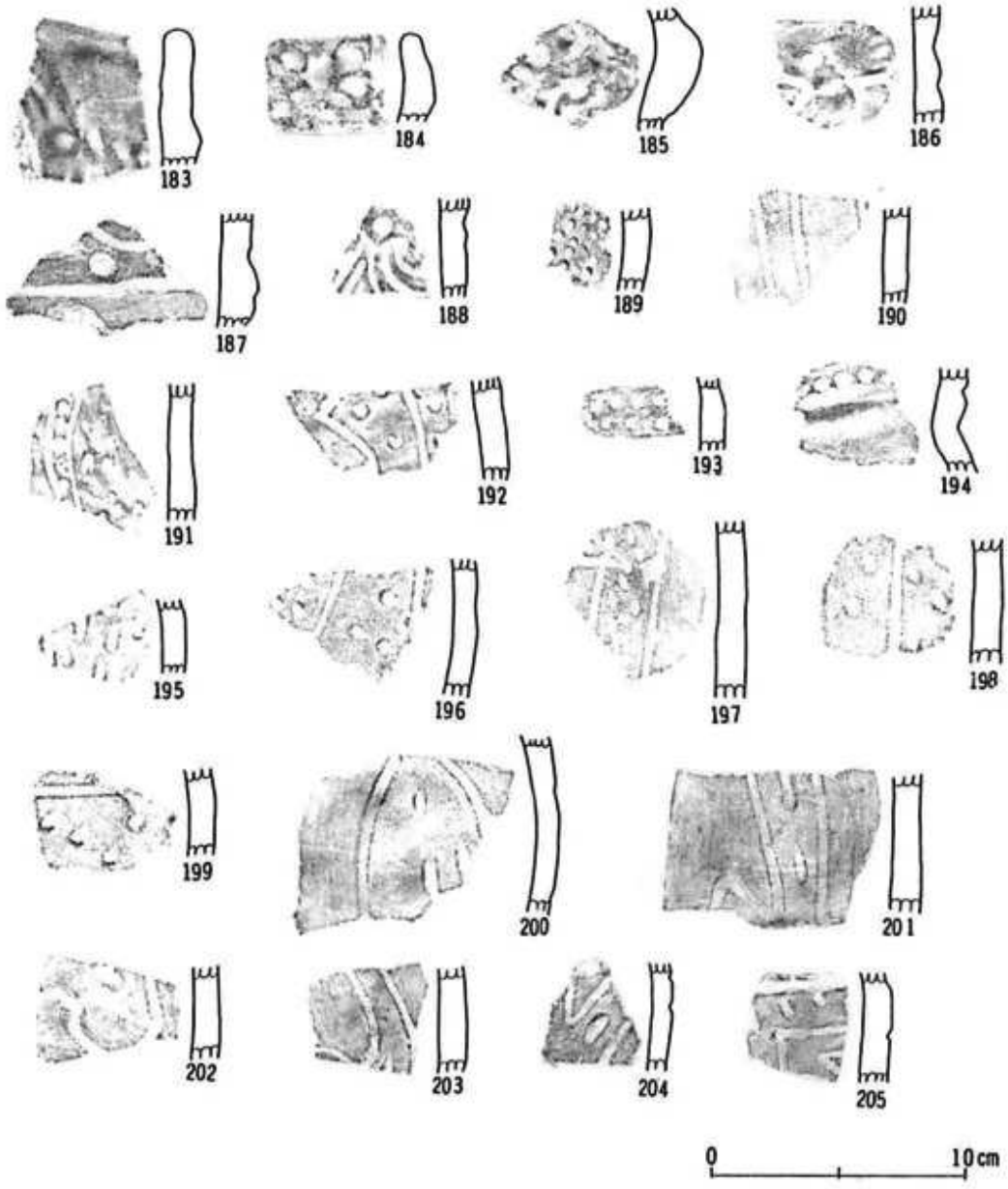
第26図　出土遺物（1/3）⑮



第27図　出土遺物（1/3）⑯


155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
0
10cm

第28図　出土遺物（1/3）㈫



第29図　出土遺物（1/3）⑱

67は、深鉢胴部の破片と思われるもので、曲線沈線による磨消文を有し、地文はLRの縄文を充填する。

68は、深鉢胴部の破片と思われるもので、区画沈線を有し、地文はLRの縄文を充填する。

73は、胴部の破片と思われるもので、沈線による楕円区画文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

99は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、沈線によるうず巻き文を有し、地文はLRの縄文を充填する。

100は、深鉢胴部の破片と思われるもので、地文はRLの縄文を充填する。

104～107は、深鉢胴部の破片と思われるもので、曲線沈線による磨消文を有する。

108は、深鉢胴部の破片と思われるもので、沈線による区画文を有し、地文はRLの縄文を充填する。

110は、深鉢胴部の破片と思われるもので、沈線による区画文を有し、条線を施す。

114は、胴部の破片と思われるもので、爪型文を有する。

第Ⅱ群土器　縄文時代後期前半と思われる土器群（117～205）

第1類（124、143、146、150、155、169、170、174、190～192、196～205）沈線と刺突文を有している。

124は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、口縁部に刺突文を有し、幅広の沈線の間にも刺突を有する。

143は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の沈線の間に刺突を有する。

150、204、205は、胴部の破片と思われるもので、区画された磨消文を施す。

155は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の曲線沈線を有し、沈線による磨消文の間に円形竹管文を施す。

170は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、口縁部に円形刺突文を有し、幅広の曲線沈線と刺突文を施している。

192、201～203は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の曲線沈線を有し、刺突文を施す。

第2類（130、139、149）楕円曲線沈線の刺突を有している。

149は、口縁部から胴部へかけての破片と思われるもので、幅広の楕円曲線沈線の間に刺突を有する。

第3類（118～123、125～129、131～138、140～142、144、145、147、148、151～154、156～168、171～173、175～189、193～195、）その他の文様を有するもの。

118は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、口縁部は、楕円曲線間に刺突文を有し、胴部に幅広の沈線を施す。

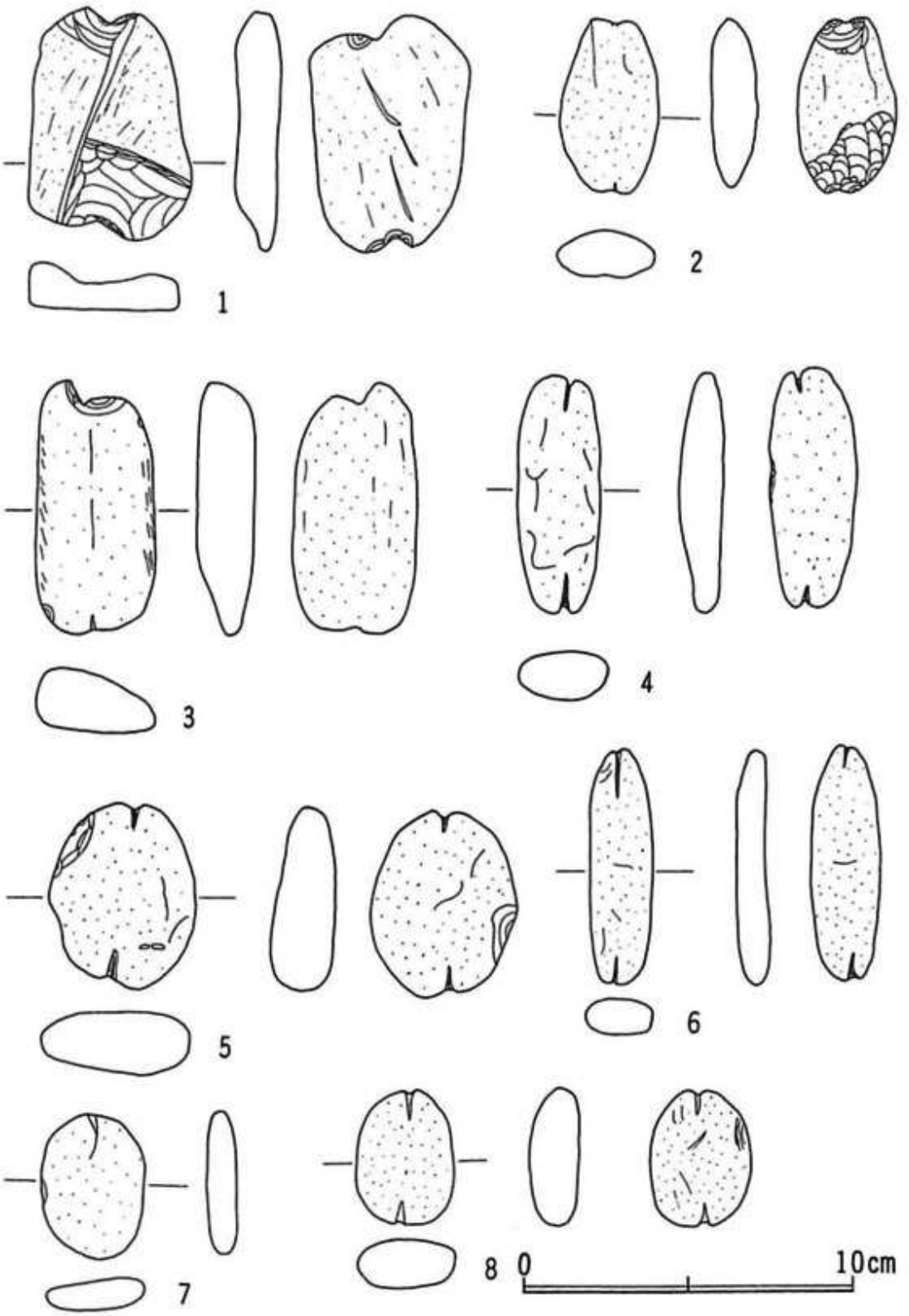
119は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、円形刺突文を施してある。

120は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、爪型文を施してある。

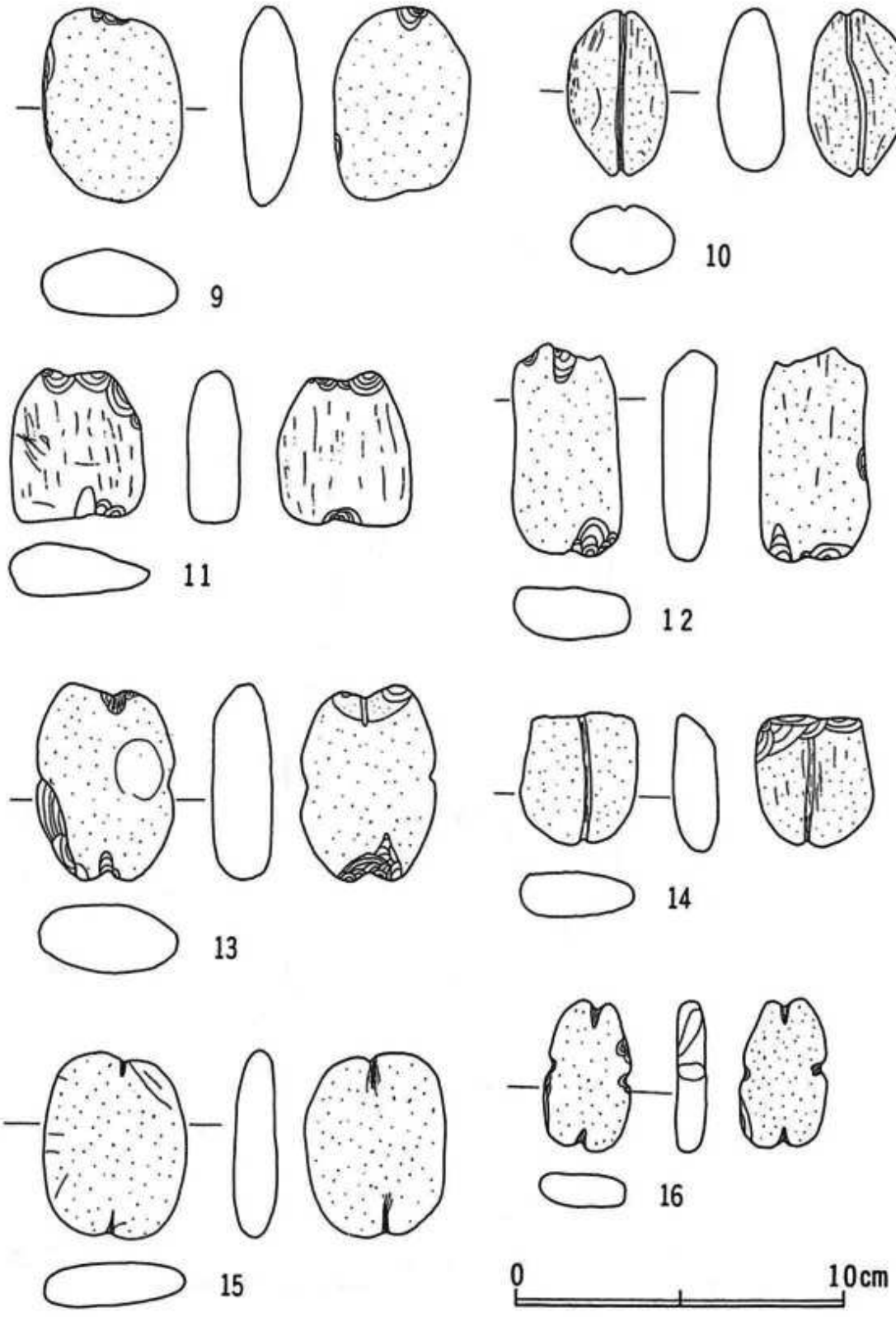
125は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の曲線沈線と区画沈線を有する。

128は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による楕円形隆帯を施し、円形刺突文を有する。

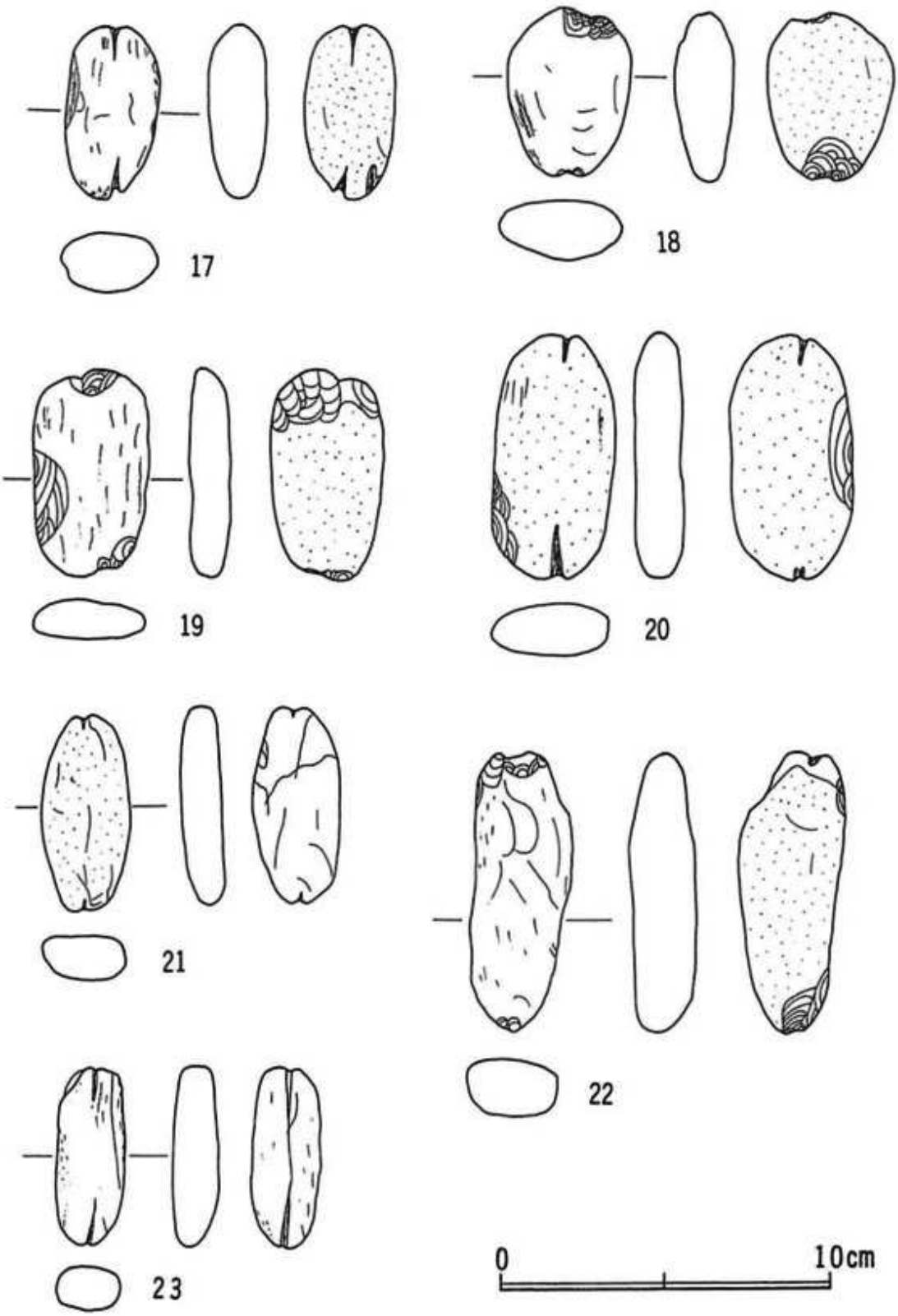
147は、深鉢胴部の破片と思われるもので、円形刺突文を施し、曲線沈線による磨消文を有し、地文はRLの縄文を充填する。



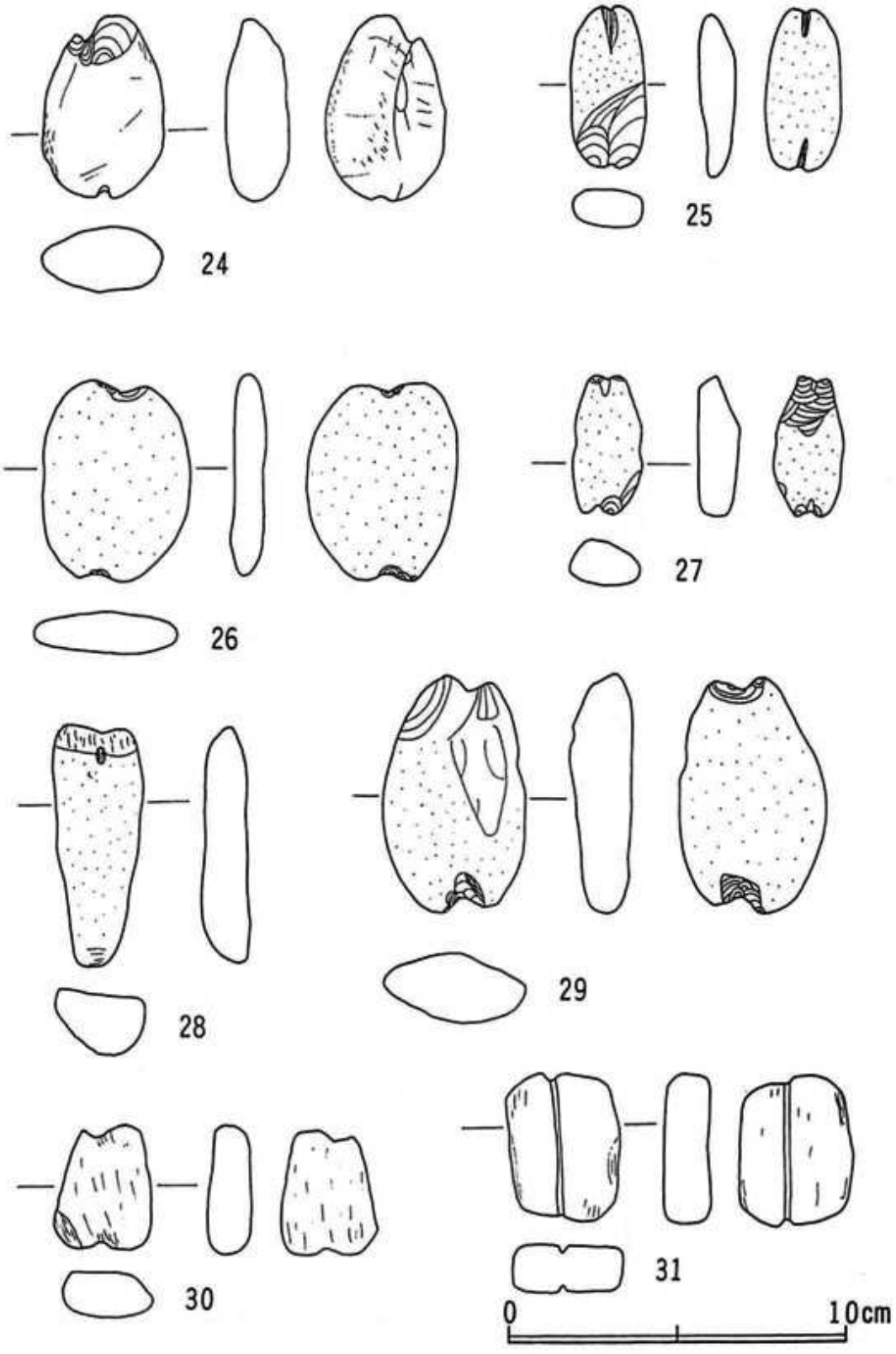
第30図　出土遺物（1/2）㊧



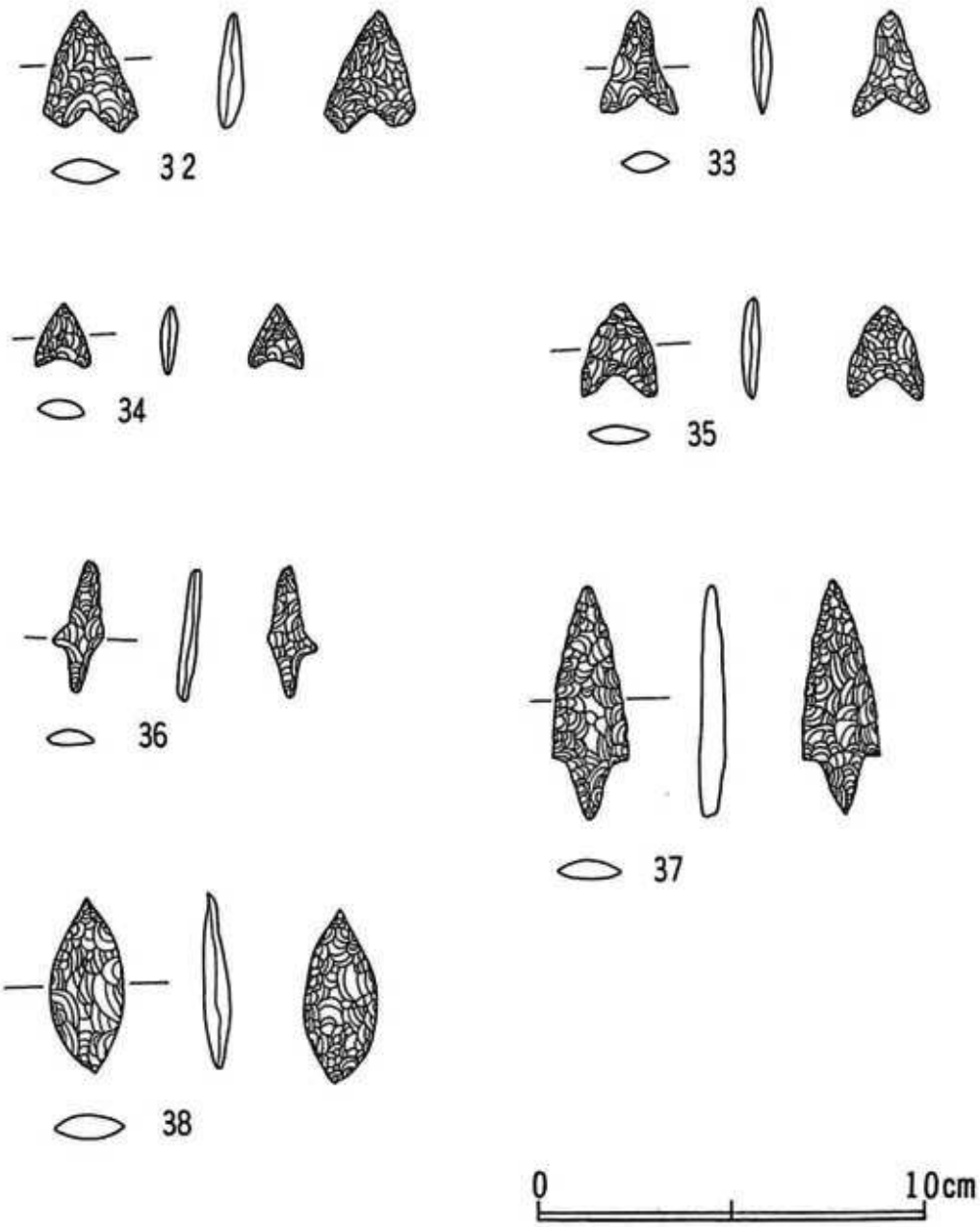
第31図　出土遺物（1/2）㉙



第32図　出土遺物（1/2）㉑



第33図　出土遺物（1/2）㉒



第34図　出土遺物（1/2）㉓

154は、胴部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯を有する。

160は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の曲線沈線を有し、地文はLRの縄文に刺突文を施してある。

166は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、円形の大型刺突文を有する。

175、176は、深鉢口縁部から胴部へかけての破片と思われるもので、粘土紐による楕円形隆帯を施し、幅広の沈線を有する。

181は、深鉢口縁部から胴部へかけての破片と思われるもので、曲線沈線を有し、地文はLRの縄文を充填する。

182は、深鉢口縁部から胴部へかけての破片と思われるもので、粘土紐による楕円形隆帯を施し、幅広の曲線沈線を有する。

石製品

本発掘調査では、表採資料を含めると石錘29点、土錘2点、石器7点、計38点である。

別表の石錘計測一覧表では、全体4割程度が完成品である。大きさは、大型のもので現長8cm程度、幅4cm程度で、小型のもので、現長4.5cm、幅2cm程度で、重さは前者58g、後者12gである。

石錘は、全体に自然石を利用し、簡単に両端を加工したものである。

土錘は、破損した土器の再利用と思われる。

石器に関しては、石鏃4点、有舌尖頭器1点出土しており、尖頭器を除いては、石質はみなチャートである。表採資料を含めて出土状態は良好で、多くが完成品である。

第5章　八木遺跡2次の調査

第1節　遺跡の概要

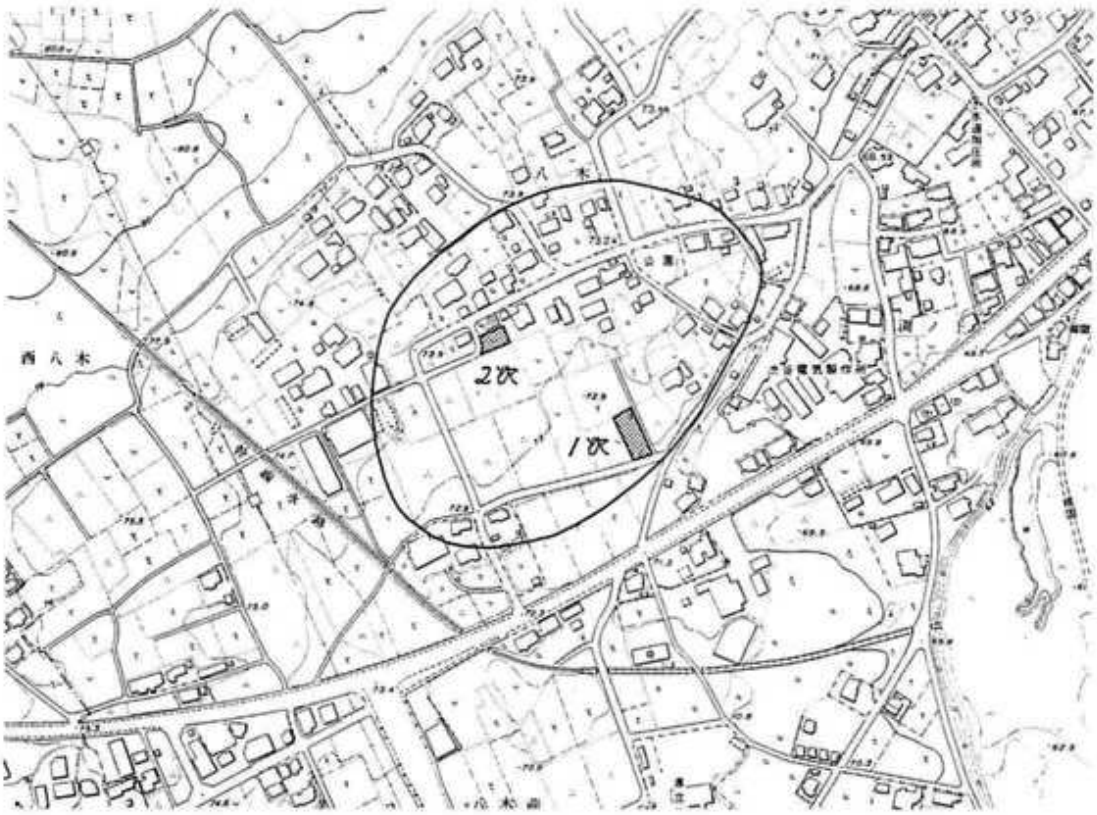
遺跡は西武新宿線狭山市駅から西へ直線距離で4kmの地点に所在する。入間川左岸の台地上に位置する。この付近の地形は複雑で、入間川がここで大きく蛇行しており河岸段丘をいく段も作り出している。また狭山から川越にかけて開けた沖積地の基点となっている。段丘は大きくみて3段に分けられる。沖積地との比高差は1段目が3m、2段目が8m、3段目が24mをそれぞれ測る。更に細かくみると2段目は、0.6～1mの比高差をもつ崖線が2カ所に認められる。

遺跡は、2段目の下段に東八木窯跡、上段に八木・八木北、3段目に八木上・宮地等が所在する。

分布調査による遺跡の範囲は、270m×200mで面積40,000㎡を測る。標高は73mを測る。縄文時代中期と奈良・平安時代の集落跡である。

調査を実施した周辺の遺跡は、昭和56年の宮地・八木北がある。宮地では縄文時代中期と奈良・平安時代の住居跡12軒、八木北遺跡では奈良・平安時代の住居跡1軒が発見されている。

調査区は東西に長い長方形で南北13m、東西17m、面積221㎡を測る。遺跡範囲の中央部からやや北に寄ったところに位置する。調査方法は入力によるグリッド掘削とし、北東隅を基点として西に五十音、南に数字で（○×○）Gと表した。調査の結果、縄文時代中期の竪穴式住居跡1軒、埋甕1基を検出した。基盤のロームは、砂利混じりであった。



第35図　八木遺跡周辺地形図

第２節　調査経過

８月19日　調査器材を搬入、グリッドを設定し、調査開始。

８月24日　グリッド掘削、表土下40cmでロームを検出、部分的に小砂利が混ざっている。

８月25日　遺構の確認をしたため、周囲のグリッドを掘削。

８月26日　遺構は縄文時代の住居跡と判明、周囲の拡張を継続。

９月１日　住居跡とは別に、単独の埋甕を検出。住居跡周囲のグリッド拡張を継続。

９月２日　住居跡の全体を把握。現自治会館の下に遺構がかかり、検出したのは、半分であった。住居跡の調査を開始。

９月３日　住居跡の調査。

９月７日　住居跡の調査。単独埋甕の精査。

９月８日　住居跡の調査。ロームが石混じりのため、調査が難航する。

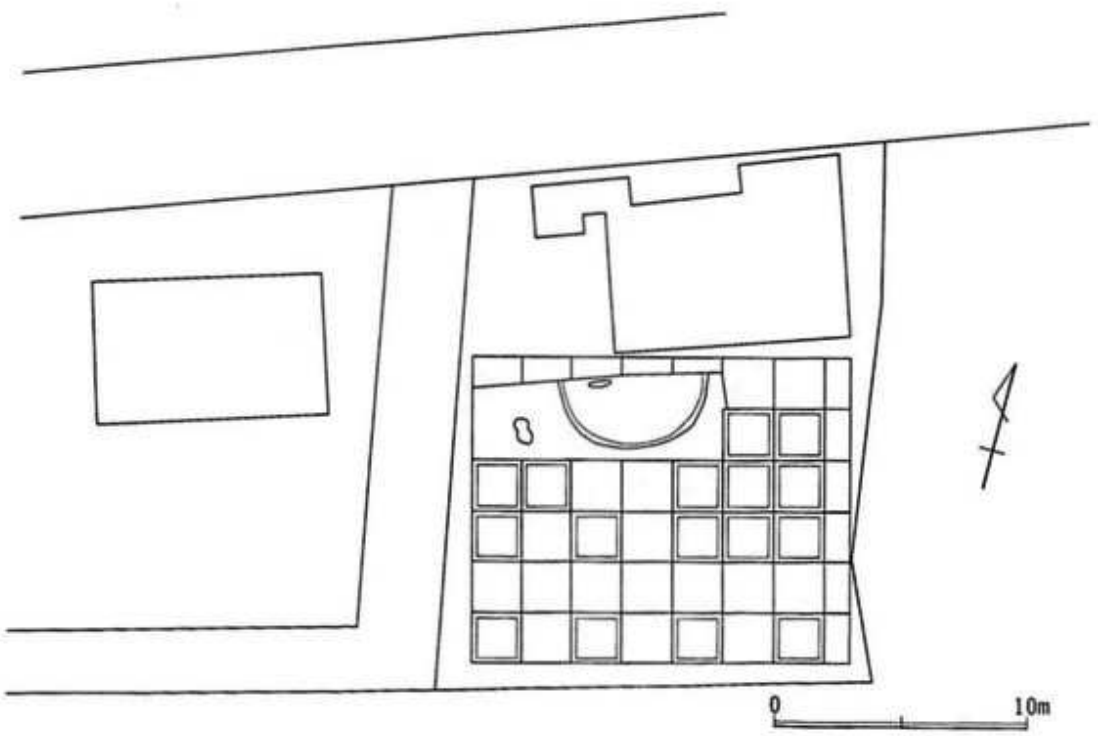
９月９日　住居跡の調査。埋甕の調査。

９月10日　住居跡の測量。全体測量を実施。

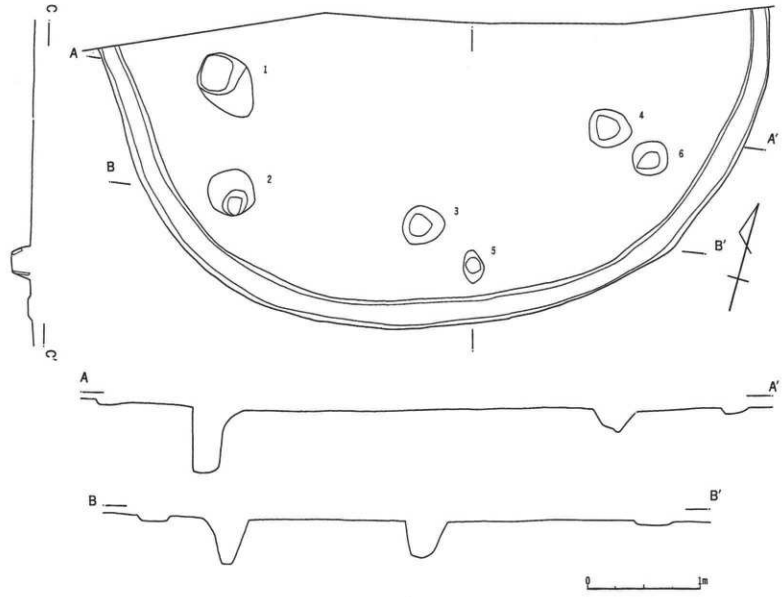
９月16日　埋めもどしを実施。

９月17日　埋めもどしを実施。

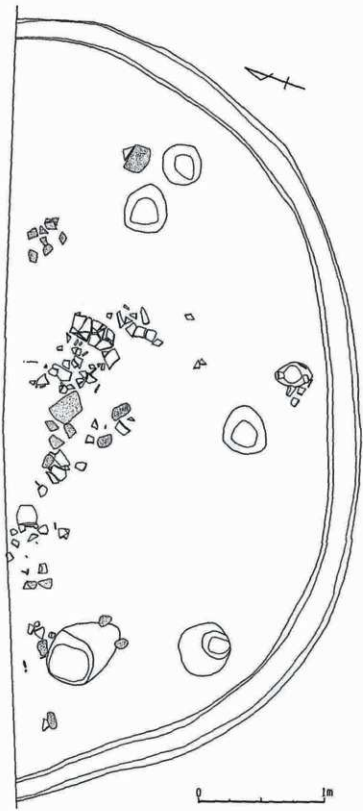
９月19日　埋めもどし完了、調査器材を撤収し、調査終了。



第36図　八木遺跡全測図（1/300）



第37図 第1号住居跡（1/60）



第38図　第1号住居跡遺物出土状態図（1/60）

第3節　遺構と遺物

第1号住居跡（第37・38図）

本住居跡は、調査区域の北端に位置する。旧自治会館が所在するため、半分程度の調査となった。

平面状態は、円形を呈する。規模は、東西方向の直系5.50mを測る。ロームへの掘り込みは浅く、約19cmを測る。東壁側は、壁溝の存在により、住居の範囲が確定された。壁溝は、幅20cm、深さ5cmの規模で全周する。柱穴は、6カ所検出した。P1は径25cm、深さ58cm、P2は、円形で径40cm、P3は円形で径35cm、P4は円形で径35cm、深さ20cm、P5は、長円形で深さ20cmをそれぞれ測る。P5内に深鉢の破片が埋設されている。床面は、平坦で堅くしまっている。炉は区域外に所在するものと考えられる。

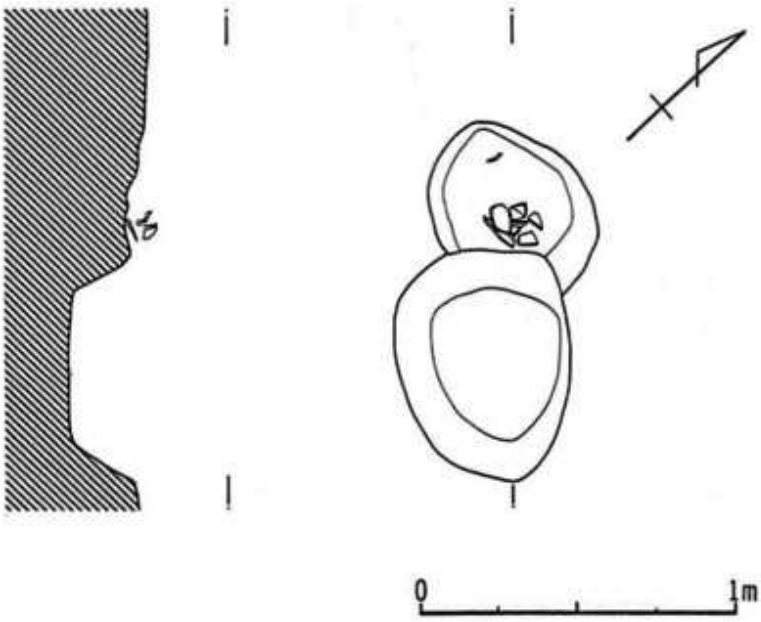
出土遺物は、住居の中央に集中して検出された。

1号埋甕（第39図）

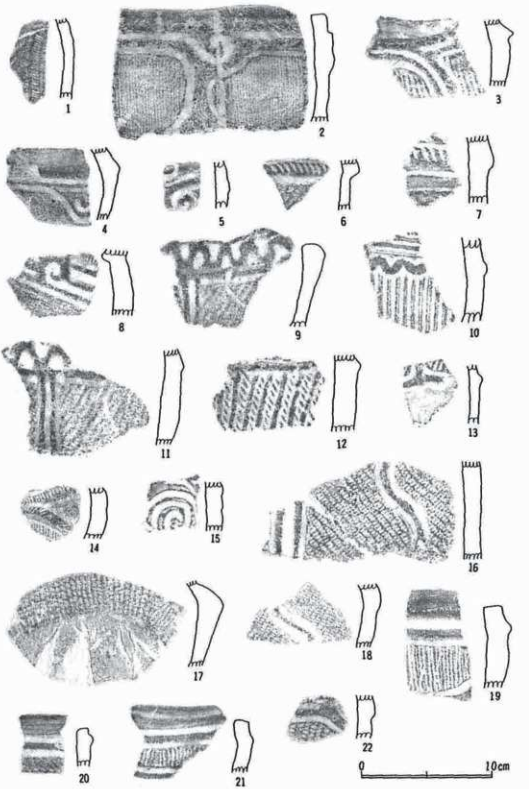
円形の土壙が2基連結した形を呈する。規模は、径55cm、長軸で110cmを測る。深さは、浅いところで6cm、深いところで20cmを測る。底面は、深いところで平坦、深いところでは凹凸がある。土器は、浅い部分に集中していた。

出土遺物（第44図）

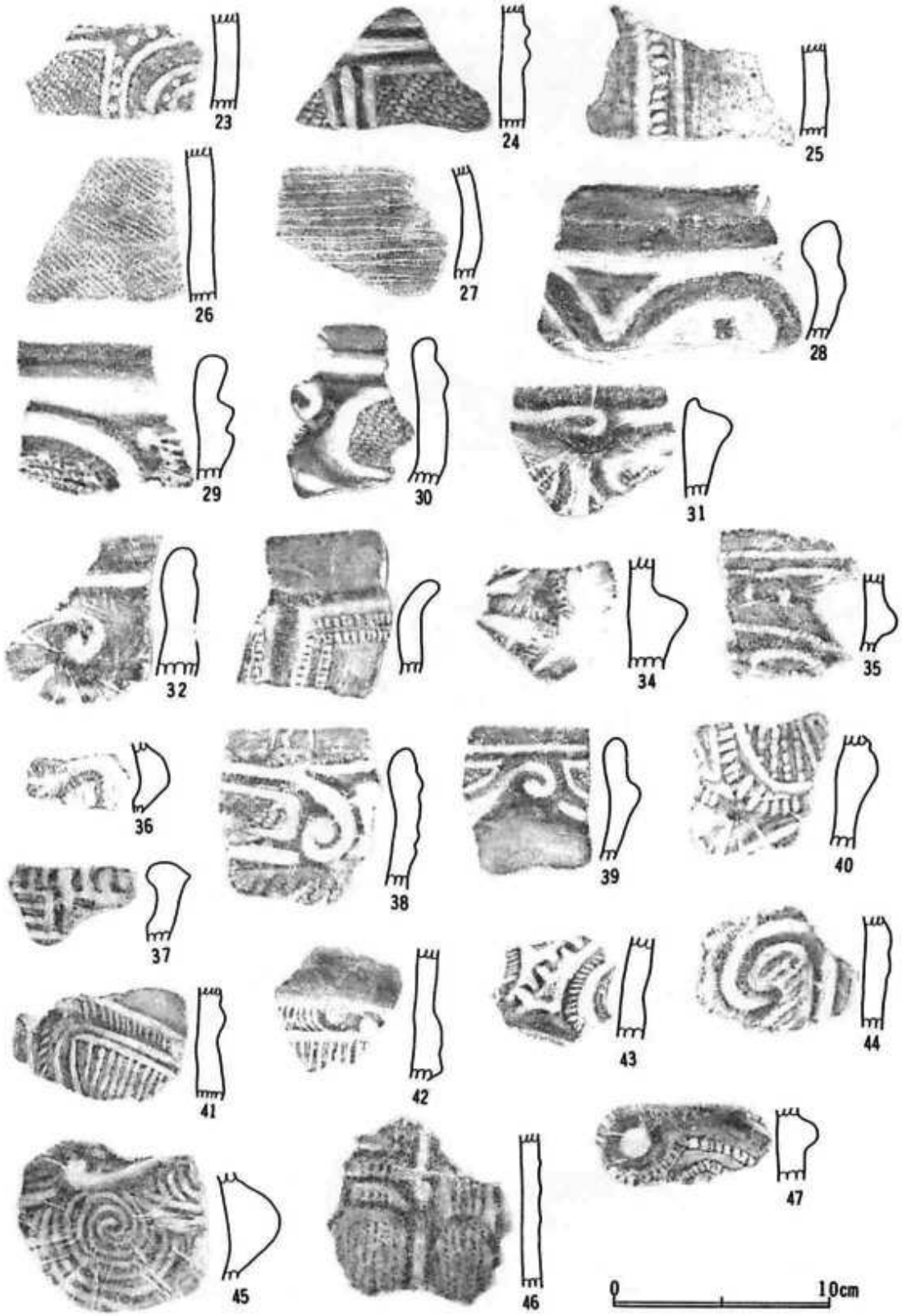
1. 縄文時代中期後半のものと思われる深鉢、口縁部にうず巻き状の沈線を楕円形状の沈線の上下に有し、内部に条線を施し、胴部にも幅広の沈線による磨消文を呈する。胎土に2mm～3mm程の小石を多量に含む。



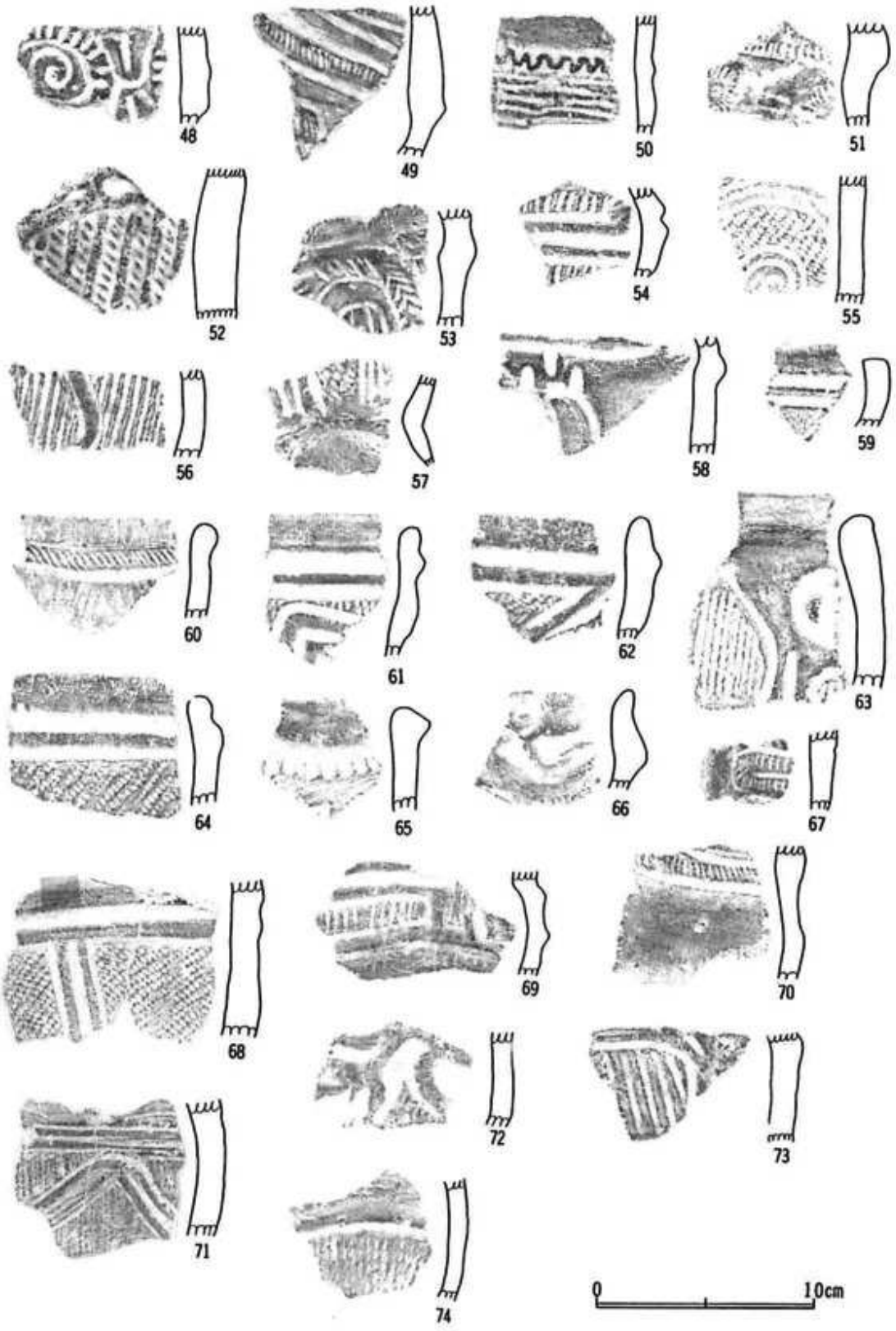
第39図　第1号埋甕（1/30）



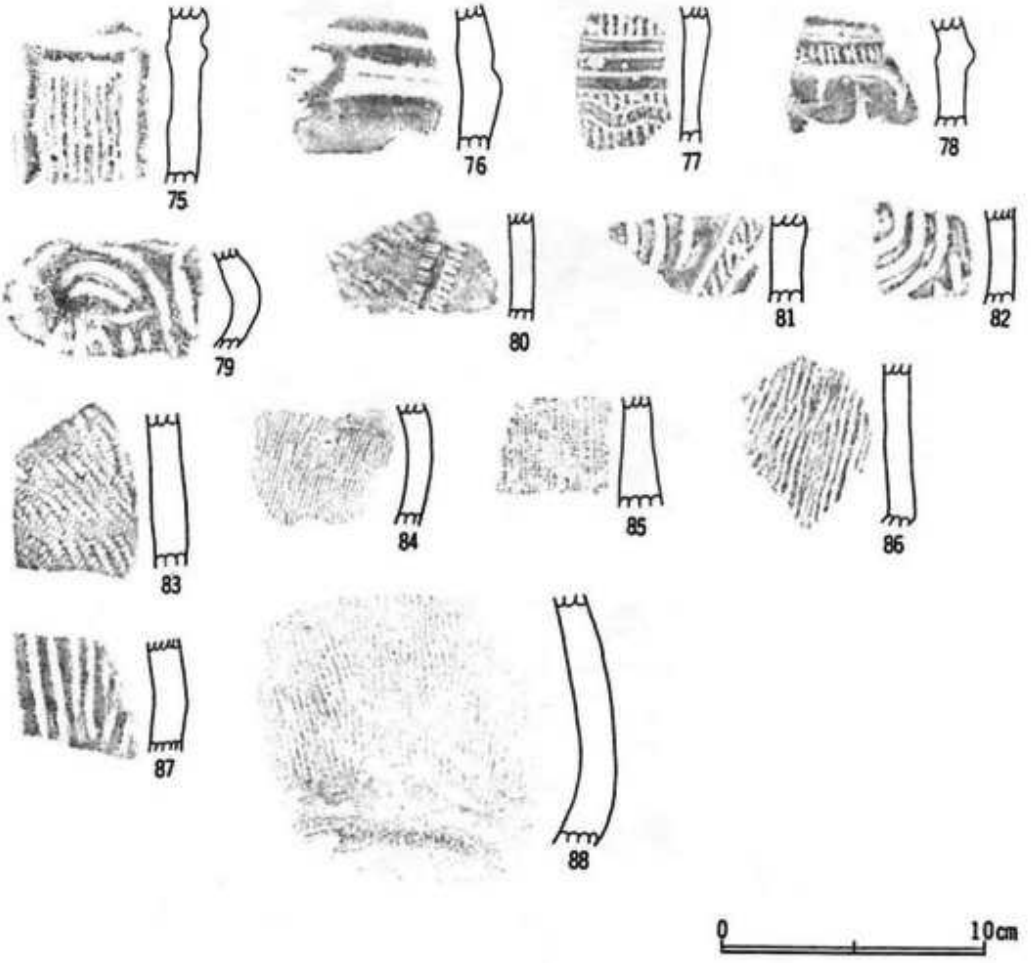
第40図　出土遺物（1/3）①



第41図　出土遺物（1/3）②



第42図　出土遺物（1/3）③



第43図　出土遺物（1/3）④

第1号住居跡出土遺物（第40・41・45図）

第1群土器　縄文時代中期中葉と思われる土器群（1～18）

2は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、地文は条線のみを施す。胎土は2mm～3mm程の砂粒を多少含む。

3は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、地文はLRの縄文を充填する。

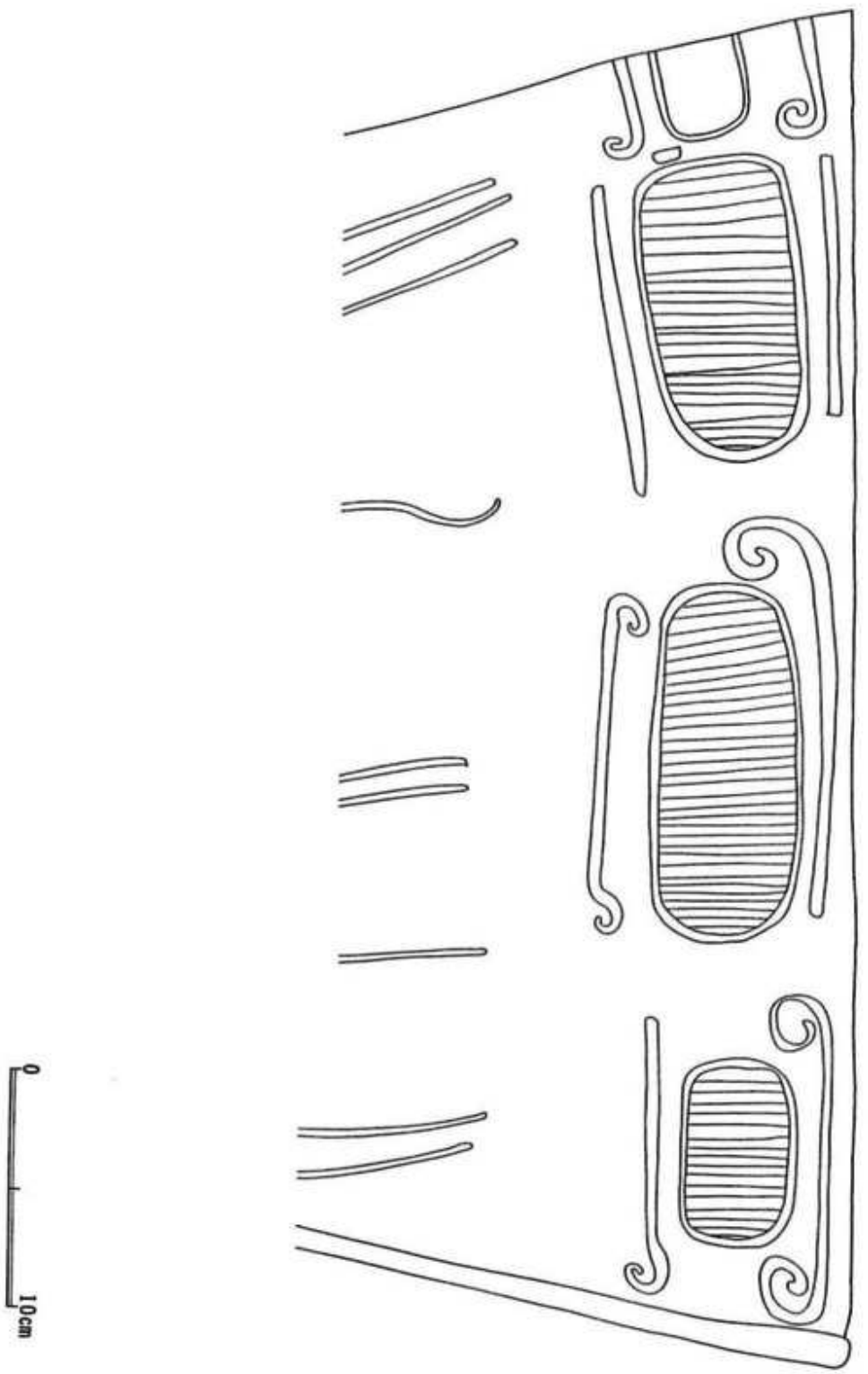
6は、口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、粘土紐による隆帯に、刺突文を施す。

9は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、幅広の沈線による磨消文を施し、地文はLRの縄文を充填する。

10は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、幅広の沈線による磨消文を施す。

12は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の沈線上に粘土紐による隆帯を有する。

14は、胴部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、爪型文を施してある。



第44図　出土遺物（1/3）⑤

16は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯と幅広の沈線による磨消文を施し、地文はRLの縄文を充填する。

17は、深鉢底部の破片と思われるもので、地文は、RLの縄文を充填する。

第Ⅱ群土器　縄文時代中期後半と思われる土器群（19～27）

19、21は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の沈線を有し、条線を施してある。

20は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の沈線を有し、地文は、RLの縄文を充填する。

23は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、区画文による沈線を有し、円形竹管文を施し、地文は、RLの縄文を充填する。

25は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による隆帯に刺消文を有し、幅広の沈線による磨消文を施す。

一括出土遺物（第41・42・43図）

第Ⅰ群土器　縄文時代中期中葉と思われる土器群（28～58）

第1類（28～31、36）粘土紐による曲線隆帯と曲線沈線による磨消文を施すもの。

29は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有し、幅広の沈線による磨消文を施し、地文はRLの縄文を充填する。

第2類（32、38～41、44）曲線沈線を有するもので、うず巻き状沈線を施し、地文はRLの縄文を充填する。

44は、胴部の破片と思われるもので、うず巻き状沈線内部に、RLの縄文を有する。

第3類（33～35、37、42、43、45～58）その他の文様を有するもの。

43は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯に爪型文を施し、幅広の曲線沈線を有する。

45は、深鉢胴部の破片と思われるもので、隆帯部にうず巻き状の沈線を有する。

47は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、粘土紐による楕円形隆帯を有し、RLの縄文を充填する。

48は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐によるうず巻き状の隆帯を有する。

50は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯と沈線を有する。

57は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、地文はLRの縄文を充填する。

第Ⅱ群土器　縄文時代中期後半と思われる土器群（59～88）

60は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、口縁部の粘土紐による隆帯部に半竹管文を施し、幅広の条線を有する。

62、64は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の沈線による区画文を有し、地文は、LRの縄文を充填する。

63は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、幅広の曲線沈線による磨消文を施し、地文は、LRの縄文を充填する。

65は、深鉢口縁部の破片と思われるもので、円形竹管文を有する。

69、73は、深鉢胴部の破片と思われるもので、幅広の楕円形沈線を有し、幅広の条線を施す。

71は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯と曲線沈線を有し、条線を施す。

75は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片と思われるもので、区画沈線を有し、幅広の条線を施す。

76は、胴部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有する。

79は、深鉢胴部の破片と思われるもので、粘土紐による曲線隆帯を有する。

80は、胴部の破片と思われるもので、半竹管文を施し、地文はRLの縄文を充填する。

82は、胴部の破片と思われるもので、円形沈線を有する。

83は、深鉢胴部の破片と思われるもので、RLの縄文のみを有する。

84、85、86は、胴部の破片と思われるもので、条線のみを有する。

88は、深鉢底部の破片と思われるもので、条線のみを有する。

89は、深鉢である。現高19cm、同径18.8cmを測る。口頸部に無文帯を持ち、胴部は、斜縄文を施したあとに隆帯を貼りつけている。約40％の残存。色調は黄土色。胎土に砂・長石を含む。1号住居跡出土。

90は、深鉢である。口径15cmで口縁下に最大径があり17cmを測る。口縁部は内彎して立ち上がり、頸部は屈曲し2条の条線によって胴部と区切られる。胴部は上半に最大径を持ちストンと底部へとつながる。文様は半裁竹管による2条の沈線を横方向に波状に施し、波状の頂点と最下点から下方に別の沈線を垂下させている。地文は単節の斜縄文である。口縁部は、細い粘土紐を斜めに格子状に貼りつけている。90％の残存。色調は茶褐色を呈する。胎土に砂・長石を含む。1号住居跡出土。

91は、深鉢である。口径22.5cm。最大径は口縁部にある。口縁部に把手があったような痕跡があるが剥離していて不明。外面の全面に撚糸文を施し、口縁直下に波状の沈線が1条巡る。胴部下半に隆帯が斜めに貼りつけられているが25％の残存のため詳細は不明。色調は黄橙色。胎土に長石を多く含む。遺存状態は不良。1号埋甕。

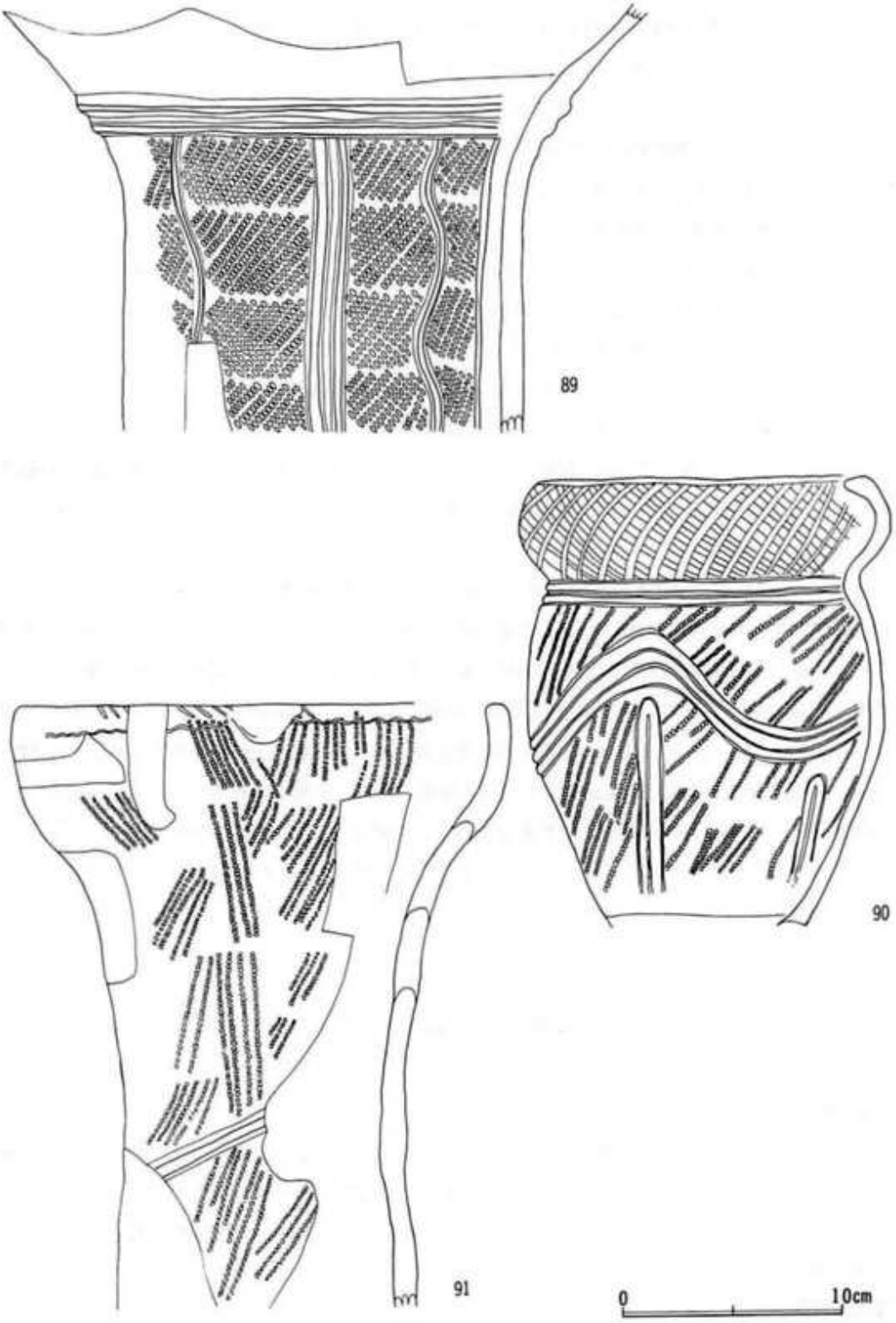
第6章　結　　語

沢台遺跡

この遺跡は、北に突出した大地とその基部に位置している。住居跡は、検出しなかったが土壙を検出し、縄文土器の破片が採取できたことから縄文人の活動の場として位置づけられる。北側の台地下には、久保川と呼ばれる川が流れており、その水を必要としていた動植物を獲得する場としての位置づけが考えられる。

高根遺跡

遺跡の所在は、山林であったため山芋堀で土器がわずかに採取できたので知られていた。今回の調査で、縄文時代後期の集落と墓壙群であることが判明した。表土層が20センチメートル前後と浅



第45図　出土遺物（1/3）⑥

かったが、山林であったために保存状態は良好であった。しかし、住居跡は、ロームへの掘り込みが浅く壁溝と床の一部しか遺存していなかった。単独で出土した土器は埋甕と思われるが、ロームを掘り込んで埋められていたものはわずかでほとんどがローム層上面にて発見された。ここが畑等の耕作地であったなら確実に壊されて遺存していなかったと思われる。

さて、本遺跡から石錘が多く出土したことが特筆される。土壙から出土したものは、なぜそこに埋められたかを解明しなければならない。遺跡の北側は現在池となっているように、水の溜まりやすい地形であることから縄文時代でも同様のことであろう。石錘が魚を捕獲する網の錘として使われていたとしたらここで漁をしていたのであろう。

八木遺跡

遺跡の所在するところは、宮地遺跡が所在する台地の一段下の段丘である。基盤となるローム層は、砂利が混ざっていてロームの堆積していたときに水が流れていた状況を示している。

引用・参考文献

駒見和夫　1982「宮ノ越遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第44集　埼玉県遺跡調査会

小渕良樹他　1986「狭山市史」原始古代資料編　狭山市

小渕良樹・仲山英樹　1986「揚櫨木遺跡」狭山市文化財報告12 狭山市教育委員会

小渕良樹　1983「笹井古墳群・八木北遺跡・滝祇園遺跡」狭山市文化財報告Ⅶ　狭山市教育委員会

小渕良樹・仲山英樹　1985「城ノ越遺跡2次・3次、上広瀬上ノ原遺跡他」狭山市文化財報告Ⅹ　狭山市教育委員会

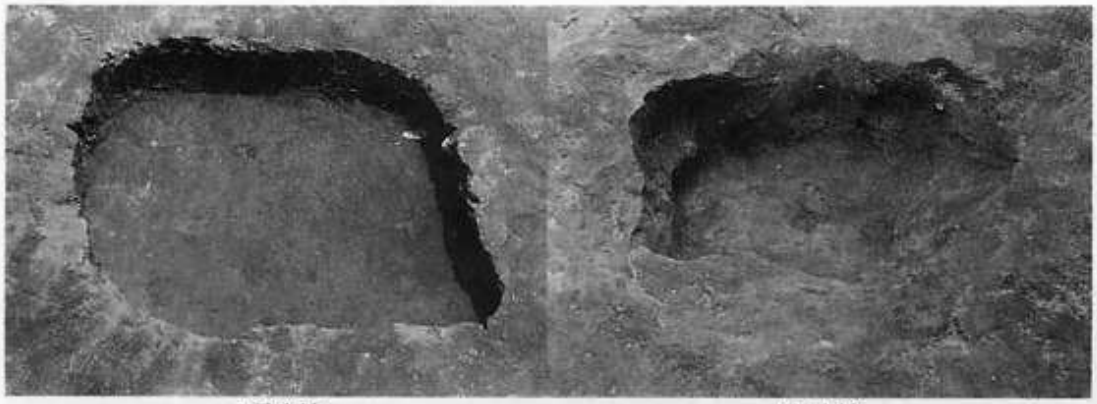
増田正博　1978「城ノ越遺跡」城ノ越遺跡調査会

図　　版

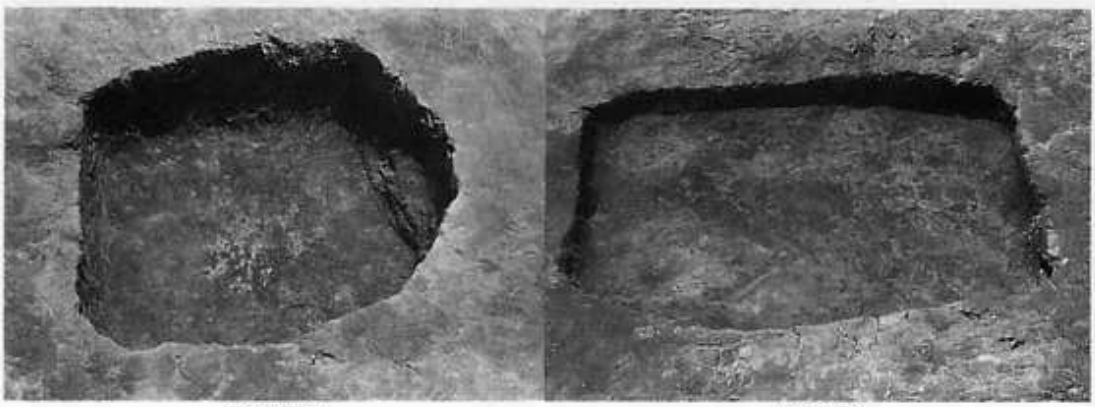
沢台遺跡調査区全景

沢台遺跡調査区全景

図版 2



1号土坑　　2号土坑



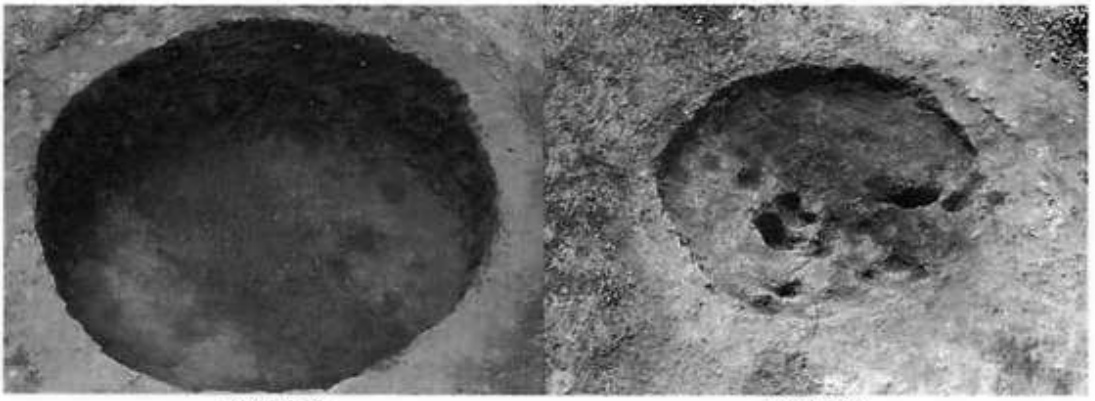
3号土坑　　4号土坑

5号土坑　　6号土坑

7号土坑　　8号土坑

9号土坑　　10号土坑

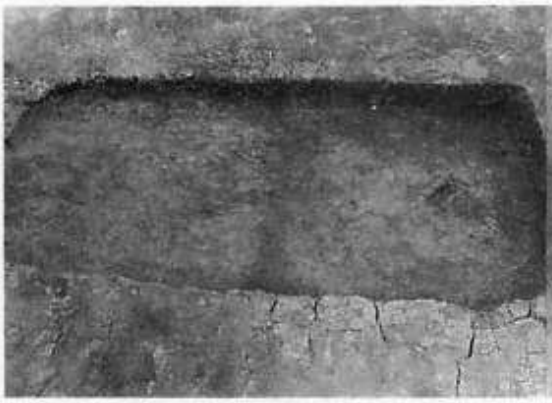
11号土坑　　12号土坑



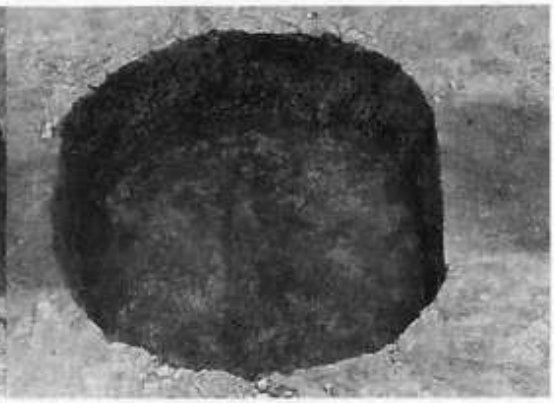
13号土坑　　14号土坑

15号土坑　　16号土坑

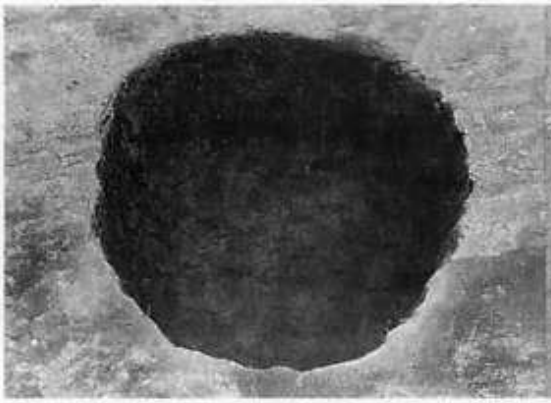
図版 4



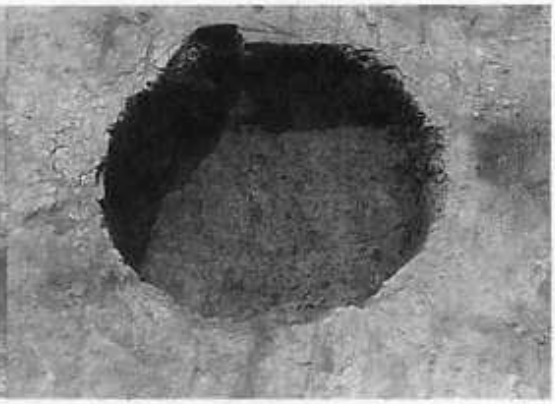
17号土坑



18号土坑



19号土坑

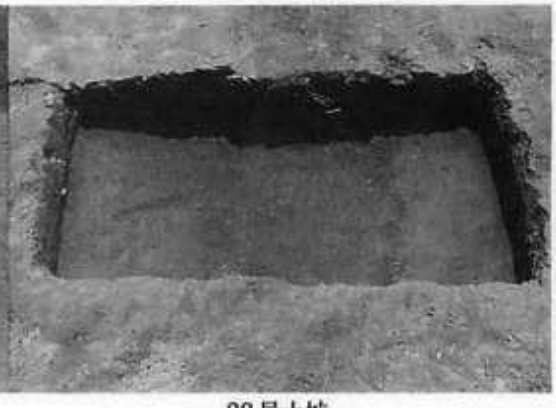


20号土坑

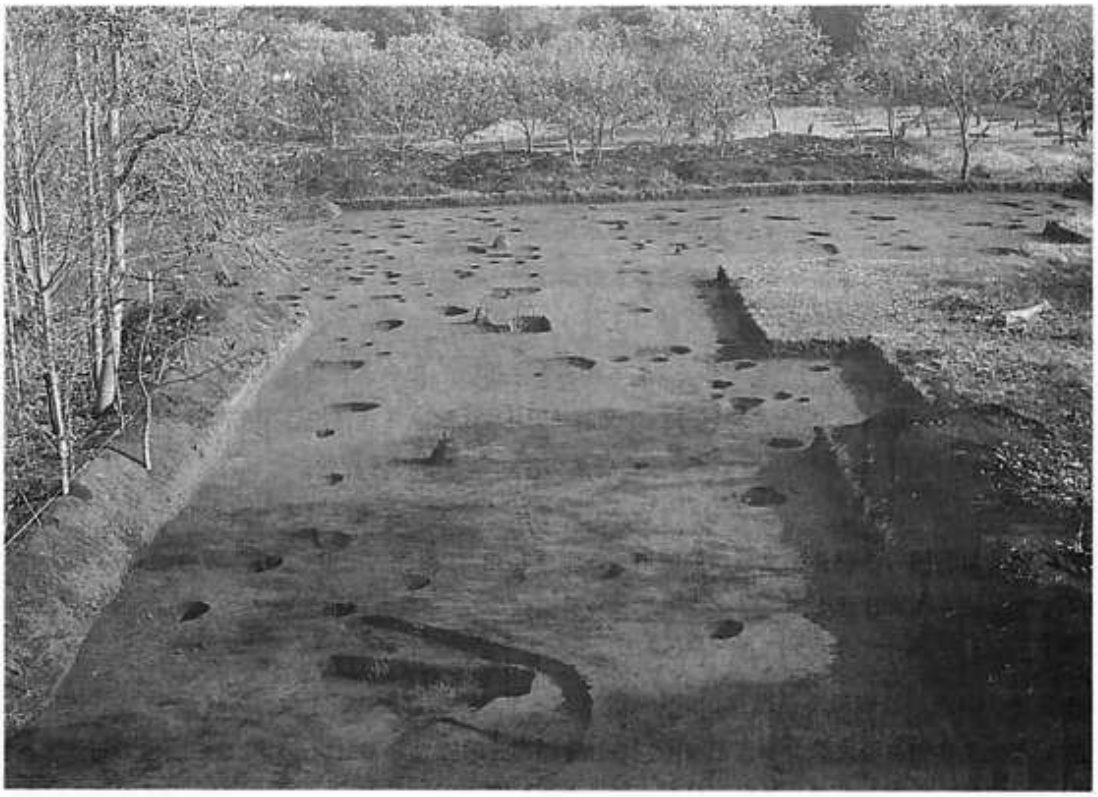
23号土坑

24号土坑

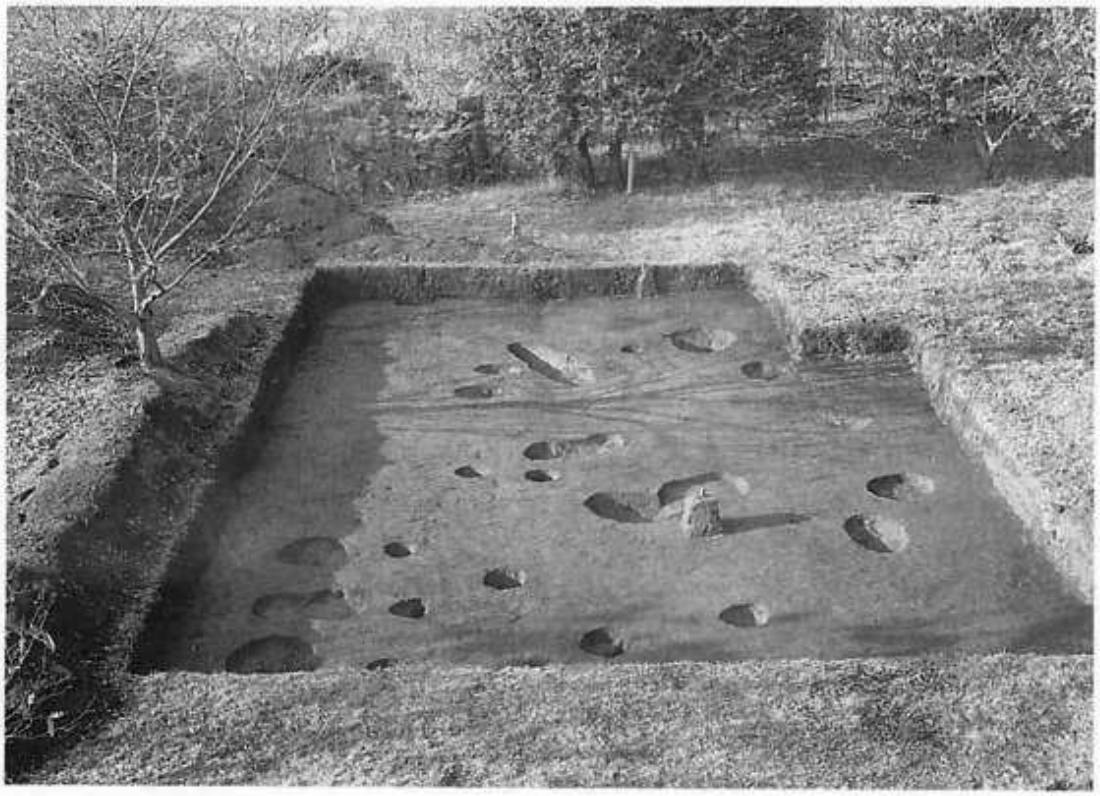
26号土坑



28号土坑



高根遺跡調査区全景



高根遺跡調査区全景

図版 6

高根遺跡調査区

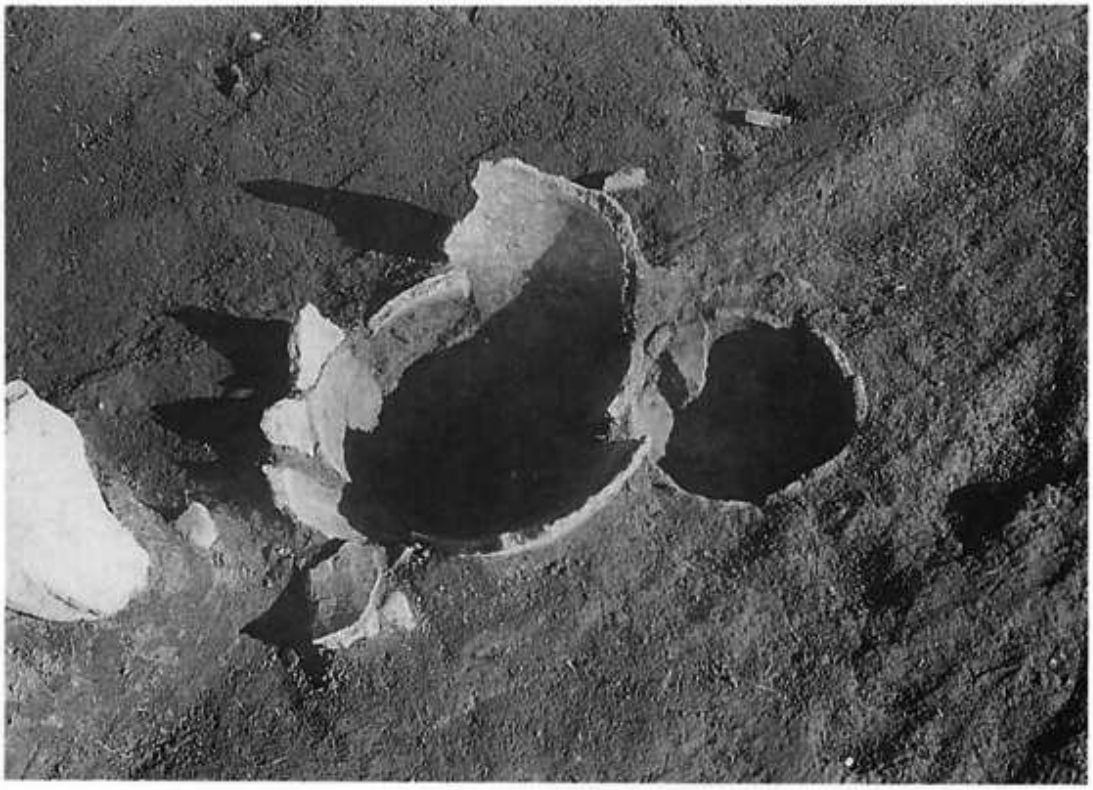
6号土器

7号土器

4号土器

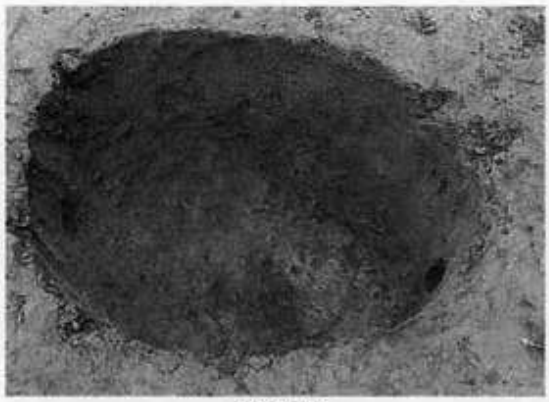
8号土器

1号住居跡



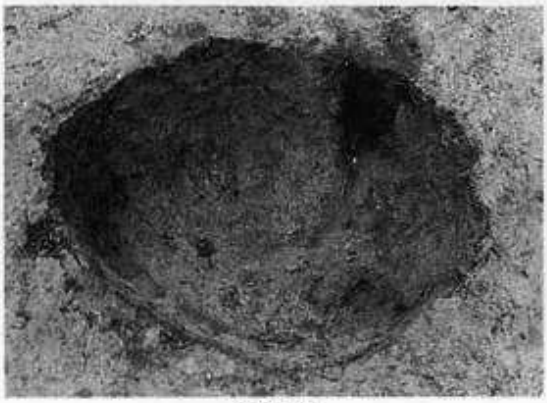
1号住居跡埋甕

図版 8



8号土坑

10号土坑

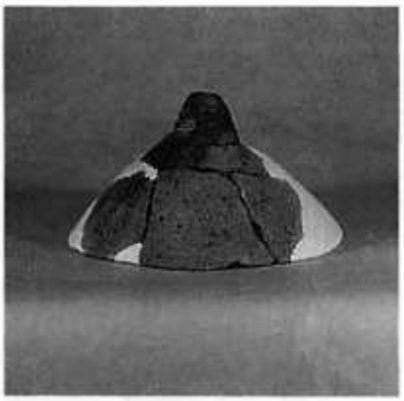


9号土坑

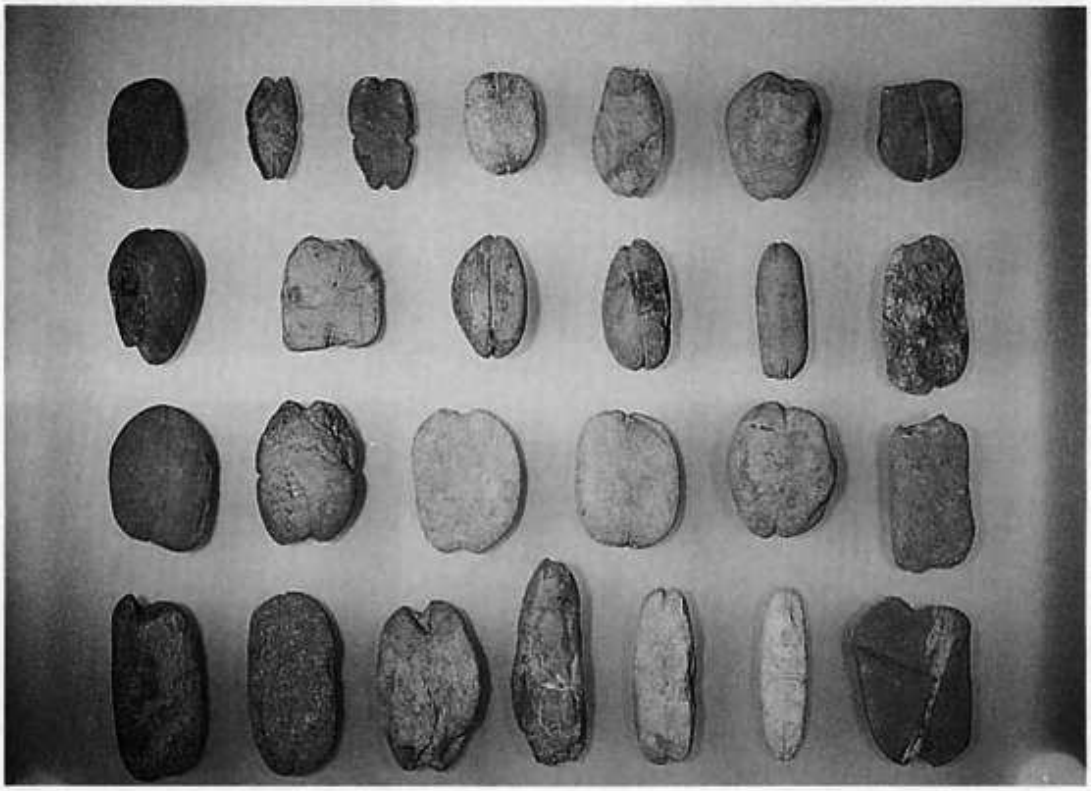
11号土坑

12号土坑

図版 9



図版 10



八木遺跡全景

1号住居跡跡

図版 12

1号埋甕

平成2年3月25日　印刷
平成2年3月30日　発行

狭山市文化財調査報告
狭山市埋蔵文化財調査報告書9

発　行　埼玉県狭山市教育委員会
埼玉県狭山市入間川1-23-5
電話0429（53）1111

印　刷　光版社印刷株式会社
埼玉県狭山市入間川3-3-3
電話0429（52）2358

報告書抄録

ふりがな	さわだいいせき／たかねいせき／ばちぎいせき
書名	沢台遺跡／高根遺跡／八木遺跡
副書名	
巻次	狭山市文化財報告17
シリーズ名	狭山市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	9
著者氏名	小渕良樹・水越佳宏
編集機関	埼玉県狭山市教育委員会
所在地	〒350－1380　埼玉県狭山市入間川1－23－5　　TEL04－2953－1111
発行年月日	西暦1990（平成2）年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
さわだいいせき 沢台遺跡	さいたまけんさやまし 埼玉県狭山市 いるまがわ 入間川1752-1他	22	79	35.86027	139.418459	19840330 ～19840628	6,000	公共事業
たかねいせき 高根遺跡	さいたまけんさやまし 埼玉県狭山市 かしわばらあざたかね 柏原字高根864-2他	22	62	35.88054	139.391375	19840815 ～19841210	2,096	公共事業
ばちぎいせき 八木遺跡	さいたまけんさやましおおあざさい 埼玉県狭山市大字笹井 あざばちぎ 字八木2694-1	22	68	35.84756	139.367688	19870901 ～19870919	207	公共事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沢台遺跡 第1次調査	集落跡	縄文・奈良・平安時代	土壙　34基	縄文土器	
高根遺跡 第1次調査	集落跡	縄文時代	住居跡　1軒 単独埋甕　5基 土壙　13基 ピット群	縄文土器、石製品	
八木遺跡 第2次調査	集落跡	縄文・奈良・平安時代	住居跡　1軒 屋外埋甕　1基	縄文土器	

【正誤表】

沢台遺跡／高根遺跡／八木遺跡
（狭山市文化財調査報告17）

ページ	行	誤	正
例言	3行目	あったて	あたって
2ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	46 坂上遺跡	22029	22030
	48 上中原遺跡	22089	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
16ページ	1行目	9月5～3日	9月5～8日
21ページ	3行目・4行目	深さ0.2cm	深さ0.2m
47ページ	13行目	面積221㎡	面積207㎡
50ページ	13行目	深いところでは凹凸	浅いところでは凹凸
図版11	2枚目説明	1号住居跡跡	1号住居跡